公共政策研究科
設立十周年記念
シンポジウム報告書

「大学院におけるライティング教育の意義」

2022 年 11 月 26 日開催

主催　法政大学大学院公共政策研究科

ご挨拶

本報告書は、昨年（2022年）11月26日に行った、法政大学大学院公共政策研究科の設立10周年を記念するシンポジウムの記録です。10年の歩みを振り返ってこれからを展望すべきシンポジウムにおいてテーマとしたのは、ライティング教育でした。2021年にプレ10周年のシンポジウムを行いましたが、その際の議論で、社会人大学院におけるアカデミック・ライティングの重要性が浮かび上がったからです。

この10年、教職員は公共政策研究科を通じて高度な知見と能力を持った社会人の育成に努力してきましたし、院生たちも自らの知力の向上とキャリアアップを目指して頑張ってきて、公共政策研究科は修士博士ともに多くの修了生を輩出してきて大きな成果を上げてきたと思います。しかし同時に、それぞれの院生が持っている本来の力を学術論文として客観的に表出してもらうことにおいて十分であったかといえば、いろいろな反省点があります。そうした気分を持っていたところへ、ライティング教育という明確な論点を突きつけられたのです。

私たちは、すでにライティング教育に早くから取り組んで大きな成果を上げてこられた早稲田大学のアカデミック・ライティング教育部門に部門長の佐渡島紗織先生（教授）を訪ねて教えを乞い、また自分たちでも勉強と議論を重ねてこのシンポジウムを企画しました。

このシンポジウムを開催することが公共政策研究科にとって果たしてまたどのような意味でこれからの出発点となったのか、あらためてこの報告書を通じて振り返ってみたいと思います。この報告書をご覧になっている皆様にとっても、社会人大学院におけるライティング教育、さらには日本の高等教育におけるライティング教育について考えるヒントが若干なりとも含まれていればうれしく思います。

これからも公共政策研究科は、都心に立地する政策系社会人大学院としてその社会的使命を果たしてまいります。

この報告書の作成に関わってくださった方々、佐渡島先生をはじめ登壇者の皆様、文字起こしや編集の労をとってくれた院生の皆さん、そのほか様々なことについてご助言やご協力をいただいた、研究科執行部の先生方と大学院課の方々をはじめとする教職員の皆さんに、心から感謝申し上げます。

公共政策研究科の教職員、院生、修了生の皆さん、さらには広く全国の高等教育の関係者にとって、この報告書がささやかな問題提起となれば幸いです。

2023年1月

法政大学大学院公共政策研究科

研究科長

名和田是彦

第１部 開会のご挨拶

法政大学大学院公共政策研究科
名和田是彦

本日は、オンライン参加の方々も含めて、多数ご参加いただき、誠にありがとうございます。

昨年度も周年記念のシンポジウムを行いましたが、これはいわばプレ企画でありまして、本年度が本番の10周年です。

手元の手帳を見ますと、2010年の秋から設置準備委員会が始まったようで、2年間弱ほどの設置準備を経て、本研究科は2012年4月に開設されました。私も、それから、このあと挨拶をいただく廣瀬総長も、設置準備委員会の委員として、設置準備に関わりました。廣瀬先生は、委員長として取りまとめを担われました。

社会人を受け入れている政策系の大学院は、当時も今日も全国的にたくさんありますが、法政大学の学内でも、複数存在していました。これらを全部一本にするというのは、専門分野の性質上なかなか難しく、適切でもないと思いますが、一本にしたほうが対外的にも分かりやすく、内部的にも効果的であると考えた研究科ないし専攻が集まり、公共政策研究科をつくりました。多摩校地の社会学部を基礎としていた政策科学研究科、人間環境学部を基礎としていた環境マネジメント研究科、それに私が所属しておりました、政治学研究科の中の社会人向け政策研究プログラムであるHPS、この三つが合流し、公共政策研究科が設立されたわけであります。

日本の他の大学院と同様、政策系社会人大学院での学生集めにはなかなか厳しかった時期もありました。社会人で修士課程に入学して学び直そう、キャリアアップを図ろう、博士後期課程に進んで、場合によっては研究職への転進を図ろう、といった学生が定員を充足するほどには集まらなかった時期もありました。他方で、首都圏で、博士後期課程に社会人を受け入れている大学院はあまりなく、どうしても本研究科に流れてくるという力学があるらしく、大幅な定員超過をして文科省から是正意見を受けるという苦渋の時期もありました。

しかしやはり都心に位置しているという地の利を活かし、我々教職員と院生たちも努

力して、現在では、修士課程、博士後期課程とも、定員充足率はほぼ100％で適正に推移しています。

この10年ほどの間に、修士・博士とも多くの人に学位を授与し、人材を社会に送り出したことは、我々の誇りとするところです。

しかしそれは教員にとっても院生にとっても苦難の道でもありました。昨年のプレ10周年シンポジウムでは、この誇りとするところと苦難と感じたこととを振り返るべく、3人の博士後期課程修了者・博士号取得者を招いて、ディスカッションを行いました。その中で、苦難の核心、少なくとも、核心の重要な一つが浮かび上がってきました。

それが、本日テーマとしているアカデミック・ライティングの問題です。

学術的な文章を作成するための研究指導というのは、昔から教員にとって苦労の種だったようで、チラシにも引用しておりますが、1930年に既にそうしたことを嘆いている先生がおいででした。

私も、何人かの修士課程、博士後期課程の院生を受け持ってきましたが、良い文章をすんなり書ける人もいれば、そうでもない人もいました。いや、論文指導の場面に限りません。公共政策研究科では、サステイナビリティ学専攻が設置された2015年度から、博士後期課程の院生たちに対して、博士論文提出要件として、査読付き論文2本を要求するようになり、論文提出先として紀要である『公共政策志林』も認めました。したがって、『公共政策志林』の編集において、査読体制を整える必要が出てきて、我々教員は、院生たちの投稿を毎年査読することになりました。ここでもまた、学術的文章としていかがなものかという投稿に査読者は悩まされているのが実情です。

先行研究を勉強する中で学術的な文章というものに十分触れているのだから、それの真似をすればいいのに、なぜできないのか。また、職場では、企画書や報告書などそれなりに論理的な文章を書いているのだから、それをちょっと学術的なルールにしたがって転換すればいいはずなのに、なぜできないのか。主語がない文を書いてなぜ平気でいられるのか、他動詞を用いながら目的語を明示しないでなぜ平気でいられるのか。一定の主張、必ずしも万人にとって明証的ではない主張をしているのに、理由も示さず、注もつけないで、なぜ平気でいられるのか。

不思議に思いながら、何度も面談を繰り返していました。

しかしこれは、院生たちをなじっているのではありません。問題はこのような課題を放置してきた教員側の教育・指導体制にありそうだからです。

昨年のシンポジウムでアカデミック・ライティングというテーマが浮上し、研究科執行部や本日登壇される方々と今年度の企画を準備していく過程で、教員側の、就中私の研究指導の仕方が、伝統的、手工業的、非科学的にすぎたらしいことを次第に知るようになりました。

学術的文章が書けるようになるためには、それ固有の方法論が必要であり、それ固有のプログラムが必要であると知りました。

そこで、この分野での第一人者のお一人である早稲田大学の佐渡島先生のもとに押しかけ、本日の基調講演をお願いするとともに、早稲田大学のライティング・センターをご案内いただきました。

佐渡島先生、誠にありがとうございました。

本日の基調講演とディスカッションを踏まえて、公共政策研究科として何ができるか、さらに考えてまいりたいと思います。

そのことは、博士号授与まで視野に入れた政策系社会人大学院である本研究科の、フロントランナーとしての位置を保ち、発展させていくための必要な礎石であると思います。

その意味で、本日は、責任者として単に座っているだけではなく、耳をそば立て、目を皿のようにして、議論に参加したいと思います。

このささやかなシンポジウムを開催するにあたりまして、基調講演者の佐渡島先生はもちろんでありますけれども、大学院課をはじめ事務職員の方々、院生会の方々、研究科の先生方に大変なご協力をいただきました。厚くお礼申し上げます。

このシンポジウムが、公共政策研究科の歴史の中に意味ある位置を占めることとなるよう期待しております。

実は昨年のプレ10周年は、合流した研究科の一つであります政策科学研究科の20周年でした。そして、来年度は、合流したもう一つの研究科である環境マネジメント研究科の20周年です。現在の研究科長としては、来年度も旧環境マネジメント研究科、すなわち現在のサステイナビリティ学専攻の皆様を中心に、また違った角度からの記念行事を発想していただき、公共政策研究科の歴史にさらに新しいページを追加していただければ幸いです。

法政大学大学院公共政策研究科
渡邊誠

皆さんこんにちは。サステイナビリティ学専攻の渡邊と申します。どうぞよろしくお願いいたします。このシンポジウムに皆様方のご参加をいただき本当にありがとうございます。まずは心から御礼を申し上げたいと思います。

ただいま研究科長からこの公共政策研究科についての成り立ち等について説明があったと思います。現在この研究科では公共政策学専攻とサステイナビリティ学専攻という二つの専攻を配置して教育・研究活動を展開しています。特に私はサステイナビリティ学専攻に所属しています。先ほど研究科長からこの専攻の前身としての旧環境マネジメント研究科につきましても話がありました。私からはこの公共政策研究科の中で展開されているサステイナビリティ学のイメージを皆様方にご理解いただくために、大変恐縮なのですが、サステイナビリティ学専攻を中心に説明をさせていただければと思っていますので、どうかご理解をいただければ幸いです。

この機会に、サステイナビリティ学専攻のこれまでの経緯を少し振り返ってみたいと思っています。今日は研究科として設立10周年を記念してのシンポジウムであるわけですが、この設立時期よりもさらに10年ほど前から学内における教育・研究組織に関わるいろいろな動きがありました。今日のサステイナビリティ学専攻の原点は、1999年市ヶ谷キャンパスに人間環境学部ができたことにあるだろうと考えています。今から23～24年ほど前の話になるわけです。この学部が設置されて4年間の運営が終わって第1期生が卒業する時期とタイミングを合わせる形で、当時の社会科学研究科の中に環境マネジメント専攻が設置された経緯があります。このことがこの専攻の起源になるであろうと思っています。

当時この専攻は環境経営プログラムと国際環境協力プログラムという二つのプログラムの構成になっていました。環境経営プログラムとしては環境経営、環境管理、環境会計をはじめとして企業経営や行政などに関わる問題を、国際環境協力プログラムでは国際協力、社会開発など国際的な観点からの諸問題を扱っていくような内容でした。この専攻では地球環境問題を実践的な立場から研究していくことが主なテーマであり、生涯学習の一環として社会人の方々を学生として迎え入れて研究を進めていく高度職業人養成が柱になっていたと思います。当時社会科学研究科には様々な専攻がありましたので、その後間もなく改組されこれらが独立しました。この時期に環境マネジメント研究科も独立研究科として新たに誕生したわけです。ですから環境マネジメント専攻は2003年に開設されていますので、これは今からおおよそ20年ほど前のことになるわけです。当時、学際的な観点から環境問題の改善に貢献できる人材の養成を目指しており、その意味では地球環境問題の解決へ向けた研究と教育の基盤がつくられた時代であったように思います。

その後ですが、先ほど研究科長から紹介がありましたように、2012年に公共政策研究科がスタートしました。公共政策という広い枠組みの中の一つの領域として、それまでの環境マネジメント研究科の経験がそこで新しく展開されることになったわけです。この環境マネジメントに関連するコースとして環境マネジメントコース、国際パートナーシップコースが設置され、公共マネジメントコース、市民社会ガバナンスコースと共に公共政策研究科を構成しました。その後2016年にその二つのコース（環境マネジメント、国際パートナーシップ）がサステイナビリティ学専攻として融合し一つの専攻になりました。サステイナブル・マネジメント、グローバル・パートナーシップ、ローカル・サステイナビリティ、環境法務、環境サイエンスという五つの枠組みを基礎とした形で、様々な領域を融合するような学際的研究へと幅を広げて再スタートしました。ですから公共政策研

究科が設置されてからの10年は、カリキュラムの拡大・充実を含めて、環境研究からサステイナビリティ研究へと研究対象が広がってきた時期だったと思います。

その中で、私が強く感じていることがあります。これまで修士課程、博士課程の学生と研究を進めていく中で、やはり我々のような学際的な教育・研究を行っていくような場においては、社会人学生の皆さんの持っているポテンシャルが極めて重要だということです。社会人として入学される学生の方々は、様々な研究課題を抱えています。それを学術的にどう広げ研究成果をまとめ上げていくのか、ということが課題となっているわけです。社会人学生の多くは具体的な課題を持たれている方がほとんどです。ですから我々の立場からは、共同研究を行っていく上で、あるいは研究指導をしていく上で教員自身が自分のもつ専門性を拡大して近隣領域へ広げていくという発想が大事なことだと考えています。社会人の方々の問題意識はこの分野の研究を活性化させるためには重要であり、それに大いに期待しているということを申し上げたいと思っています。社会人学生の持っているポテンシャルができるだけ開花されるようにと願っています。

その意味でアカデミック・ライティングを学ぶことは、実は極めて重要なことであるように思っています。我々としても社会からの要請にさらに応えていくように努力しなければならないと思っていますので、皆様方のご協力を今後ともいただけますようお願い申し上げます。本日は最後までどうぞよろしくお願い致します。

私からは以上でございます。どうもありがとうございました。

法政大学総長
廣瀬克哉

ご紹介いただきました、法政大学総長の廣瀬克哉と申します。

実は大学院の所属としては、私自身も公共政策研究科の所属の教員であります。そして、公共政策研究科は10年前に再編によって発足したわけでありますが、私はその新しい公共政策研究科の設置における設置準備委員会の委員長を務めておりました。ただその後、いろいろな学内での役割のやりくりがございまして、現在は総長という役割を担っておりますけれども、研究科の発足については、自分が当事者として取り組んだものというふうに鮮明に記憶しております。

10年というタイムスパンをイメージしてもらいやすいようにということで、一つのエ

ピソードをご紹介しますと、発足の約１年前に、すでに既存の研究科を再編統合して公共政策研究科にするということから、学内の担当予定の教員が集まりまして、一堂に会して、ちょっと大げさに言えば決起集会みたいなものをやりました。それが2011年３月11日金曜日の午前中で、午前中にこんな研究科にしようということをお互いに確認をし、こういう準備がここまでできたということを報告し合った後、昼食会を開いて解散をした後、あの東日本大震災。このキャンパスでは震度５強でありましたけれども、そういうことを経験した。そこからの歩みというくらいのタイムスパンをイメージしていただければと思います。

発足以来、大勢の社会人院生、若者たちがこの研究科に学んでいってくれましたし、現在も多数在籍をして学んでおられます。そしておそらく、当初思った以上に、こういうニーズが非常に強いんだなということを印象付けられたのは、社会人高度専門職のための修士課程というイメージが当時はまだまだ強かったのですが、実は博士後期課程も学びたいと、博士の学位を取るところまでとことん学んでみたいという、そういう希望というか、意欲を持たれる方が想像していたよりもたくさんいらっしゃるということを実感してまいりました。

それなりの人数の博士号の授与をすでに行ってきております。修士課程はやはり、２年といいますけれども、４月に入学されて、修士課程の標準修業年限でいうと１年９か月くらいでもう論文を出すわけですから、２年はないわけです。その２年弱の間にできることというのは、かつ社会人であれば、昼間は仕事もお持ちの上で、夜間、それから週末などを使って研究をされるとしても、やはりその時間でできることというのは、どんなに能力の高い方であっても一定の限界というのは当然出てきますから、やはりその限界を超えてもっと自分の持っているテーマについてとことん突き詰めたいと思われる方が大勢いらして、その結果として博士後期まで学びたいという方が大勢いらっしゃるのだということを実感しております。それにできるだけ応えていきたい。それに応えていけることが、研究者養成という、古いといいますか従来型の大学院のイメージを超えて、博士後期課程にもそういう形で現場の課題感覚を持って、それに本気で取り組んで一定の水準まで研究成果としてまとめ切りたいんだという人の意欲に応えていける場としての大学院というものも、今強く求められているのだということを実感している次第です。

他方で、この企画のチラシにあった、あれは100年前の旧九州帝国大学の先生のぼやきですよね、それがまだ確かに今も自分たちも感じると正直思います。ということは、普遍性のあるテーマであるともいえるでしょうし、100年解決できないことはなかなか解決は大変だぞということでもあるわけですけれども、だから「もう諦めて、こういうものだと割り切りましょう」ということでは進歩はないわけで、ならばそれをいろいろな形で打開する試みを現におやりになっている方々から学びたい。と同時に、ここで学んだ人たちは、実際に、ならばどのようにして、学位を得られる研究論文というものをまとめていったのか、ということも共有しながら、これからのあり方について検討するということが、

10年という節目において、次のステップを歩んでいくために不可欠ではないかと感じているところです。

本日の検討、学び、そして次への展望というものが実りあるものになることを期待しております。

本日はご参加ありがとうございます。以上で総長としての挨拶にかえさせていただきます。どうもありがとうございます。

司会
法政大学大学院公共政策研究科教授
渕元初姫

渕元

廣瀬総長ありがとうございました。

引き続きまして基調講演に移りたいと思います。ご講演をいただきます佐渡島紗織先生は早稲田大学国際学術院教授、アカデミック・ライティング教育部門長でいらっしゃいます。アメリカのイリノイ大学にて博士号を取得された後に帰国をされて国語教育をご専門とされながら、ライティング教育をご研究されていらっしゃいました。本日は「大学院におけるライティング教育の意義」と題しましてアカデミック・ライティングが目指すところや、また早稲田大学、ライティング・センターにおける実践などについてお話をいただきます。佐渡島先生どうぞよろしくお願いいたします。

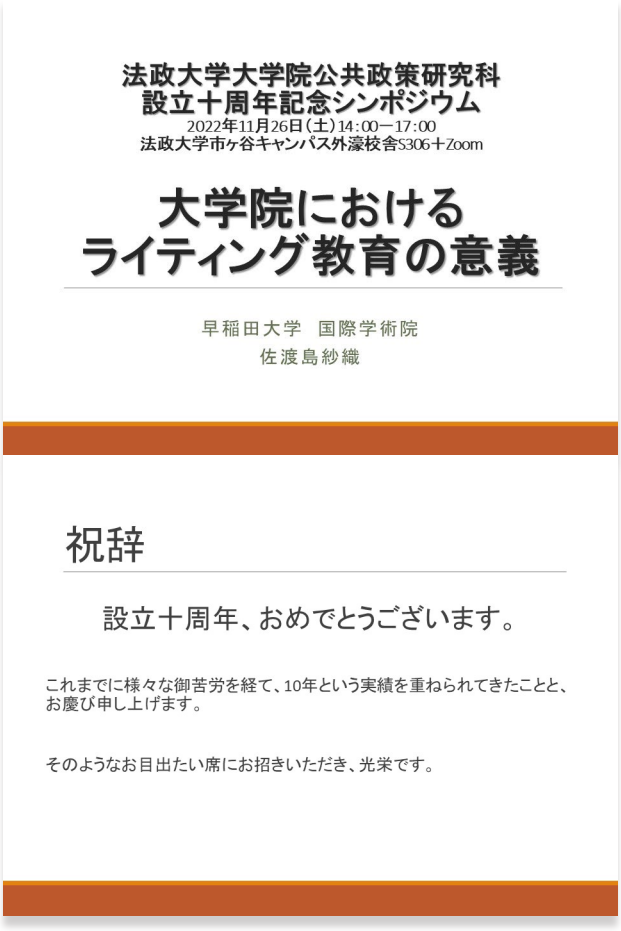
第２部　基調講演
「大学院におけるライティング教育の意義」

※ 以下登壇者のスライドの詳細（拡大したもの）は本冊子後段の資料編にてご参照下さい

早稲田大学国際学術院教授
アカデミック・ライティング教育部門長
佐渡島紗織

皆さんこんにちは、佐渡島です。ご紹介ありがとうございます。大学院におけるライティング教育の意義ということでお話しさせていただきます。

まずは設立10周年おめでとうございます。これまでに、先ほどの名和田先生、渡邊先生のお話にもあったように、色々なご苦労を経て10年という実績を重ねられてきたことと思います。けれども、こうして存続して、そしてさらにご発展されていてお慶び申し上げます。おめでたい席に呼んでいただきまして大変光栄です。今日はありがとうございます。



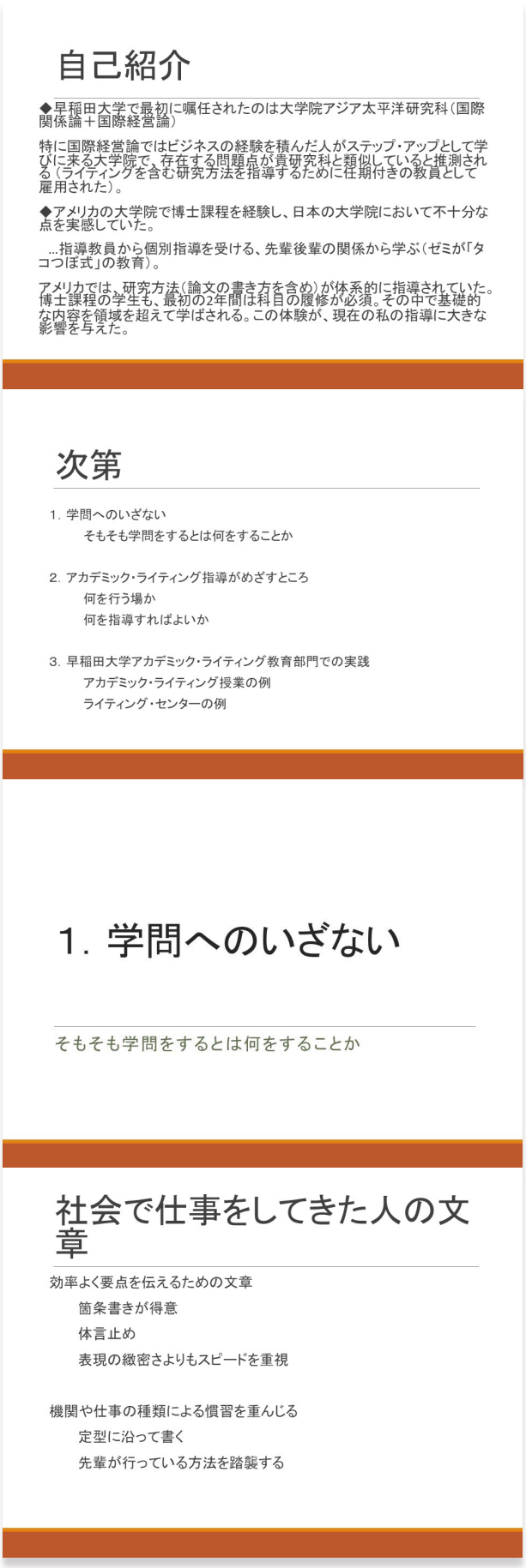
私は早稲田で最初に嘱任されたところがアジア太平洋研究科という大学院でした。ここは、国際関係論と国際経営論の学生さんが学ぶところで、特に国際経営論の方ではビジネスの経験を積んだ人たちがステップアップとして学びに来る大学院でした。ですからそこで存在する問題点は、こちらの研究科と類似している部分があるのではないかなと推測されます。ライティングを含む、研究方法を指導してくださいということで最初に私は任期付きの教員としてそこに雇用されました。

日本で修士をやったんですけど、その後アメリカの大学院で博士をやって、それを経験したばかりだったので、日本の大学院で不十分な点をすごく実感していたところだった

んです。日本では指導教員から個別指導を受けて、あと先輩後輩の関係から学んでいますけれども、つまりちょっとゼミがタコツボ式のところがありますよね。けど、アメリカでは研究方法の授業が論文の書き方を含めてですけれども、非常に体系的に指導されていたんですね。色々なゼミの学生がみんなで色々な研究方法論の授業を取りました。で、インタビューをする専門家とか、観察をする専門家とか、研究方法においての専門家が、コースワークの中でたくさん講義をしてくれて、非常に厳しい中でそういうのを学びました。博士の学生も最初の 2 年間は科目の履修が必須なので、基礎的な内容、研究方法を含めた内容を領域を超えて学びました。

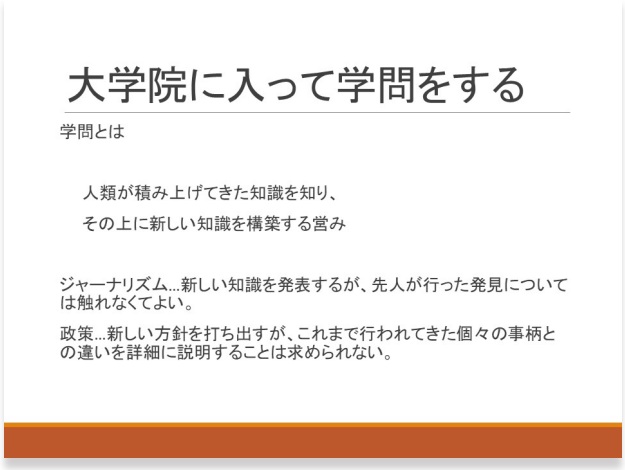
この体験が私の現在の指導に大きく影響を与えています。今日はそうした経験をもとに次の三つの話をしたいと思っています。まず、社会人の方々が多く集まるところなので、学問へのいざないが必要だという点、そもそも学問をするとは何をすることかをまず共有したいということです。それから、アカデミック・ライティング指導が目指すところは何なのか、何を行い、何を指導すれば良いのかという点、それから最後に早稲田のアカデミック・ライティング教育部門でやっていることをご紹介します。ライティング授業の例とライティング・センターの例です。早稲田の例は一例としてご参考までに聞いていただければと思います。早稲田の学生さんに合うように作られたものなので、きっとこの10年間の皆さんの積み重ねの上に参考になるところとならないところがあるのではないかと思っています。

では最初の学問への誘いの部分です。社会で仕事をしてきた人たちの文章を、最初に嘱任された大学院でビジネスの人たち



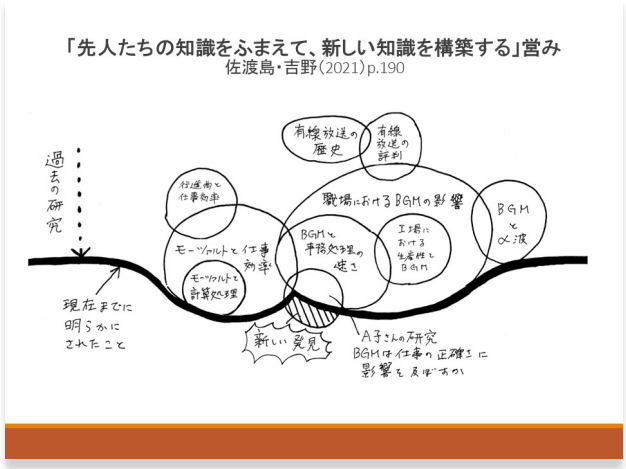
の文章を見て思ったことですけれども、効率よく要点を伝えるための文章を書くことがとても得意ですよね。ですから、皆さん箇条書きが得意。それから体言止めを多く使うとか、表現の緻密さよりも早く書いて早く提出して早く共有すると、スピードを重視する。そういう傾向にあるなあということをその時感じました。

また、機関や仕事の種類によって慣習があって、その定形に沿って書く、先輩が行っている方法を踏襲する。こうした特徴があるなと感じていました。で、先ほど渡邊先生のお話にもあったんですけれども、社会で積んだ経験を学問で、持ってる問題意識を生かす。これは実体験から出てくるものなので、非常に大きなポテンシャルがあるとおっしゃったんですけど、私もその通りだと思います。研究っていうのは誰かを幸せにするためでなければやった意味がないと私は思っているので、この問題意識を持ってる方達、非常にそれが重要な土台になると思います。



ただ、大学院に入って学問をするというのは、社会での仕事と大きく違いますよね。そこを最初に押さえる必要があると思います。学問とは人類が積み上げてきた知識を知り、その上に新しい知識を構築する営みであると、これが大前提で、まずは集まってきた人たちにこれを確認する必要があると思います。

ジャーナリズムとどう違うかっていうことが話題になることがありますけれども、ジャーナリズムは新しい知識を発表するんですけれども、先人が行った発見については特に触れなくても良いものです。あるいは政策、これは私はちょっと専門外でよく知らないところもあるんですけれども、もちろん新しい方針を色々と打ち出すんでしょうけれども、それまでに行われてきた個々の柄事、事例との違いを詳細に説明することは求められないのではないかなと思います。こうしたことが分野によって少しずつ違って、学問とは何なのかということをまずは共有したいものだと思います。

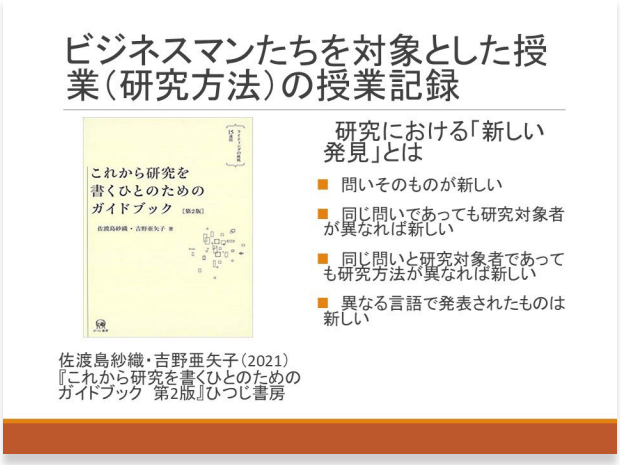


これは、私がよく説明のために使う図なんです。「学問が先人たちの知識を踏まえて、新しい知識を構築する営み」なのだということが佐渡島・吉野という本の、ここにある、左側の『これから研究を書く人のためのガイドブック』の 190 ページにあるんですけれども、この図がわかっていればこの本 1 冊わかったことになりますよ、というふうにして使っている図なんです。

架空の例をここで書きました。A子さん

という人が修士、博士の研究をしようとしていて、上から下に見ていくと、有線放送の歴史、有線放送の評判、過去に先人がした研究の範囲を丸で示しているんですけれども、その下に行くと職場におけるBGMの影響について研究している論文があったとする。その中でBGMと事務処理の早さを研究してる人や工場における生産性とBGMの研究をしている論文などがある。右の方では、α波とBGMの関係についての研究をしている人がいる。モーツァルトと仕事の効率など、…こういうふうにして先人たちが色々なことを発見してきて、それを人類の知識として発表してきましたけれども、この下の方の太い黒い線を、これが現在までに明らかにされてきたことだとします。そうすると、学問は新しい知識を構築する営みなので、A子さんはBGMと事務処理の速さについてはもう研究結果が出ているので、自分はBGMは仕事の正確さに影響を与えるかどうかということを調べようと決めました。つまり、この斜線で引いてあるところが、A子さんが発表できる新しい発見ということになります。修士・博士はもちろんのこと、卒業論文でもこの新しい発見を求めるんだということを、私は学生に伝えます。

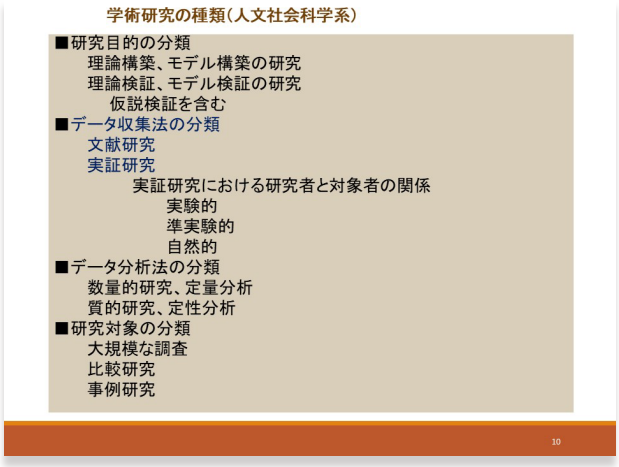
実は、このひつじ書房の本が、その当時、私がビジネスマンたちを対象とした授業の授業記録なんですね。15 週間でできるように作ってあるんですけれども、その中に研究における「新しい発見とは」というところがあります。問いそのものが新しい場合はもちろん新しい発見ですけれども、同じ問いであっても研究対象者が異なれば新しい発見となるんですよということを言います。学生たちはそんな、人類に新しい知識を付け加えるなんて、自分には到底できないってこういうんですけれども、いろんな新しさがあるんです、という説明ですね。同じ問いと研究対象者であっても、研究方法が異なれば新しい発見、あるいは異なる言語で発表されたものも新しい発見とみなされる、ということを押さえたりします。



それぞれの修士論文や博士論文の研究デザインをする前に、研究を分類することができると良いと思います。まず、学術研究には種類があるということを教えると、とても学生たちが、いろんな論文を読みやすくなるようです。

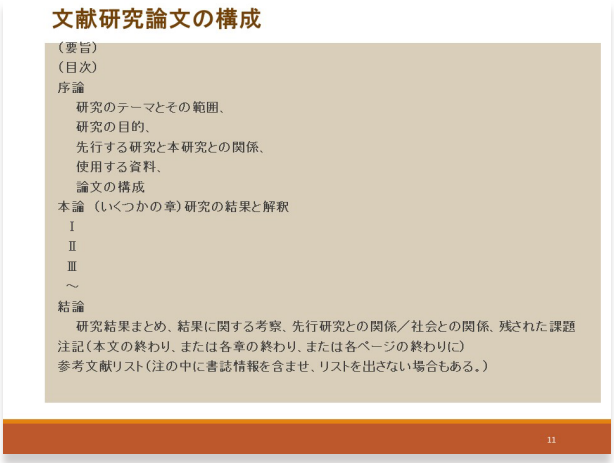
ここでは人文社会科学系の論文に限ってお話しするんですけど、まず研究目的は次の二つくらいに分類できる。理論を構築するものと検証するもの。このどちらにも、まだ行かないような論文もあります。それから、データを収集する方法は二つある。文献研究と実証研究です。文献研究は、机の上に並べたデータだけをだけを分析してできるもの。実証研究は自分でどこか体験しに行って、出かけて行ってデータを収集するものです。で、実証研究の中は実験的、準実験的、自然的と、これ三つに区分されるのではなく、グラデーションの関係として区分ができる。それからデータ収集法とは別に、集めたデータをどう分析するか。これは大きく分けると数量的と質的に分けられる。それから研究対象とい

うことに着目すると、これも大規模調査。世論調査とか出口調査とかですね。あるいは比較研究、何かの観点から対象を比較する。事例研究、比較しないで固有性を見る。大体この三つあるんだというふうに説明します。

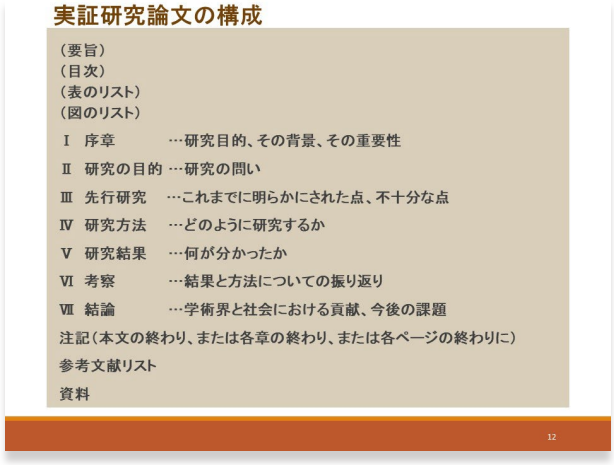


非常に大雑把なんですけれども、これを頭に入れておくと、どんな論文も大体読める、読みやすくなるというふうに学生が言いますので、これでいろんな論文を見て、どれに当てはまるのかを、種類を判定する授業などをしています。

これがわかりましたらこの青いところですね。データ収集法の分類、文献研究と実証研究があるということ。大体論文はこの文献研究か実証研究かによって構成がそれぞれある、違うということを次に説明します。



こちらが文献研究論文の構成です。自分でデータを作らない、すでに存在するデータを使って分析するというものです。文献研究の論文は大雑把に言うと序論、本論、結論、このように書かれています。ここに書いてあるように、序論にはこうしたこと、つまりテーマと範囲、研究目的、先行研究と本研究の関係、使用する資料、それから論文の構成はどうなるかってことを書く。論文の構成に沿って、本論では自分の研究結果をいくつかの章立てにして発表する。そして結論でまとめ、考察、先行研究や社会との関係、残された課題などを言う。大体文献研究はこういう構成になっているかと思います。



一方の実証研究は、序章、研究の目的、先行研究、研究方法、研究結果、考察、結論、…この流れで行うという定形があると思います。わたしはイリノイ大学の教育学研究科で博士論文を書いていたのですけれども、だいたいの学生が実証研究をやっていました。で、面白いと思ったのが、皆この形で論文を書いているので、院生たちとですね、たとえば廊下ですれ違って、「ハーイ、サオリ、元気？」「今どこ書いてんの？」「今ね、第３章なの。」「あー、あ

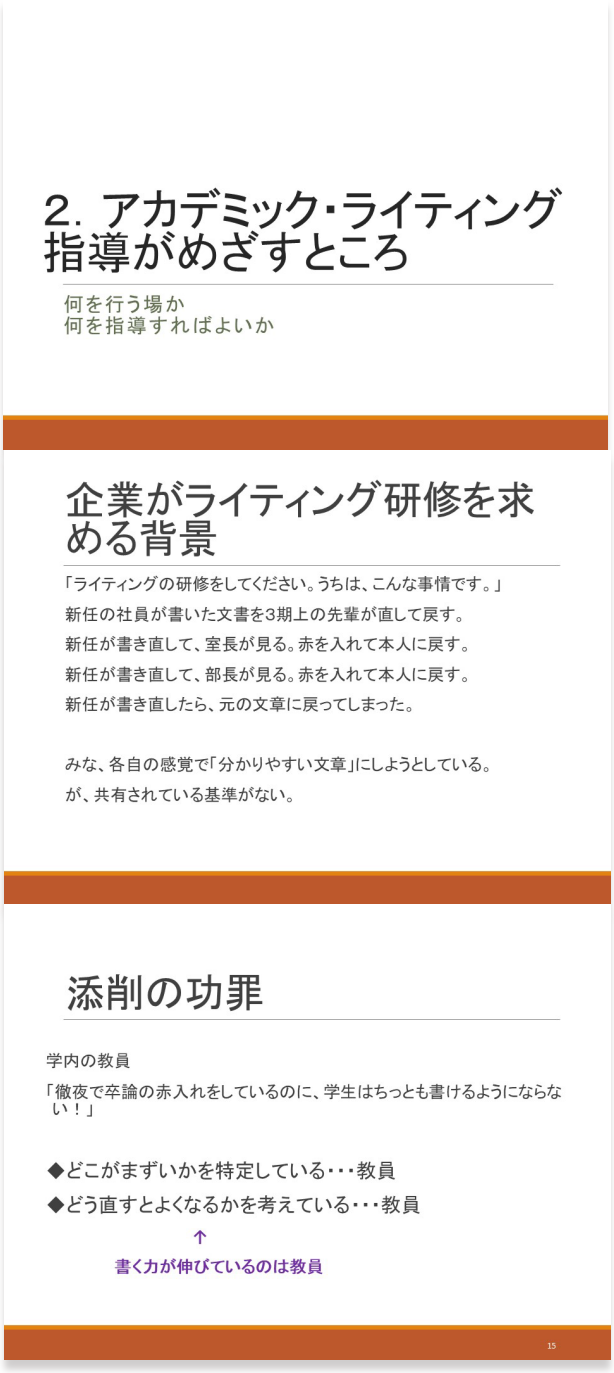
そこって一番めんどくさいとこよね。」っていうような会話ができるんですね。みんな第3章って言えば先行研究章ってわかっていて、認識が共有されていました。こういうふうに共有されていると、論文を読むのも早いし、論文というものがコミュニケーションの道具であるということが非常によく実感できました。これも日本の大学院生たちに教えています。

以上が学問へのいざないというところで、外でたくさん仕事をして来られた方はすごく具体的で良い問題意識を持っていらっしゃるので、こうした学問の性質というものを分かってご自分の研究をデザインできるようになると良いと思います。

では、次にアカデミック・ライティングが目指すとことについてお話しいたします。ある企業が私にライティングの研修をお願いするということで訪ねて来られました、ライティングの研修をしてください。うちはこんな事情です、というふうに話してくださったエピソードがあるんです。

新任の社員が書いた文章がまずいので、3期上の先輩が直して戻した。新任がそれを書き直して室長が見た。今度は室長が赤を入れて本人に戻した。室長の赤に基づいて本人が書き直して、部長が今度は見た。赤を入れて本人に戻した。で新任が書き直した。そしたら元の文章に戻ってしまったと言うんですね。こんな状況なんです。みんな各自の感覚で分かりやすい文章にしようとしているんだけれども、共有されている基準がないんですよ。それで研修をお願いします。というふうに頼まれました。

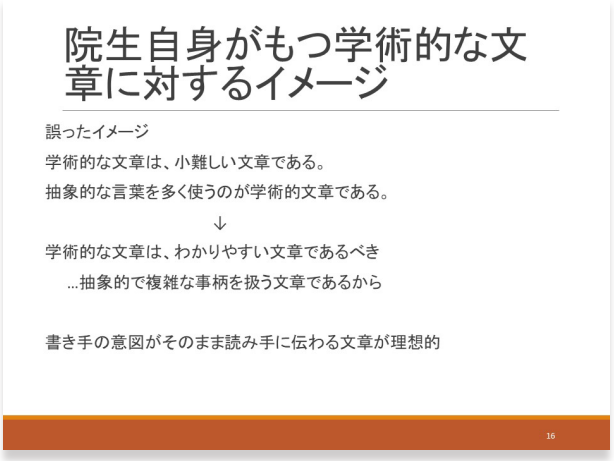
それから、学内で私は非常によく聞かれるんですね。「佐渡島先生、僕は徹夜で卒論の赤入れをしているのに、学生がちっとも書けるようにならないんですよ。どうしたらいいんでしょうか。」と。これは、添削をしていらっしゃるのは、どこがまずいかということを特定しているのはこの先生。それからどう直すと良くなるかも考えているのもこの先生なんですね。つまり書く力が伸びてるのはこの先生なんです。で、学生はああ、ここをこう直せばいいの



かと、やってもらったことを書き写して終わりにする傾向があると思うんです。

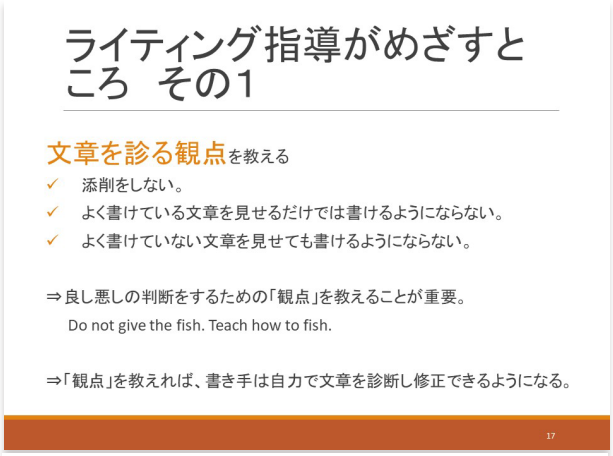
ですから、添削は手間がかかる割には学生の力は伸びないのではないかというのが、私の思っているところです。ただ、私は全く添削をしないというわけではなくて、こういう文章が私の研究室の棚の上に残っていくと恥ずかしいだろうなという卒論などは、修論もですけど、手を入れて添削はします。ただ、添削は手間がかかる割には有効ではないということです。

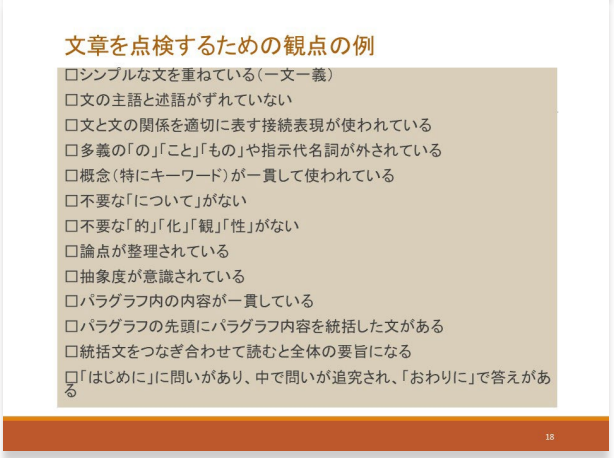
後ですね、院生さん自身が持つ学術的な文章に対する誤ったイメージもあると思うんですね。小難しい文章であると思い込んでいる人がいます。それから、抽象的な言葉をたくさん使うのが学術的な文章であるというふうに思っている人もいるんですけれども、学術的な文章は抽象的で複雑な事柄を扱う文章であるがゆえに、わかりやすく書くべきだということを押さえる必要があると思います。また、書き手の意図がそのまま読み手に伝わるような文章、それが理想的だというふうに押さえていく必要があります。



ではここからは、じゃあどうしたらいいのかということをお話ししたいと思います。ライティング指導が目指すところ、その1ですね。文章を見る観点を教える。これが非常に重要だと思ってきました。つまり添削はしない。しかし、よく書けている文章を見せるだけでは書けるようにはならない。あるいはよく書けていない文章を見せても書けるようにならないんですね。この良し悪しの判断ができるように、その観点を教えることが重要ではないかと思うんです。英語で諺があるそうです。Do not give him the fish. Teach him how to fish.ですね。これをすることがライティング指導の目指すところではないかと思います。観点を教えてあげると、書き手は自力で文章を診断して修正できるようになっていくわけです。

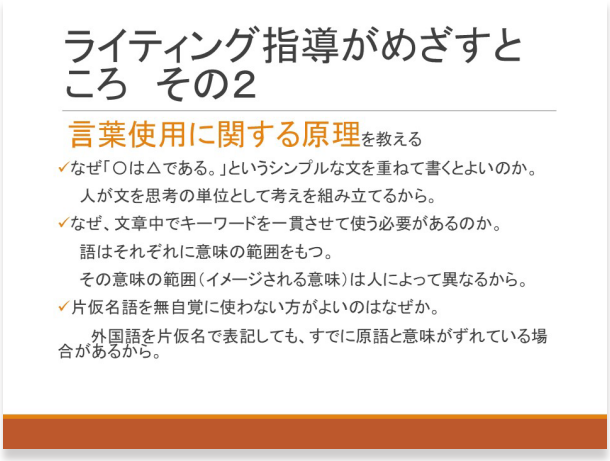
私のいるところではどんな観点を教えてるかということですけど、ここには書ききれないんですけれど、例えば一文一義。





シンプルな文を重ねる。主語と述語がずれていないようにする。先ほどの名和田先生がおっしゃっていた、主語すらない文が多いという問題。あと文と文の関係は接続表現で適切に結ぶ。多義の「の」「こと」「もの」を使わない。概念を一貫させる。不要な「について」を使わない。不要な「的」「化」「観」「性」を使わない。論点の整理。抽象度の意識。パラグラフ内の内容。先頭のトピック・センテンス、統括文をつなぎ合わせて読むと全体の要旨になる。「はじめに」に問いを書いて、中で問いが追究されて、最後に答えがある、など。まだまだありますけれども、こんなようなことを観点として教えています。

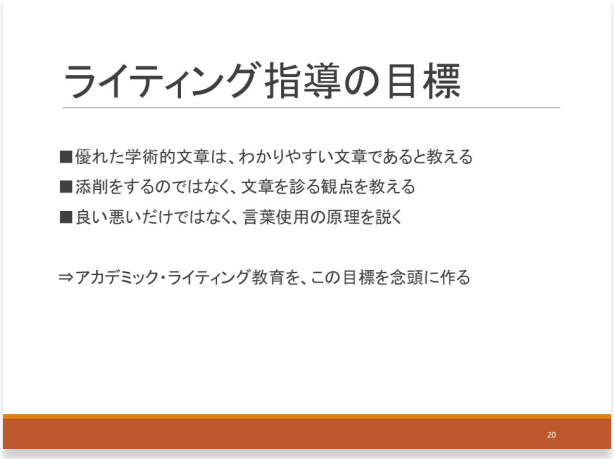
二つ目、ライティング指導が目指す点ですけれども、観点を教える際にですね、言葉の使用に関する原理を教える、押さえる必要があると思います。よくアカデミック・ライティングの本を見ると、一文は80字以内で書くのが良いっていうような、その出来上がった文章の結果だけを述べているものも目にすることが多いんですけれども、どうして何々は何々であるというシンプルな文を重ねると良いのかという、その原理を教える必要があると思うんです。これは、人が思考の単位として文で考えるから。世界中の言語は文が単位ですね。何々は何々である、命題ですね。これが人の考えを組み立てる基本だから。だから、一文一義が大事なんだとか。



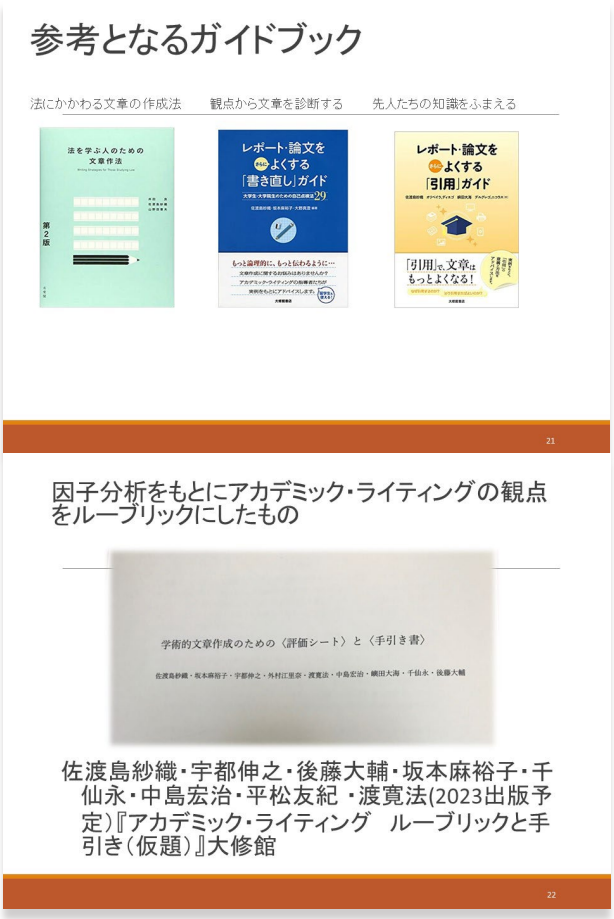
あるいは文章中でキーワードを一貫させて使う必要がなぜあるのかっていうことですけれども、語はそれぞれ意味の範囲を持っていって、辞書的な意味の範囲ばかりでなくて、その人その人によってイメージする範囲が違うということあります。例えば「明日の午後、私の研究室に来てくださいって言った時に午後何時頃に行きますか？」って学生に聞くと。「佐渡島先生がご飯食べ終わるのが1時だとしたら1時半ぐらいがいいかなと思うから、僕は 1 時半に行きます。」とか「私は午後って言われたら真ん中の 3 時を取ります。」とか。ある学部生は「明るいうちだったらいつでもいいんじゃないか。午後 4 時半ぐらいまでに行く。」とか言います。韓国の人に聞いたら「午後いらっしゃいと言われたら12時に行く。」って言うんですね。「先生に指導を受ける時は、食事をお供するのが韓国の風習だから12時に行きますね。」って言いました。このように「午後」という言葉一つ取っても、その意味する範囲が人によって違うわけです。で、それぞれの語がそのように読む人のイメージによって意味が取られていくので、だからキーワードを色々ぶらさないで一貫させて使う必要があるんだという説明をする必要があると思うんです。

片仮名を無自覚に使わないのはどうしてか、外国語を片仮名で表記しても、すでに原語と意味がずれている場合があるとかですね。こういう原理を説明すると、学生はよく理解してくれると思います。

ライティング指導の目標。まとめますと、優れた学術的文章は、分かりやすい文章であると教える。添削をするのではなく、文章を診る観点を教える。良い悪いだけではなく、言語使用の原理を説く。こういったことを目標において、頭において、アカデミック・ライティング教育をするとよいと思います。もうなされているかもしれませんけど、私が今までやってきたことの骨となるところはこのようなところでした。

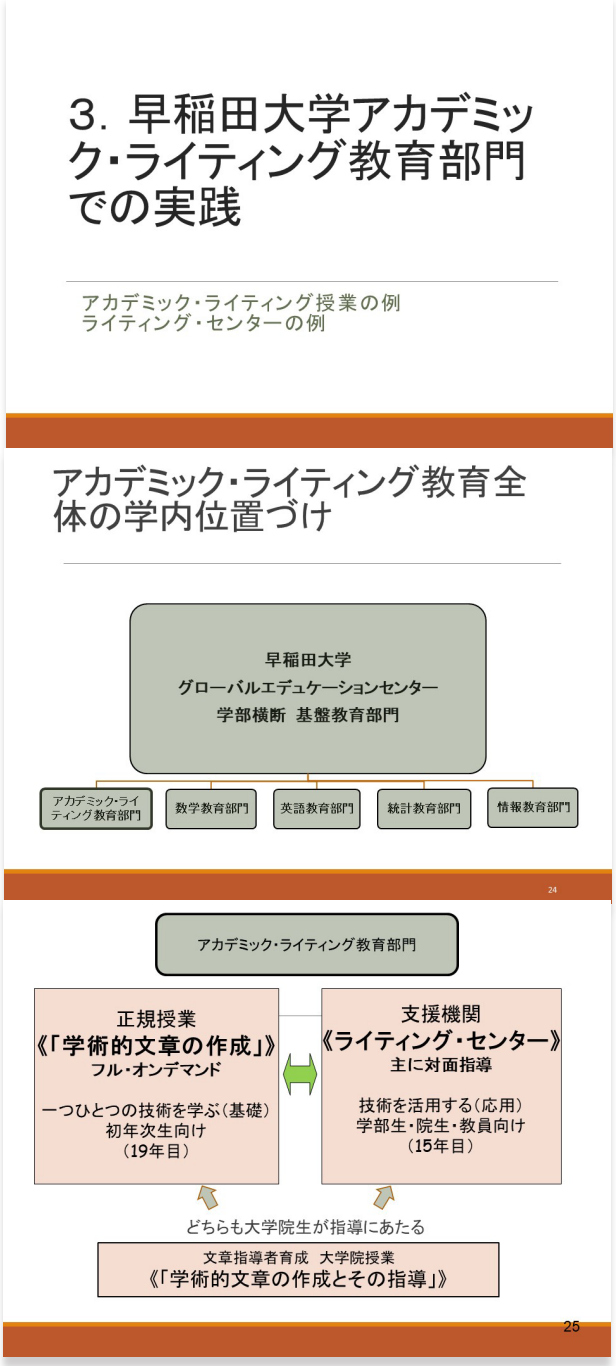


ここに、いくつか参考となるガイドブックを挙げさせていただきました。印税が欲しいのでご紹介しているわけではなく（会場笑）、学生たちが自立できるように、つまり教員が楽ができるようにという思いで作った本です。一番左側は、政策なので法に関わる文章を書かれる学生さんが多いと思うんですけども、民法の先生と憲法の先生と私とで一緒に作った文章作法の本です。真ん中は観点から文章を診断するとどうなるかという本です。それから、オレンジ色のは、先人たちの知識を踏まえる際にしなければいけないお行儀ですね。引用する、最近はインターネットのなど非常に複雑な引用形式があるので、そういった問題に答えられるようなガイドブックを作ってみました。楽をするためにお使いいただければと思います。



作文の文章の評価については、全国の先生方がたくさんのルーブリックを出していますよね。そうしたルーブリックを見るとご自分の経験から、これがいい、あれがいい、これが有効だったっていう発表は多くあるんですけれども、その個人の経験を超えてもう少し客観的に観点を示せないかなということで、因子分析を元に作ったルーブリックを開発しました。これ、私の科研費で研究してきて、まだ発表してないんですけども、来年の初めにはこれが書籍になって発表できるようにしたいと思っています。

ではここから先は、早稲田でやっている実践をご紹介いたします。よく他大学の先生に「どうやってるのか、アカデミック・ライティング教育がうまくいくコツを教えてください。」って聞かれるんですけども、私はたいてい「答えはお宅の大学にいらっしゃる学生さんが持っていますよ。」と言います。よく自分のところにいる学生さんを観察していると、彼らのニーズがわかりますよね。で、そのニーズに沿って作っていくと一番役に立つ教育ができると思うので、ここから先のお話はあくまで例の 一つとして参照していただければと思います。

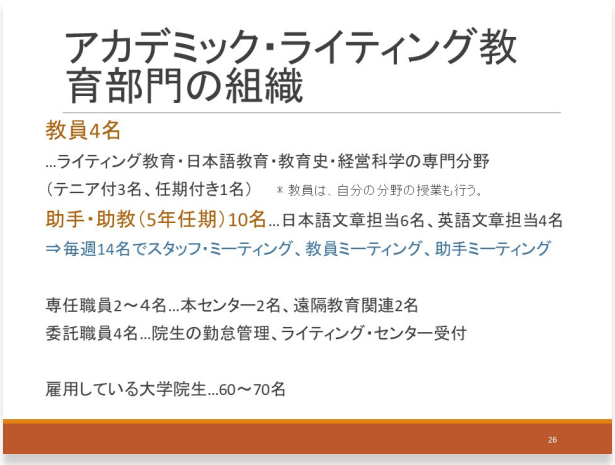


早稲田大学には、学部や研究科を横断する授業を提供するグローバルエデュケーションセンターっていうところがあります。で、この中に基盤教育の部門が五つあるんですね。こちら側から情報、統計、英語、数学、そしてアカデミック・ライティングなんです。これはどの学部どの研究科に所属している学生も取れる部門という仕組みです。

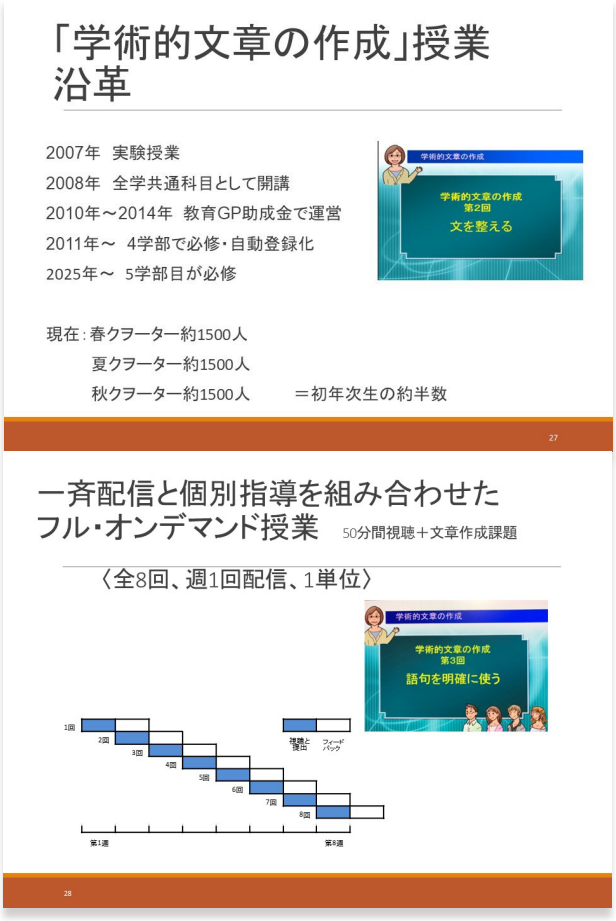
実はアカデミック・ライティング教育部門は、この三つの四角のことしかやっていません。一つは正規授業である単位を付与する「学術的文章の作成」というオンデマンド授業、もう一つが支援機関。単位を付与しない「ライティング・センター」です。そして、大きな特徴として、早稲田ではこのどちらも教員が指導しなくて、大学院生が指導に当たっています。で、その大学院生たちを育成するための大学院授業が、この下の四角です。「学術的文章の作成とその指導」です。

このフル・オンデマンド授業は、文章作成の基礎を、一つひとつの文章技術を学ばせる初年次生向けのもので、ライティング・センターの方はそれの応用ということです。教員も使えます。学部生、院生、教員向けです。で、大学院生たちが指導に当たっています。

関わっている人間、組織ですけども、教員が 4 名います。テニア付が 3 人、任期付きが1人。教員は自分の分野の授業も行っています。それから、助教・助手、5 年任期の人たちが10名います。日本語文章担当者が6名、英語文章担当者が4名です。この日本語文章担当者6名というのが、このフルオンデマンドの基礎授業と、それから大学院生のための研修授業、この両方に関わっていて、英語の方の助手たちは主にライティング・センターのことをやっています。日本語文章担当の助手たちは全部に関わっているということになります。で、この14人で毎週ミーティングを行っています。教員だけのミーティングもあって、助手だけのミーティングもあって、この三つのミーティングが繰り返し行われています。専任職員が2人から4人、委託職員が4名です。そして、雇用している大学院生が全部で60～70名います。こういう組織で、この三つの実践を行っています。



では、まず授業の方の説明をします。このフルオンデマンドの授業は、まず実験をして、大学院生でも指導できるっていうことを確認して、2008 年に開講しました。最初は教育GP の助成金で運営していました。2011年以降は4つの学部で、必修あるいは自動登録化をしてくれています。今、春クオーターで約1500人の人が履修。夏クオーターも1500人ぐらい、秋クオーター1500人ぐらい。ということで、初年次生が、早稲田は 9000 何人かいるので、大体半分ぐらいをカバーできているようになっています。

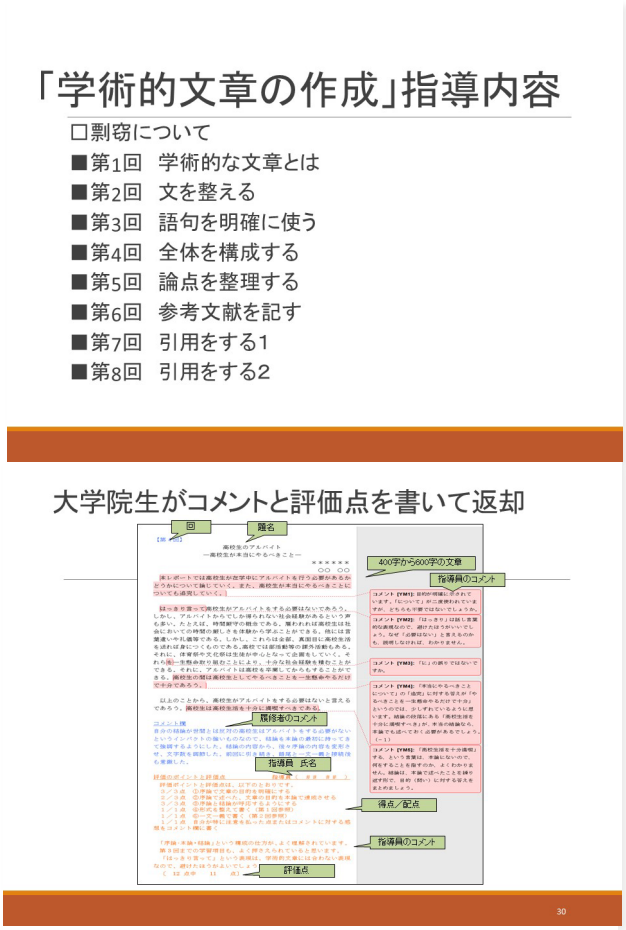


これは、画面を50分間ぐらい見て、その後で一回一回文章作成の課題を提出するという授業なんですね。全部で8回で週1回配信されて1単位です。この四角いところで、学生さんがこの 50 分ぐらいかかる画面を見て、そして文章を書いて提出する。で、その文章をこの白いところで院生たちが個別にコメントをつけて返却する。返却してる間に、学生さんたちがまた次の画面を見るという、これを 8 週間繰り返すという授業になっています。内容は先ほどのひつじ書房の本と同じなんですけれ

ども、学術的な文章とは、文を整える、語句を使う、全体を構成する、論点を整理する、参考文献、引用1、引用2とこんな感じになっています。

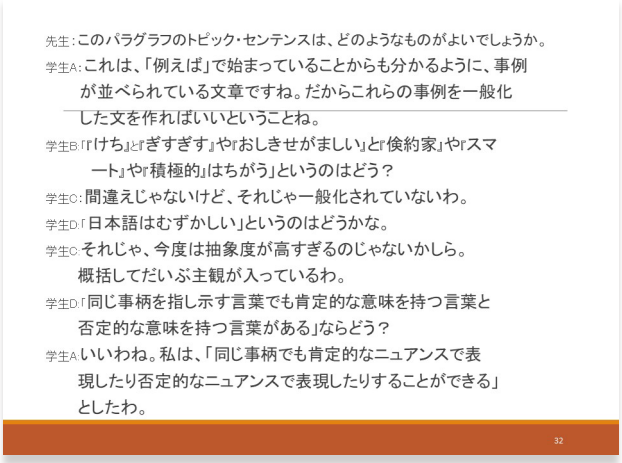
学生が出す、あの8回に亘って1枚ずつ出す題は、500字とか400字の短いものなんですけれど、この黒いところが学生が書いた文章です。そして、履修者が自分の文章についてコメントをするところが、この青いところなんですね。で、この 二つに対して指導員である大学院生たちがコメントを横につけていきます。で、下の方にあるオレンジ色のところがポイント、各回の評価ポイント、そして最後に評価点を書く。このようにして進めていきます。

最初、この授業を作るように大学から言われた時に、私は無理だと思ったんですね。アカデミック・ライティングをオンデマンドで教えていると、非常に退屈な授業になるだろうと思って、誰も学生は取りたくないんじゃないかなと思ったんです。で、しかも、「この文章いいですね、これはダメですね。」と例題を見せるだけの授業じゃとても退屈ですよね。ですから、学生に見立てた4人がディスカッションをするようにしたんですね。私がセリフを書いたら大学がアニメーションを作ってくれたんです。ここにいるの私なんですけど、声優さんたちも呼んでくれて、一緒に吹き込みをしました。そういう授業を作ってくれたんです。

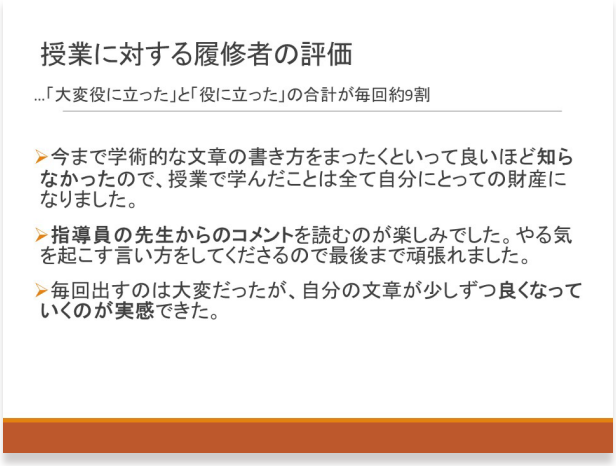


どういうところで、学生がディスカッションをするかっていう一例をここでご紹介します。私が例えばこう言っています。「このパラグラフのトピック・センテンスはどのようなものが良いでしょうか？」。学生が 4 人いますね。「これは、『例えば』で始まっていることからもわかるように、事例が並べられてる文章ですね。だから、これらの事例を一般化した文を作ればいいということね」。学生B。「『けち』『ぎすぎす』や『おしきせがましい』と『倹約家』や『スマート』や『積極的』は違う、というのはどう？」「間違えじゃないけど、それじゃ一般化されてないわ。」「『日本語は難しい』っていうのはどうかな？」「それじゃ、今度は抽象度が高すぎるんじゃないかしら。概括してだいぶ主

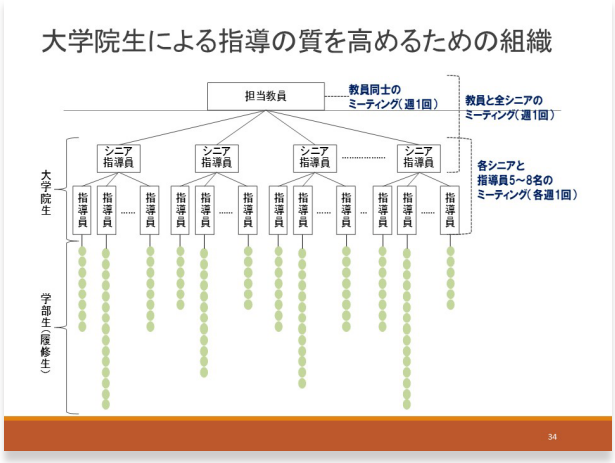
観が入ってるわ。」「『同じ事柄を指し示す言葉でも肯定的な意味を持つ言葉と、否定的な意味を持つ言葉がある』ならどう？」「ああ、いいわね。私は『同じ事柄でも肯定的なニュアンスで表現したり、否定的なニュアンスで表現したりすることができる』としたわ。」というふうに、ゆさぶってですね、学生が一緒に考えられるようにして作ってみました。この漫画の人たちがいるから楽しく受けられたっていう学生さんもいるし、これがうざいと言っている学生もいます。（会場笑）



大体評価はですね、学生評価は「役に立った」が9割なんですけども、こんなことがコメントにありました。「今まで学術的な文章の書き方を全くといって良いほど知らなかったので、授業で学んだことは全て自分にとって財産になりました。」「指導員の先生からのコメントを読むのが楽しみでした。やる気を起こす言い方をしてくださるので最後まで頑張れました。」「毎回出すのは大変だったが、自分の文章が少しずつ良くなっていくのが実感できた」ということで、やはり文章指導は、個別指導が大事じゃないかなと改めて思います。



先ほど60～70人の大学院生が指導しているんだということを聞いたときに、どうやって質を保っているんだろうと思われたと思うんです。これもですね、週に3回、ミーティングを繰り返して、質の保障をするようにしています。この下の方にぶら下がっている緑色のお団子を履修者と思ってください。修士の指導員たちは、忙しくて時間がないので、小さめのクラスをお願いします、というふうに言うんですね。博士の指導員たちは、時間はたくさんあるけどお金がない、だから大きいクラスを持たせてくださいということで、皆それぞれ8回ともずっと同じ履修者を続けて指導します。この指導員を5人から8名くらいのグループに分けまして、ベテランの指導員が統括するようにしてミーティングを開いています。この



統括しているベテラン指導員をシニア指導員と呼んでいるんですけど、ここでシニアたちがグループをまとめて、評価のすり合わせですとか、今週のお題はこれで、先生たちの意図はこれだから、こんな事に気を付けてコメントをつけましょうというようなミーティングをしてくれるんですね。さらに、シニア指導員だけと教員が週に1回ミーティングをしています。教員同士のミーティングもあります。この三つのミーティングを繰り返すことで、結構、一人ひとりの学生の様子が伝わってくるし、教員の意図も学生たちに伝わっていっているようです。

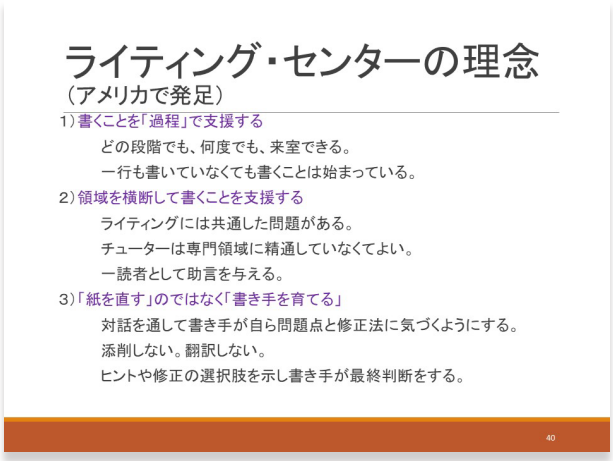
ここまでがオンデマンドのライティング教育のあらましでした。次にライティング・センターのお話をします。ライティング・センターの方は 2004 年に国際教養学部に設立されました。現代GPの助成金で運営して、国際教養学部の学生だけが使えるものでした。2008 年から留学センターに移転して、今度は大学のグローバル30の助成金で運営されました。その頃は先ほど私が嘱任したというアジア太平洋研究科が国際教養学部が同じ建物の中にいたので、その二つの箇所に開放されました。2009 年以降はオープン教育センターに大学が引き取って大学資金で運営してくれるようになりました。この時から全学の学生及び教員が利用できるようになりました。2010 年以降は理工や所沢のキャンパスに分室を作って、一昨年はオンライン支援もコロナ禍でスタートをさせました。

こんなふうにしています。この建物の今ポインターでさしている 2 階の一角がライティング・センターです。3号館、政経のビルに入っています。ライティング・センターは、日本ではあまり馴染みがなくて、先生たちも使ったことがないので、宣伝をし続けないと人が来ないという悩みがあります。「レポート・論文のお悩み受付中、ライティング・センターへどうぞ」。もう、こういうポスターをしょっちゅう作って、バスやら建物やらエレベーターやらに貼って宣伝をしています。これがライティング・センターの入り口。ここが受付。ここが待

合です。これがブース、オープンスペース。1セッションが 45 分間、予約制ですけど、空いていれば飛び込みも可。で文章は日本語か英語の文章。で文章を検討する会話も、英語か日本語で選べる。就職関連の文章は扱わない。というこんな感じです。

名和田先生たちが来てくださった時にこの部屋を見て「いいね。」って言ってくださったんですけど、これは控室でチューターたちが「ああ難しいセッションだった。あなただったらどうする？」とか「こんな長い文章が来ちゃったのよ。パニクっちゃったわ。」っていうおしゃべりができるような控室なんですね。ここにマグカップが100個入る戸棚を特注しましてね。みんなここでおしゃべりをしてください。という部屋なんです。先ほどのオンデマンドの方の指導者たちもここの部屋を使って、みんなでライティング教育についておしゃべりしてくださいと、奨励しています。この白い黒板はその日のうちに1日の予約状況を受付の人たちが朝書き込んでくれる白板です。

ライティング・センターはアメリカで発足したんですけれども、もうずいぶん前に1980年代には多くの大学でありました。理念があるんですね。でこの理念が日本の作文教育とだいぶ違うのです。そこがライティング・センターを広める時に難しいところなんですけれども、まず一つ目は書くことを過程で支援するという理念です。どういう段階でも何度でも来室できる。一行も書いてなくても、もうライティングが始まっているので、課題が出たけど困ってるっていう人も文章なしで来てくださいというふうに言っています。

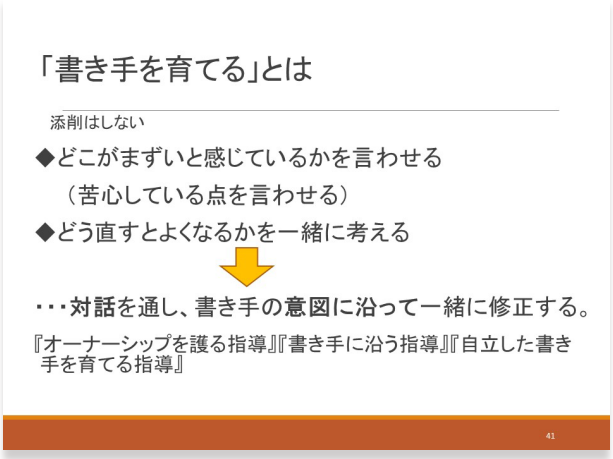


それから、領域を横断して書くことを支援しようと。ライティングにはどんな領域であっても共通した問題がある。だから、チューターは専門領域に精通していなくて良い。一読者としての助言を与えるというものです。もちろん内容について検討しますけれども、その専門家でなくても良いというふうにして、領域を横断して支援しています。

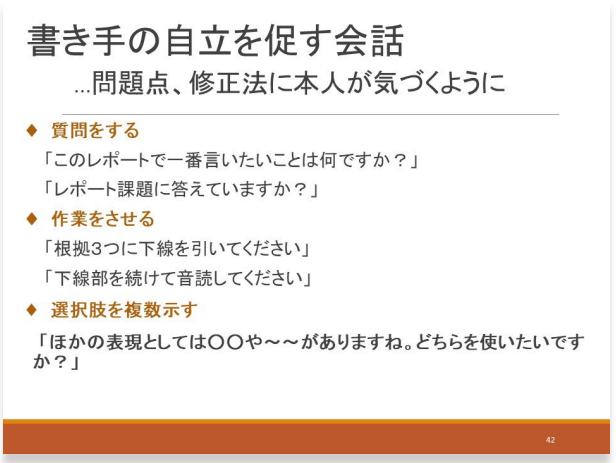
最後三つ目が一番大事なんですけれども、紙を直すのではなくて、書き手を育てる。対

話を通して書き手が自分の問題点、自分の文章の問題点や修正法に自分で気づくようにする。だから添削しない、翻訳しない。修正のヒントをあげる場合には、その選択肢を複数示して、書き手が最終的に判断をすると。この三つのアメリカの理念を踏襲してライティング・センターを運営しています。

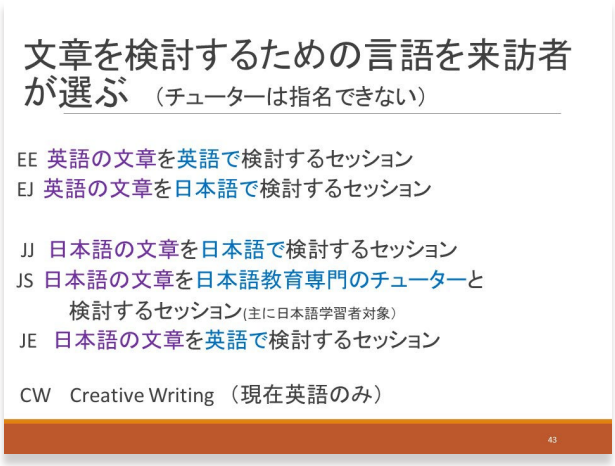
この、紙を直すのではなく書き手を育てるというのが難しいんですけど、要するに、どこがまずいと感じているかをチューターが教えてあげるのではなく、自分で言わせる。どう直すとよくなるのか、これもチューターが教えてあげるのではなく、一緒に考えるという方針です。つまり、対話を通して、書き手の意図に沿って、一緒に修正をするってことですね。オーナーシップを守るとか、書き手に沿うとか、自立した書き手を育てるというような言葉で言われている点です。



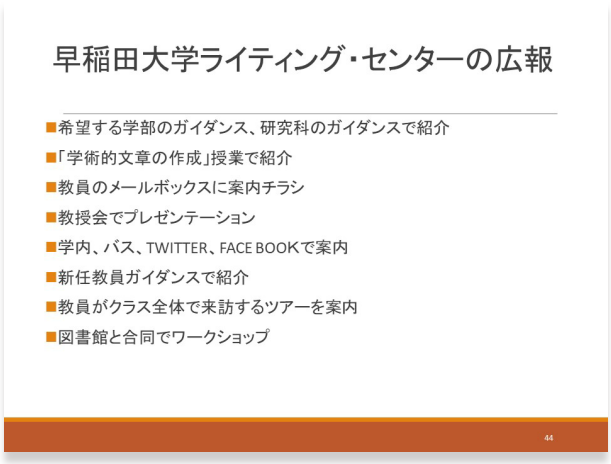
じゃあ、どうやってそれを実現させるのかですけれども、書き手の自立を促すために、質問をしたり、あるいは作業をさせたり、選択肢を複数示したりします。で、こうして本人が気がつくように対話をしていくんですね。この対話ができるようなチューターになるのは結構大変なんです。後でその研修方法もお伝えしますけれども。



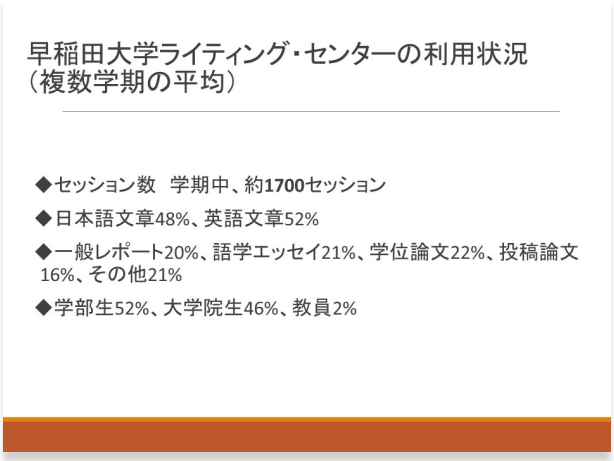
それから早稲田のライティング・センターは英語と日本語の文章を持って来れるんですけれども、英語の文章は英語で検討するセッションと日本語で検討するセッションがあります。日本語の文章の方は日本語で検討するセッションもあるし、英語で検討するセッションもあるし、あと日本語教育の専門家、文法の説明ができる人と一緒に検討するセッションもあります。で、チューターは指名できないんですけど、この言語のカテゴリーで予約ができるようになっているんですね。また、英語の方でクリエイティブ・ライティングを支援できるチューターが 1人おります。



で、見ていると学生たちはよくこれを使い分けていてですね。公共政策の院生さんたちもきっとこうだろうと思うんですけども、外国語、英語の論文を発表しなきゃいけない時に、まず内容をあれこれ、ブレーンストーミングする時は日本語でやり取りしたいと。でだいたい内容がわかって、一通り英語で書いてみたら、今度は英語のチューターと一緒に表現だとか、言い回し、表現、文法、そういうところをチェックする。このように、一つの文章を違うカテゴリーで検討して磨いていくっていう人もいらっしゃいます。

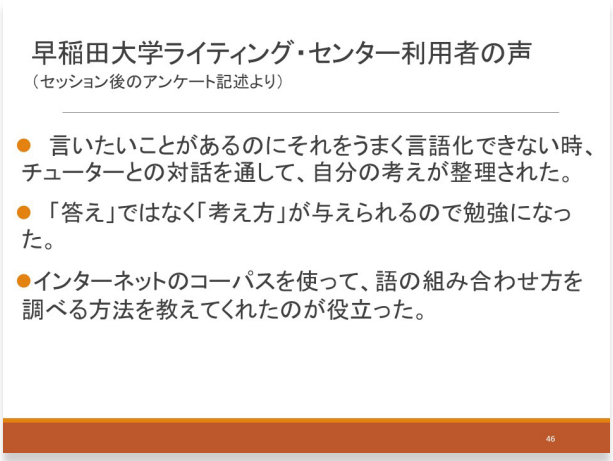


先ほど申し上げたように、ライティング・センターは、日本の40人学級で、出来上がった文章しか先生に見せていない学生たちにとっては、書いている途中のものを見せに来るっていう習慣がないものですから、あらゆる手段を使って広報をかけます。学部ガイダンス。先生たちのメールボックスに案内する。教授会に出かけていってプレゼンテーションする。TwitterやFacebook で発信する。新任教員ガイダンスに出かけていく。それから先生がクラス全員を連れてきてください、説明しますよ、15分のツアーやりますよ、という案内。図書館と合同でワークショップなどなど、苦心しています。大体利用状況は一学期2700セッションぐらいで日本語と英語の文章が半々ぐらい。院生に教員をつけると大体半分ぐらいとそんな感じです。



利用者の声です。「言いたいことがあるのにそれをうまく言語化できない時、チューターとの対話を通して、自分の考えが整理された。」「『答え』ではなく『考え方』が与えられるので勉強になった。」「インターネットのコーパスを使って、語の組み合わせ方を調べる方法を教えてくれたのが役立った。」などです。

チューターはこの対話ができるようになるために研修をします。最初は時給1100円なんですけれど、二つの審査があって 二つ目に合格して初めて時給2100円になるという、結構厳しい研修もしてい

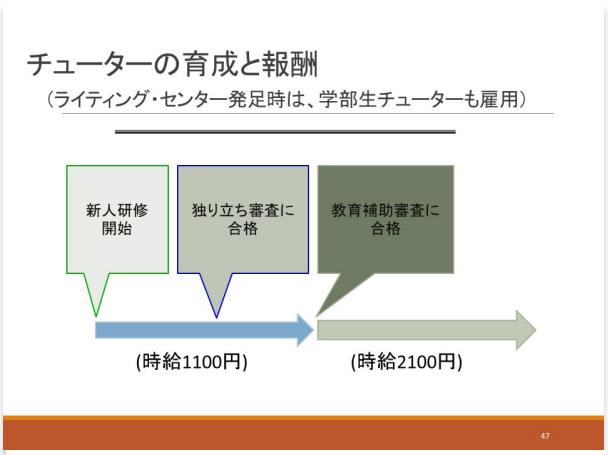


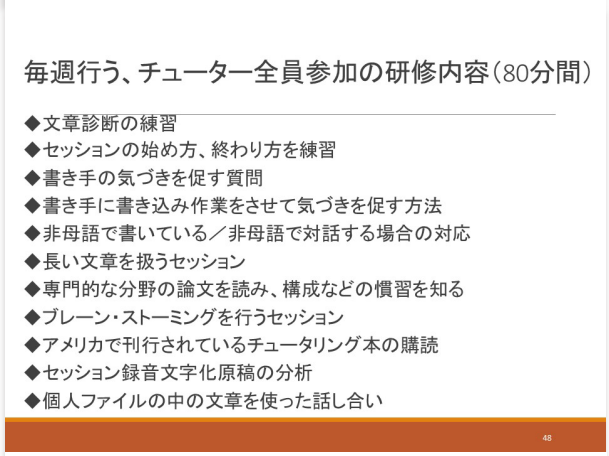
ます。

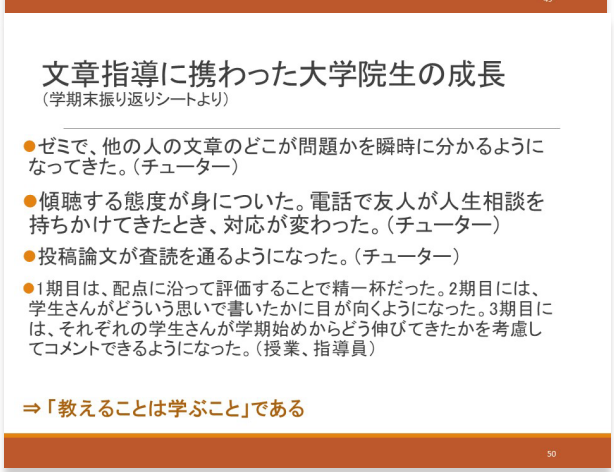
そのうえ毎週 80 分間全員で研修をしています。文章診断の練習をしたり、セッションの始め方、終わり方を練習したり、気づきを促すためにどういう質問が良いかをやったり、長い文章を扱うセッションだとか、ブレーンストーミングを行うセッションだとか。こういうふうにして色々練習を積んでいます。

これが一つの週研修の様子ですけれども、学期末にはグループ研究をするんですね。で、それを学会に持って行って発表しているグループなどがあります。チューターたちはいろんな研究科から集まってるんですけど、サブゼミみたいな感じになっているんですね。で、「リピーターは自立してるのか、それとも依存の度合いを強めているのか」という調査をしたり、「非日本語言語話者が文法チェックを求めてきた時に主体的に取り組ませる対話はどういうものか。」を調べたりして、いろんな研究、ミニ研究ですね、をしています。

私はこうしたチューター達をずっと見てきてつくづく思うんですけれども、もちろんライティング・センターに来た学生たちは書き手として成長していると思うんですけど、何と言ってもこの指導に携わった大学院生たちが成長しています。例えばこんなことを言います。「ゼミで他の人の文章のどこが問題か瞬時にわかるようになった。」「傾聴する態度が身についた。」「電話で友人が人生相談を持ちきてきた時に対応が変わった」とか、「自分の投稿論文が査読を通るようになった。」「1期目は、配点に沿って評価することで精一杯だったけど、2期目には学生さんがどういう思いで書いたかに目が向くようになって、3 期目にはどう伸びてきたかを考慮してコメントできるようになった」などと言っ





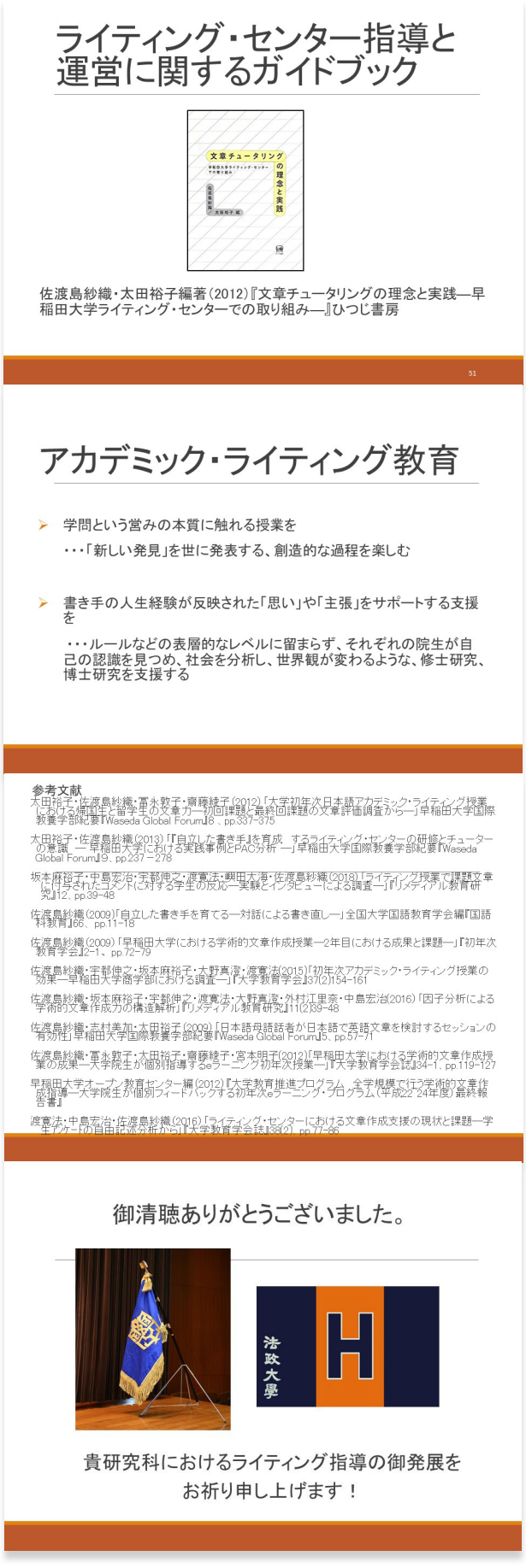


ています。本当に、教えることが学ぶことに繋がってるんだなということを強く毎学期思います。

このライティング・センターの運営については、これも、チューター達みんなと一緒に本を書きましたので、もしよろしかったら、この会話の仕方の実例集のようなものですけれども、御参照ください。

以上で、早稲田のアカデミック・ライティング教育をご紹介しました。学問という営みの本質に触れる授業をしていきたい。その学問は新しい発見を世に発表する創造的な過程ですから、それを楽しみたいと思います。そして、書き手の人生経験が反映された思いですとか、主張、それをサポートする支援をしたいと思います。特に社会人が集まる大学院では、皆さんが貴重な体験を通して世の中の問題をよく知っているので、ルールなどの表層的なレベルにとどまらずに、それぞれの院生が自分の認識を見つめて、社会をより緻密に分析して世界観が変わるような、そういう修士研究や博士研究を支援したいものだと思っています。

以上が本日用意させていただいた話です。これから益々この研究科は発展を遂げていくことと思います。ご発展を心よりお祈り申し上げます。ありがとうございました。



＜質疑応答＞

渕元

佐渡島先生ありがとうございました。そうしましたら、まだ少しお時間がありますので、早速ですが、質問の時間を設けたいと思います。佐渡島先生にご質問のおありになる方は挙手をお願いいたします。あの、もしくはズームで、オンラインで参加されている方は、オンライン上で挙手をいただければ、こちらからまた採用させていただきますのでよろしくお願いします。

参加者１（（聴衆*会場）院生・連帯社会インスティテュート）

面白い話ありがとうございました。連帯社会インスティテュートに属しております。ごく初歩の質問でお恥ずかしいんですけれども 9 ページにあります、文章を点検するための観点の例っていうところで、下から 2 段目の、統括分をつなぎ合わせて読むと全体の要旨になるっていうふうに書いてございますけれども、各章の中に統括文を必ず入れるものなんでしょうか？それとも統括文って特に何か意味が別に意味があるんでしょうか？お聞きしたいと思います。

佐渡島

ありがとうございます。おっしゃる通り、統括文っていう言葉は文章全体の統括文を指す場合もあるし、段落の統括文っていう意味もあると思います。で、パラグラフっていう言葉を使ってるんですけど、これアメリカ式で、英語で書いた文章をアメリカのライティング・センターに持っていくと、「このパラグラフでは何が言いたいの？」「トピック・センテンスはどれ？」って必ず聞かれたんですね。どのチューターに当たってもそれを聞かれたんですね。で、英語圏ではトピック・センテンスがないとみんな読まないんだなって、大学院生の時に思って、それをここで指導したんですね。

段落の中で一つのテーマを扱う、その段落の内容を一文で表したものを表札のように、玄関の前に門のところにある表札のように一番手前に持ってくるっていうのも、これがパラグラフ・ライティング、トピック・センスの考え方なんですよね。で、これができている文章は、トピック・センテンスだけ、バーっと読んでいくと、あいだ読まないで、トピック・センテンスだけ読むと、全体で何が言いたいのかがわかるっていう文章になりますよね。ただ、これ日本人の思考パターンと合わないっていう話もあって、ちょっと統括文だけが浮いちゃう感じがするので、書きにくいっていう人もいる。思考が固まっちゃってかえって良くない文章ができるっていう感想を持つ人もいるんですけれども、使い分ければいいと思うんです。これを知っていると、自分の段落ごとの内容が整理されますよね。二つのことを一つの段落に詰め込んだりしないようになるので、読みやすい文章にはなります。それをここで教えているんですね。応えになりましたか？

佐々木

最初にそれを乗せるって意識したことなかったので勉強になりました。やってみます。ありがとうございました。

名和田（法政大学大学院公共政策研究科）

先ほどあいさつしました研究科長の名和田です。どうもありがとうございました。二つ伺いたい。一つは、特に政策系の研究科なので、あの論文の中に価値判断を含む文がどうしても出てくる。その価値判断を言うに、それが言いたいわけですから、こうすべきであると、あまり根拠もなくそれが現れたりするような論文もよくあります。価値判断の問題というのを、アカデミック・ライティングという観点からすると、どう見るのか？また、普通の文と一緒で、明晰な文章構成にするということなのか、それとも価値判断はまたそれ固有の伝え方があるのか、これが 一つの質問。

もう 一つはあのこのアカデミック・ライティング、あのとても早稲田の水準になるまで法政大学が何 10 年間かかるんだろうという気がするんですけど、少し努力をしてみたいとは思っていて、実際学内を見渡すと隣接する分野のあの類似のというのかな、リソースがすでにあると思うんですね。例えば研究倫理を一生懸命やろうと今法政は努力をしています。今日のお話の中でもちょっと出てきたんですけども、研究倫理と隣接してる部分が少しであると思うんですね、アカデミック・ライティングには。剽窃しないとかですね。で、その研究倫理教育ってものがライティング教育の中でどのくらいどういう位置を持ってるのかっていうことについて、考え方をお教えいただきたいと思います。

佐渡島

ありがとうございます。価値判断のところですね。ジャーナリズムでは、価値判断するところは自由に書けると思うんですけれども、学術的文章ではやはり自分の分析に基づいた、明らかになった点をまずしっかりと書く。そしてそれに対しての自分の思いとかインプリケーションですよね。それを社会に当てはめるとどういうことが言えるのか、っていう部分を、本人が自覚して切り離して語ることが重要かなと思います。このデータからこれが言える。でもここまでしかわからない。だから研究の限界を書くところが必ずありますけれども、ここまでがきっちり明らかになったことだと。で、さらにそれについてどのように社会に当てはめていけるかというところについては、自分の価値判断も入れていいのではないかと思うんですけども。読者がその二つを混同しないように分けて書かれているかどうかが重要かなと私は思います。公共政策の論文を書いたことがないので、ちょっとそんな答えになってしまうんですけれども、どうでしょうか？

あと、倫理のことなんですけども、ライティングにおける倫理で一番重要なのは、先生がおっしゃった通り剽窃の問題ですね。で、これは本当に年々大変になってきました。学部の、先ほど紹介したお人形さんが出てくるあの授業で、SNS で炎上することについてあなたの考えを書きなさい、目的を自由に決めて書きなさいっていう課題を先月出したら、もう剽窃が続出して呼び出しがいっぱい出ました。私たちが呼び出して、それを学生の所属の事務所に言うと、停学処分になったり、単位没収になったりしますよね。全部その学期の単位が全部没収になったりする。7〜8 組、剽窃の呼び出しをして注意したんですけれども、学生たちはそれが剽窃だと思ってないんですよね。

まず SNS、パソコン、携帯で色々調べるんです。あっちこっちあっちこっち見るんです。それで知識を全部頭に入れたところで、あそこにああ書いてあったな、ここにこう書いてあったなっていうのをつなぎ合わせて自分の文章を書くんですよね。そうすると指

導員がこの部分はここのサイトから写したんだと思います、先生。こっちのところはあっちのサイトから写したんだと思います。これ、全部どっかのサイトにあるものがつなぎ合わせています、っていうふうに剽窃じゃないかと疑って呼び出しをかけるんですね。でも学生さんに聞くと、写したっていう感覚じゃないんですね。まず勉強したと。それから自分で意見を組み立てて書いたんだっていうふうに言うんですよ。もう今の学生さんたちは頭が半分携帯になってるんじゃないかと思うような、そんな何人もの学生が同じような状況で書いていました。この倫理の、剽窃をしないということを、これから先どうやって教えていけばいいのかは悩みの種です。

早稲田大学全体としては、倫理系統のことを合わせた、オンデマンド授業が作られてあって、大学院に入った学生はそれを見ないと論文が出せないっていうのになっています。データを取る時に同意書を取るとか、写真を撮る時に顔を写さないとか、いろんな時に人間が関わるものはありますよね。それはもうオンデマンドで作っておいて、テストがついていて、教員もそうなんですけど、テストに全部合格しないと論文が出せない。科研費にも申請できないと、結構厳しい授業が何時間分もあります。それをやっぱりこれから先、教えていかなくちゃいけないのかなと思います。大変なんですよね。そこの辺りが。先生が違うと言うことが違うっていうのは倫理においては起きてはいけないことなので、オンデマンドで作ってしまうのは結構良い対策ではないかなと思うんですけど、いかがでしょうか。

渕元

ありがとうございました。まだまだ、司会の私からも本当はお伺いしたいことが何点かございますが、そろそろお時間になりましたので、足りない分はもしよろしければ後半のパネルディスカッションが終わってからの議論のなかで、また改めて佐渡島先生に質問をさせていただければ思います。

それでは休憩を取らせていただきたいと思います。佐渡島先生、改めまして、大変ありがとうございました。

佐渡島

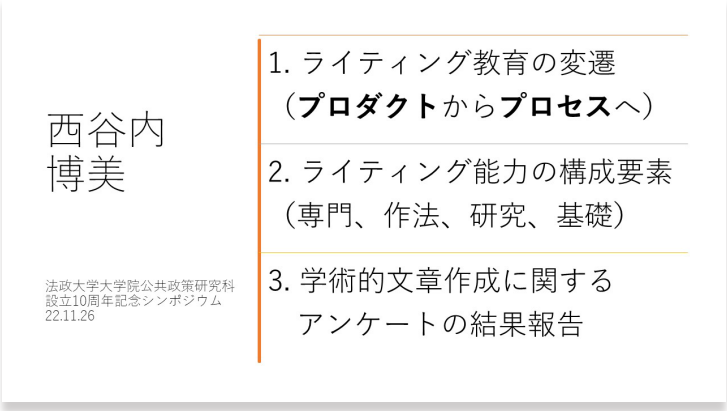
大変失礼しました。ありがとうございました。

－休憩－

第３部　その１　報告

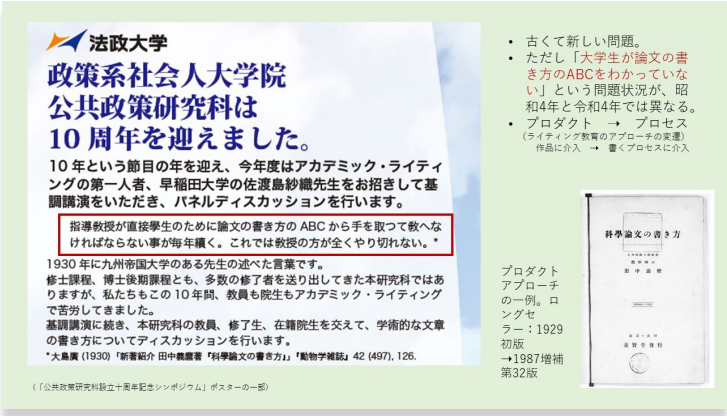
法政大学大学院公共政策研究科兼任講師
西谷内博美

兼任講師の西谷内博美と申します。よろしくお願いいたします。私もアメリカでライティングを学んだことがありますので、その経験と、あと最近お勉強した内容をもとにお話しさせていただきたいと思います。すごい専門家であられる佐渡島先生の前で私論を繰り広げるのは大変気が引けるのですが、勇気をもってお話しさせていただきたいと思います。



本日は3つのことについてお話しさせていただきます。一つは、ライティング教育の変遷。一般的に、プロダクトからプロセスへと言われている内容です。そのなかで教育内容がどう変わったのか、ということを把握する試みとして、二つ目に、ライティング能力の構成要素についての私の試論を紹介させていただきます。その構成要素をもとにライティング能力を自己評価するアンケートを作成し、在籍者の方々に答えてもらいましたので、３つ目には、その結果についてご報告いたします。

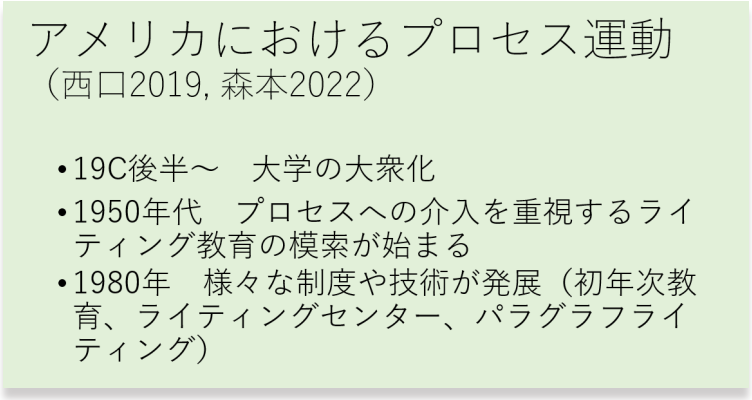
それではさっそく一つ目のライティング教育の変遷についてお話しします。当シンポジウムのポスターに引用してありますフレーズにご注目ください。「指導教員が直接学生のために論文の書き方のABCから手を取って教えなければならないことが毎年続く。これでは教授の方が全くやりきれない」。これは、92年前、昭和5年に九州帝国大学の先生が言った言葉です。100年近くの時差を感じないほど、現在



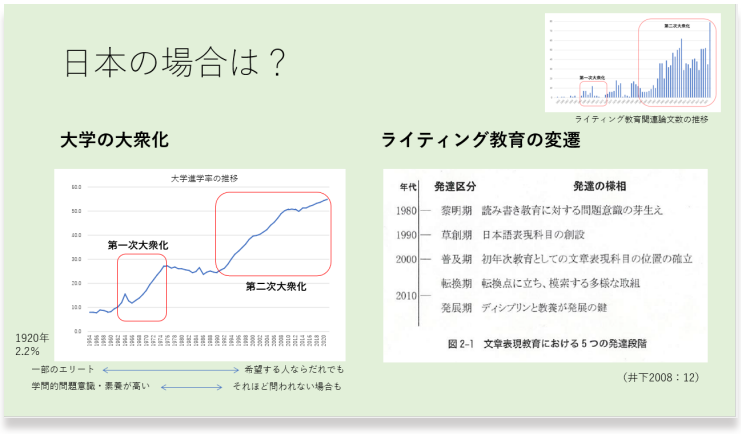
の大学教員の多くが共感するのではないかと思います。ライティング教育の必要は、古くて新しい問題であることが分かります。

ところが、「大学生が論文の書き方のABCをわかっていない」という同じ言葉でも、それが指し示す問題状況は昭和4年と令和4年で大きく異なっていると考えています。それが、ライティング教育についての、プロダクトアプローチとプロセスアプローチの違いと対応していると考えています。プロダクトアプローチというのは書いた作品、すなわちプロダクトに対して添削などの介入をする教育アプローチ。プロセスアプローチは構想・草稿・推敲といった、書く（ライティングの、あるいは研究の）プロセスに介入する教育アプローチです。プロダクトからプロセスへの変化は、大学の大衆化とセットで論じられることが多いです。

アメリカの場合は、19世紀後半から大学の大衆化が始まり、それに伴う基礎リテラシーの低下、それに対する現場の必要として、1950年代からプロセスへの介入を重視するライティング教育の模索が始まり、1980年頃に、様々な制度や技術が発展したというふうに説明されています。このモデルを日本に当てはめてみたいと思います。



日本では、大学進学率が10%を超えたのが1962年。1976年には25%程度まで上がります。しばらく緩やかに低下しますが、1990年頃からまた上昇し、2009年には50%を超えて「全入時代」すなわちユニバーサル化の時代に突入します。これらを、第一次、第二次大衆化とわたしは位置付けております。

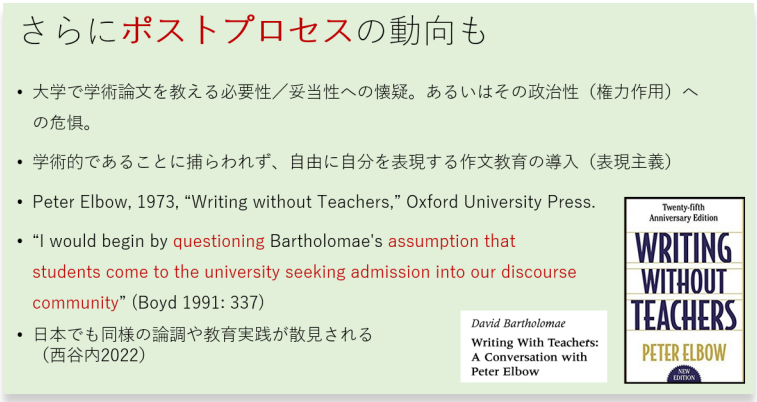


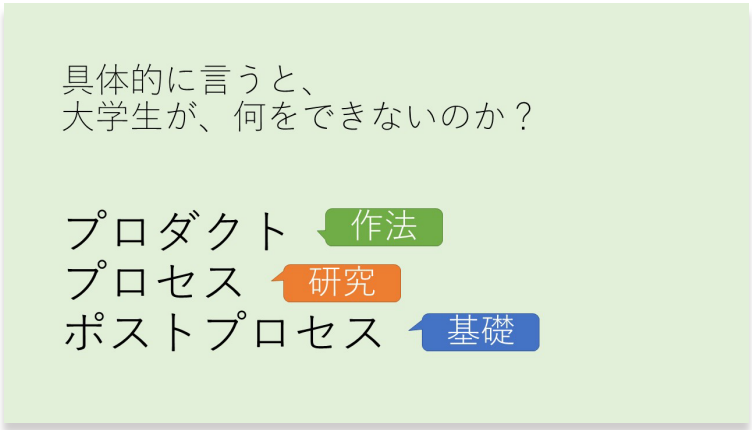
ちなみに、先に九州帝国大学の先生が嘆いていた昭和5年の大学進学率は5%前後だと思います。すなわち、一部のエリートで、もともと学問的問題意識や素養の高い人が大学生だった時代の教員の嘆き。そして現在の教員の嘆きは全入時代におけるものですから、問題状況が異なっていることが、この時点でも強く予想されます。

次に、日本におけるライティング教育の変遷を見てみると、井下先生の分析によると、日本では1980年代にプロセスアプローチへの問題意識が生じ、2000年代から様々な制度や技術が発展してきたと読み替えることができると思います。

このように、アメリカに比べて20～30年遅れて、日本でも大学の大衆化の影響がみられるようになり、それに対する現場の必要としてのライティング教育の改革が現在進行

中とみています。さらには、プロセスの先、ポストプロセスアプローチという現象もあります。この段階では、論文を書くプロセスに介入するのではなく、そもそも大学生に「学術論文」を書かせることが妥当なのか、と疑問視されます。それよりも自分を自由に表現する「作文教育」が推奨されます。アメリカでは70年ごろからそういった教育実践が見られ、大学における「学術性」の是非をめぐって論争も起きています。そして日本でも、似たような論調の意見や、教育実践が散見されます。



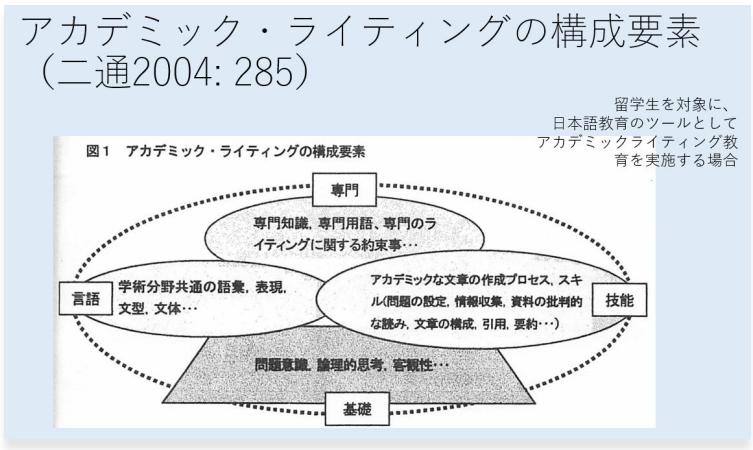


以上、ライティング教育の変遷をプロダクト、プロセス、ポストプロセスとして概観しましたが、それぞれ、どのような問題状況に対応した教育実践なのだろうか？言い換えると、大学生が何をできないというのか、ということを次に考えてみたいと思います。

結論から言うと、それぞれ、作法、研究、基礎が問題になっている状況とわたしは捉えています。つぎに、二つ目の論点である、ライティング能力の構成要素に目を転じたいと思います。

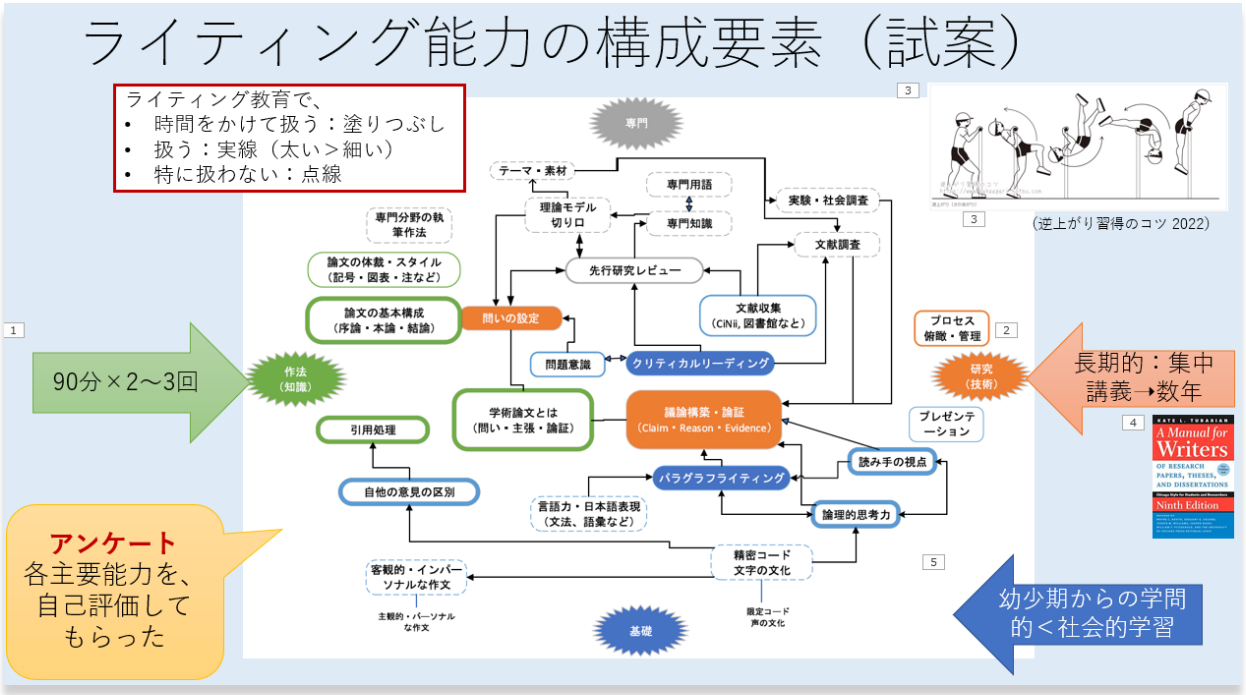
二通という先生がまとまられた図に触発されて、わたしも考えてみました。

すっかりわかりにくくなってしまいましたが…、とりあえず試案ですが、お付き合いください。ここでは論文を書く能力を「専門」「作法」「研究」「基礎」にわけています。それぞれの中身、具体的な項目も色分けして示しています。また項目間の関係性を線で示しています。



さて、学術論文を書くためにはこのように様々な能力が必要なわけですが、ライティング教育ではどの項目を扱うのか、ということも考えてみました。ちなみに、どこに力点を置くのかということは、時代によっても違いますが、同時代であっても、先生によってず

いぶん異なります。たとえば佐渡島先生や井下先生などのテキストを拝見すると、力点の置き方はここで示しているものと違うようにお見受けいたします。



ここでお示ししているのは、私が知っているシカゴ大学のライティング教育の場合、ということです。塗りつぶしているのが、時間をかけて扱う項目です。塗りつぶしていないのも扱いますが、それほど時間はかからない項目。力点の強弱を線の太さで示しています。点線は、とりわけて扱わないと考えられる項目です。

次に中身をみていきます。「作法」は、知識の問題です。それほど時間はかかりません。90分×2〜3回で伝達可能です。これをプロダクトアプローチと考えています。つまり、聡明なエリート学生が、明確な学術的問題関心をもち、研究のモードも理解している。ただ、それをまとめる学術的な作法を知らないだけ。よって、それを教えれば済むという段階です。

次に「研究」は技術問題です。これは大変長期的な教育プロジェクトです。逆上がりを例にとって考えてみましょう。先生の真似をして逆上がりをしなさいと言われて、見様見真似ですぐにできちゃう子と、出来ない子がいるんですね。出来ない子には、逆上がりの技術を分節化して教えることになります。踏み込みのタイミング、ふくらはぎの使い方、握力の使い方などを個別に訓練し、また、それらを統合して何度も繰り返し練習する必要があるわけです。

これと同じで、論文とはこう書きます。既存の学術論文をモデルにしてくださいと言われて、出来ちゃう人と、出来ない人がいる。できない人には、研究の技術を分節化し、一つずつ訓練し、また総合的に何度も繰り返し練習する必要があるわけです。

わたしは、この技術訓練を、20年前にシカゴ大学で受けました。シカゴ大学には、この研究技術だけに特化した修士プログラムというのがあるのです。そこでは、たとえば、問いを設定し解を探求する研究のモード、エビデンスを収集し議論を構築する道筋、自分の解を理路整然と論証する作文技法など、まさに『研究の技法（Craft of Research）』とい

うテキストに書かれているようなことを繰り返し練習するということを、修士プログラムでやりました。

このように「研究技術」は、数年単位の長期的な訓練によって習得されるようなものです。

そのような教育を、わたしはプロセスアプローチと捉えています。

最後に、ポストプロセスアプローチは、さらにもっと基礎的な能力を補うような教育アプローチということになります。ここの部分は、幼少期からの積み重ね、学問的学習もそうですが、より強く社会的学習によって蓄積される能力だと考えられます。

たとえば表現主義論争において、「精密コード」と「限定コード」といった議論がよく引かれます。つまり、人間社会では、声しか使わない無文字社会に比して、文字を使うことによって、格段に複雑な思考が可能になるわけです。それと同様の差異が、同時代の、中産階級と労働者階級の子供の間に見られるという話です。子供のころから、自分の考えを言葉でしっかり表現させる訓練が、家庭や学校でどれほど蓄積されているのか、されていないのか、ということが問題になってくる。その訓練ができていない子供たちに対しては、大学で、そこから始めましょうということです。それがポストプロセスアプローチというふうに捉えています。

以上、ライティング能力の構成要素をこのように考えてみました。この試案をもとに、アンケートを作成して、在籍者にライティング能力の自己評価をしてもらいました。試案なのに大胆な、ありがたい試みでした。３つ目の論点に入ります。

このアンケートは、タイミングとしては、シンポジウムの少し前に実施しました。対象は、公共政策研究科および連帯社会インスティテュートの在籍者で、母数が144名、うち49名に回答いただきました。回答率34%です。

学術的文章作成（アカデミック・ライティング）に関するアンケート

49件の回答（回答率34%）

調査対象：法政大学大学院公共政策研究科および連帯社会インスティチュートの在籍者（休学者が含まれる）144名

調査方法：法政ポータルサイト（Hoppii）の「お知らせ配信」を介してアンケートを依頼。googleフォームで回答。

回答期間：2022.10.10〜31

ライティング能力の自己評価についての各設問です。

ライティング能力の自己評価　設問一覧（基礎／作法／研究）

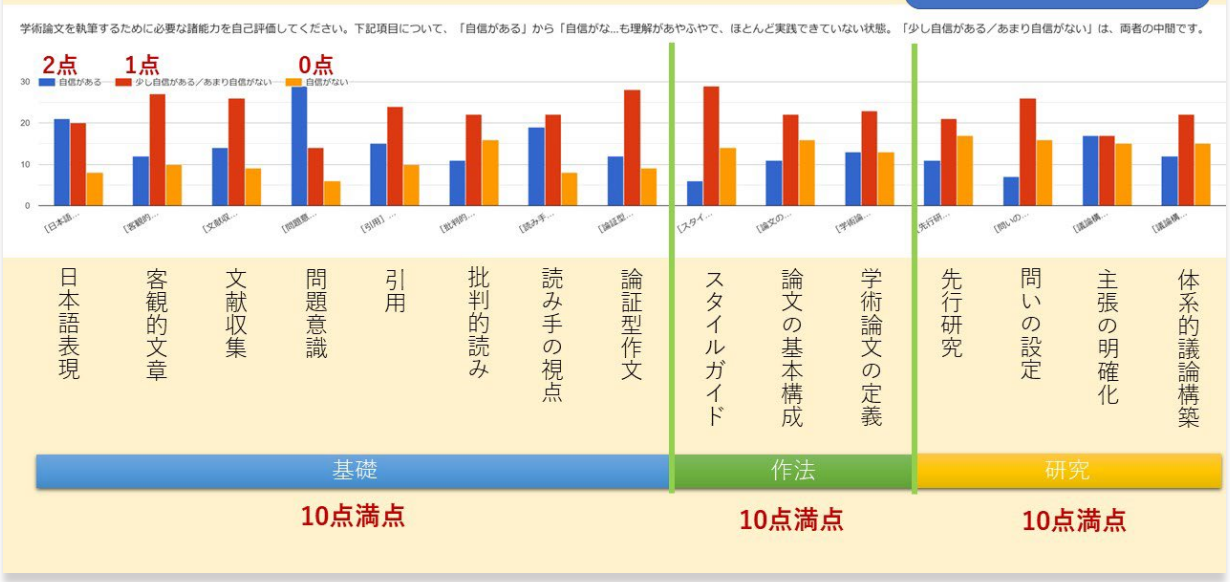
日本語表現	日本語の文法や語彙を人並みに使うことができる。――何を言いたいのか分からない、「てにをは」がおかしいと言われたことはあまりない。
客観的文章	書き手中心ではなく、対象を中心とした客観的な作文ができる。――具体的には、一人称の使用、主観的、あいまいな表現をできるだけ避けて、ある程度断定的に事実を記述する書き方ができる。
文献収集	文献を収集する方法を知っているし自由に実践できる。――つまり、CiNiiや図書館などを使い慣れている。（ここでは外国語文献の検索能力は問わない）
問題意識	授業や読書の際に、受動的に知識を得るだけではなく、自分なりの疑問や関心が新たにうまれたり、それに引き付けて考えたりすることが多い。
引用	自分の意見と他者の意見を区別できる。加えて直接引用と間接引用の違いが分かる。
批判的読み	先行研究を読む際に、感心し納得しながら読むだけではなく、議論の構造を捉えたり、批判的に読んだりすることができるし、そうしている。
読み手の視点	書いたものが伝わらないのは、読み手の理解力のせいではなく書き手の問題と捉え、読み手の視点から文章を書いたり推敲したりしている。
論証型作文	理路整然と首尾一貫した文章を書くことができる。（ちなみに、パラグラフライティングができる場合は「自信あり」です）

スタイルガイド	特定のスタイルガイドに則して、適切な引用処理ができる。
論文の基本構成	学術論文における序論・本論・結論について、それぞれが一般的にどのような役割を持っており、何を書けばよいのか、他者に説明できる程度まで理解している。
学術論文の定義	学術論文と他の文章の違いがよくわかる。――たとえば、学術論文とは「問いと答えと論証からなる」という意味を明確に説明できる。
先行研究	自分の研究が先行研究にどう位置づけられるのかを、常に概ね、明確に捉え説明することができる。
問いの設定	自分の問題関心を、比較的容易に、学術的な問いに接続することができる。――オリジナリティが弱いと指摘されたことはほとんどない。
主張の明確化	少なくとも執筆終盤において、自分の言いたいこと（＝主張、答え）がなんであるのかを１～２文程度で明確に答えられる。――総花的、サマリー的などと指摘されたことはほとんどない。
体系的な議論構築	議論を分節化・階層化し、客観的な根拠を示しながら、自分の言いたいこと（＝主張、答え）を体系的に論証する方法を知っているし（我流であっても）、そうしている。

以下は自己評価の結果一覧です。青が「自信あり」、オレンジが「自信なし」、赤がそ

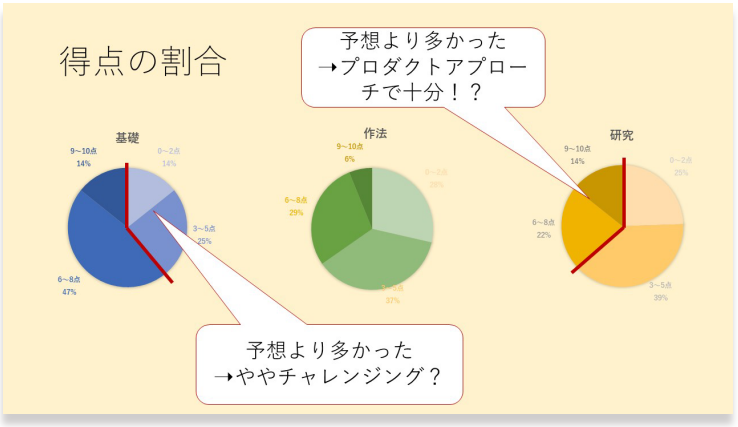
ライティング関連能力の自己評価

能力そのものではなく、能力の自己評価！



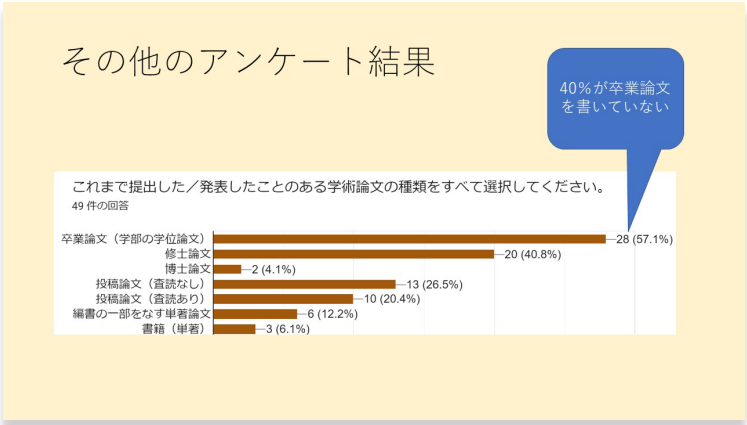
の中間です。このアンケートの弱点は、実際の能力を測っているわけではなく、あくまでも自己評価にすぎないということです。その限界をおさえつつ、先に行きます。「自信がある」を2点、「少し自信がある」を1点、「自信がない」を0点とし、また基礎、作法、研究をそれぞれ10点満点として、分析した結果がこちらです。「基礎能力」に自信がない人が、予想より多かったです。おそらく謙虚なかたが多いのと、もしかすると、教育的にややチャレンジングな状況が示されているのかもしれません。あるいは、私のアンケート設計の問題かもしれません。

反対に、「研究能力」に自信がある人も、予想より多かったです。これはプロの研究者でも難しい領域です。わたしなどは、プロでもありませんが、6〜7点くらいです。自信のある方がちょっと多すぎるように思いましたが、しかしよく考えてみると、たしかに昭和初期のエリート並みに聡明な院生が現在も一定程度存在しているので、この結果はまあまあ現実を反映しているように思います。

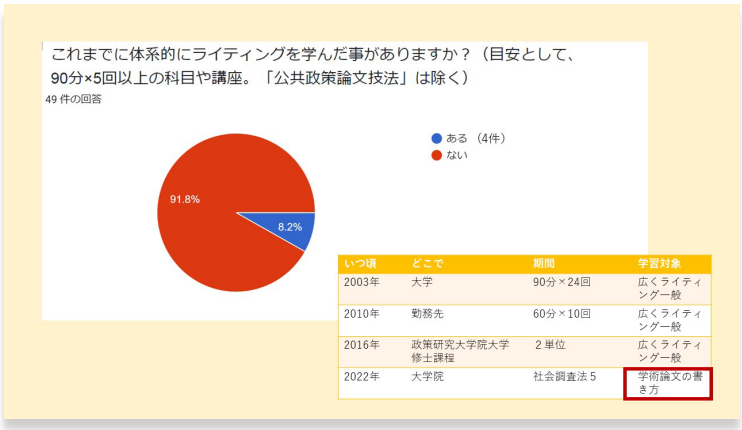


このように、思いのほか、プロタクトアプローチで十分そうなかたが一定程度いる一方で、基礎部分からの長期的なプロセスアプローチが必要な人もいるように思われます。

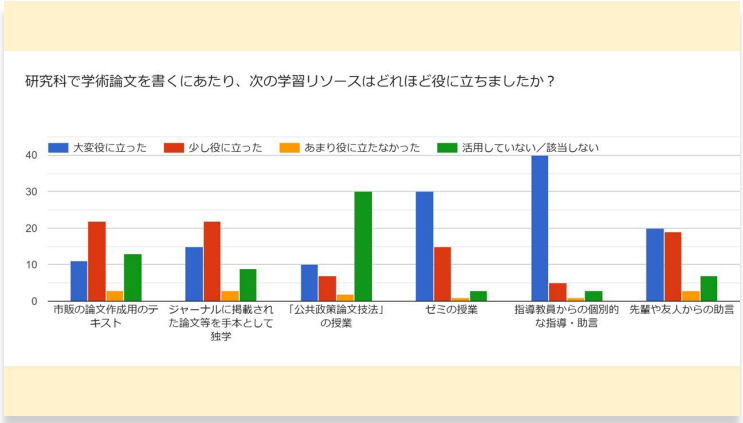
その他のアンケート結果もいくつか、ざっとみていきたいと思いますが、一方では単著や査読論文を執筆している人がいるのですが、他方では40%が卒業論文も書いていないことが分かりました。これが、先の「自信あり/なし」の結果と関係しているのかなあと想像しています。



アカデミック・ライティングを体系的に学んだことのある人は1名だけでした。広くライティング一般を含めると4名、8.2%です。残り90%以上は、大系的にライティングを学んだことはない。

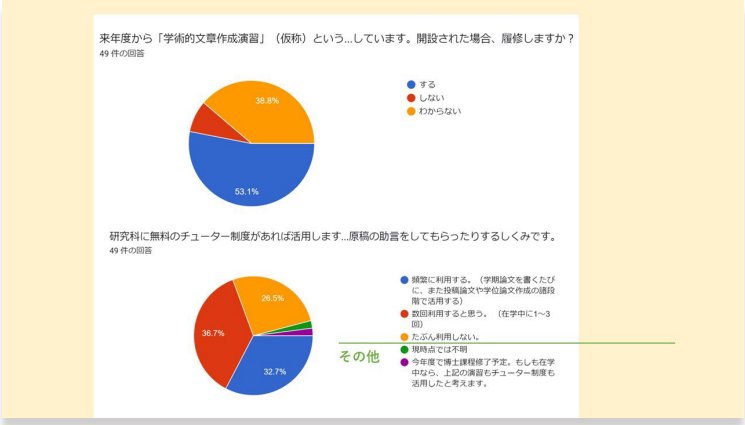


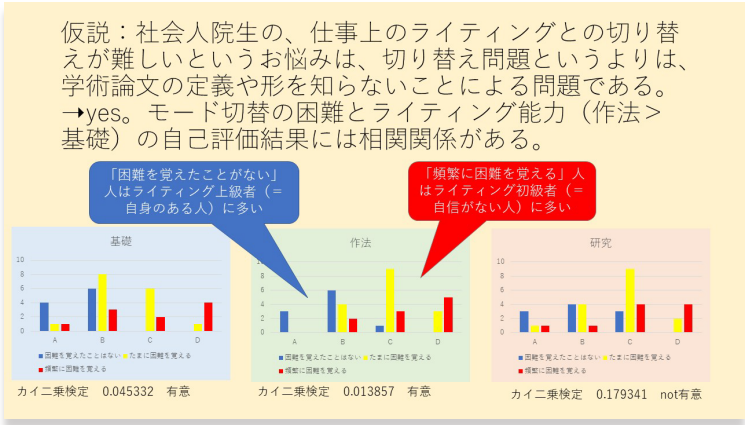
それでは、論文を書くにあたってなにが役立ったのかというと、「指導教員からの個別的な指導・助言」が一番。次に「ゼミの授業」、次に「先輩や友人からの助言」となっています。



ライティングの授業があったら履修するか、という質問に対しては、50%強が「履修する」。40%弱が「わからない」と回答されました。チューター制度があれば利用するか、という質問に対しては、30%強が「頻繁に利用する」、35%強が「数回利用する」、25%強が「たぶん利用しない」という回答です。時間の都合上、最後のスライドは割愛させていただきます。

わたしからの報告は以上です。駆け足になってしまいましたが、ご清聴ありがとうございました。



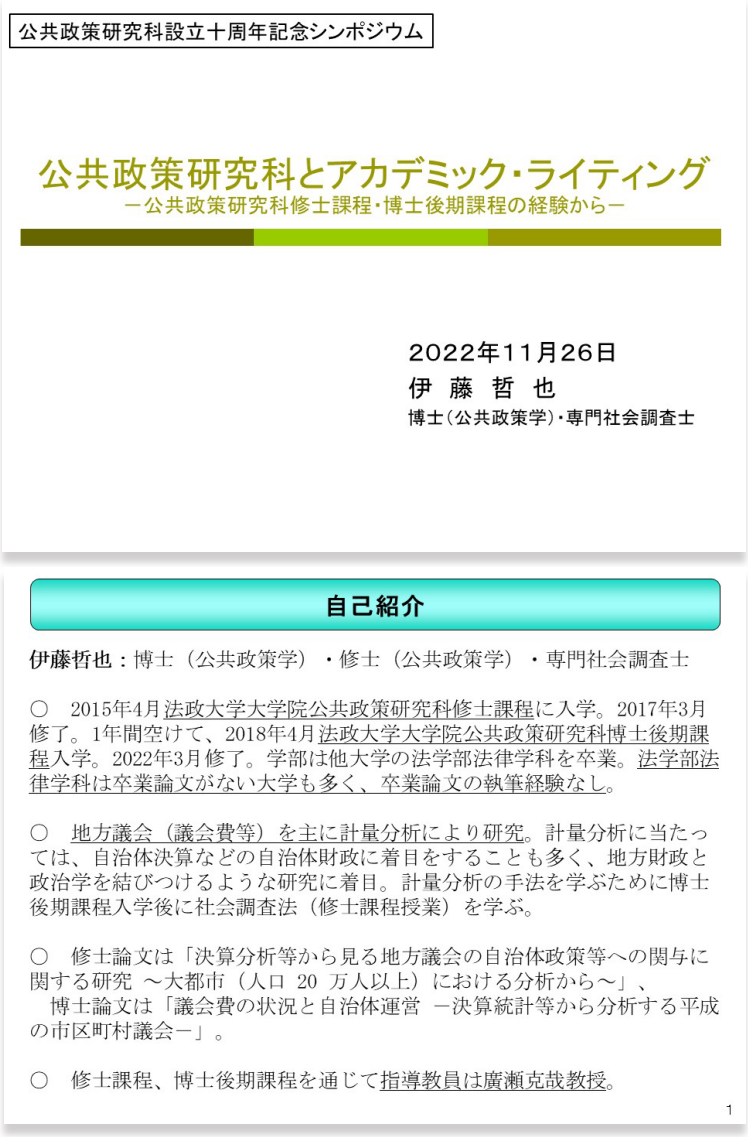


法政大学大学院公共政策研究科
博士後期課程修了・博士（公共政策学）
伊藤哲也

伊藤哲也と申します。本日の話題提供では、法政大学公共政策研究科で、修士課程及び博士後期課程を修了した経験を元に「公共政策研究科とアカデミック・ライティング」というタイトルで話題提供をさせていただきたいと思います。

自己紹介です。地方議会を主に計量分析により研究をしています。学部は、他大学の法学部法律学科を卒業。本日のテーマのアカデミック・ライティングに引き寄せてお話しすれば、法学部法律学科は卒業論文がない大学も多く、学術的な論文というのは、法政大学公共政策研究科で修士論文を書いたのが最初の経験になります。なお、指導教員は、廣瀬克哉教授になります。

１頁に書いてあることも含めて、10年間の公共政策研究科の歩みと、私の大学院生活を並べて年表にしたものです。



私自身は、2015年度に修士課程に入学、2016年度に修了、2017年度の1年はお休みして、2018年度に博士後期課程に入学して、2021年度に修了いたしました。

修士課程入学から、博士後期課程修了まで7年かかりましたので、大部分が公共政策研究科の歩みと重なっています。私が修士課程に入学した2015年度は、公共政策研究科開設後4年目の年になるのですが、現在の博士論文提出要件とほぼ同じものが定められ、甲号の博士号も2015年度以降は、毎年度5人前後に授与されるといった安定期に入りつつあった時期と言えると思います。

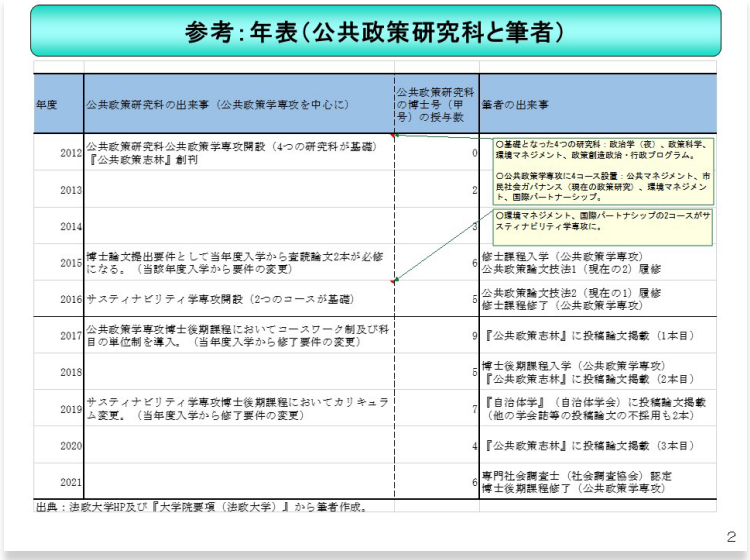
本日のお題の「アカデミック・ライティング」ですが、今回の話題提供を行うのにどういった意味だろうと改めて自分なりにHPで調べてみたのが、3頁及び4頁になります。

まず、3頁ですが、「アカデミック・ライティングとは、学術的文章や学術的文章を書く技術を指します」とした上で、「第一の特徴は『分かりやすい文章』」、「第二の特徴は『科学的な文章』」、としています。

「分かりやすい文章」の方は、「書き手は思考（考え）を整理する必要」とし、「科学的な文章」の方は、「主張を裏付ける根拠の提示が求められる」としています。

ここでは、6つのポイントとしていますが、その中では、「学術的文章は『序論・本論・結論』という構成」、「〈問い〉（＝何を論じるのか）と〈答え〉が必要」、「論証には根拠が必要です。客観的で適切な根拠を示せていますか」などが挙げられています。

これは、公共政策研究科学位授与基準です。3頁及び4頁のアカデ

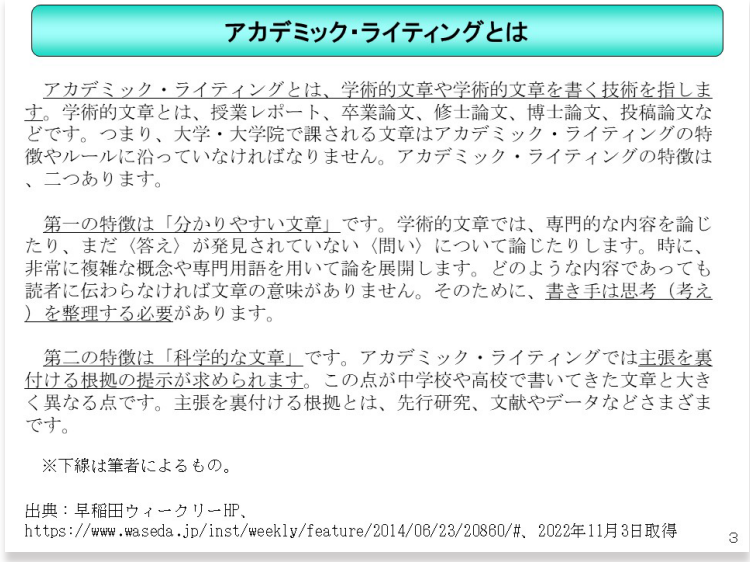


参考：年表（公共政策研究科と筆者）

年度	公共政策研究科の出来事（公共政策学専攻を中心に）	公共政策研究科の博士号（甲号）の授与数	筆者の出来事
2012	公共政策研究科公共政策学専攻開設（4つの研究科が基礎） 『公共政策志林』創刊	0	○基礎となった4つの研究科：政治学（夜）、政策科学、環境マネジメント、政策創造政治・行政プログラム。 ○公共政策学専攻に4コース設置：公共マネジメント、市民社会ガバナンス（現在の政策研究）、環境マネジメント、国際パートナーシップ。
2013		2	
2014		3	○環境マネジメント、国際パートナシップの2コースがサスティナビリティ学専攻に。
2015	博士論文提出要件として当年度入学から査読論文2本が必修になる。（当該年度入学から要件の変更）	6	修士課程入学（公共政策学専攻） 公共政策論文技法1（現在の2）履修
2016	サスティナビリティ学専攻開設（2つのコースが基礎）	5	公共政策論文技法2（現在の1）履修 修士課程修了（公共政策学専攻）
2017	公共政策学専攻博士後期課程においてコースワーク制及び科目の単位制を導入。（当年度入学から修了要件の変更）	9	『公共政策志林』に投稿論文掲載（1本目）
2018		5	博士後期課程入学（公共政策学専攻） 『公共政策志林』に投稿論文掲載（2本目）
2019	サスティナビリティ学専攻博士後期課程においてカリキュラム変更。（当年度入学から修了要件の変更）	7	『自治体学』（自治体学会）に投稿論文掲載 （他の学会誌等の投稿論文の不採用も2本）
2020		4	『公共政策志林』に投稿論文掲載（3本目）
2021		6	専門社会調査士（社会調査協会）認定 博士後期課程修了（公共政策学専攻）

出典：法政大学HP及び『大学院要項（法政大学）』から筆者作成。

2



アカデミック・ライティングとは

アカデミック・ライティングとは、学術的文章や学術的文章を書く技術を指します。学術的文章とは、授業レポート、卒業論文、修士論文、博士論文、投稿論文などです。つまり、大学・大学院で課される文章はアカデミック・ライティングの特徴やルールに沿っていなければなりません。アカデミック・ライティングの特徴は、二つあります。

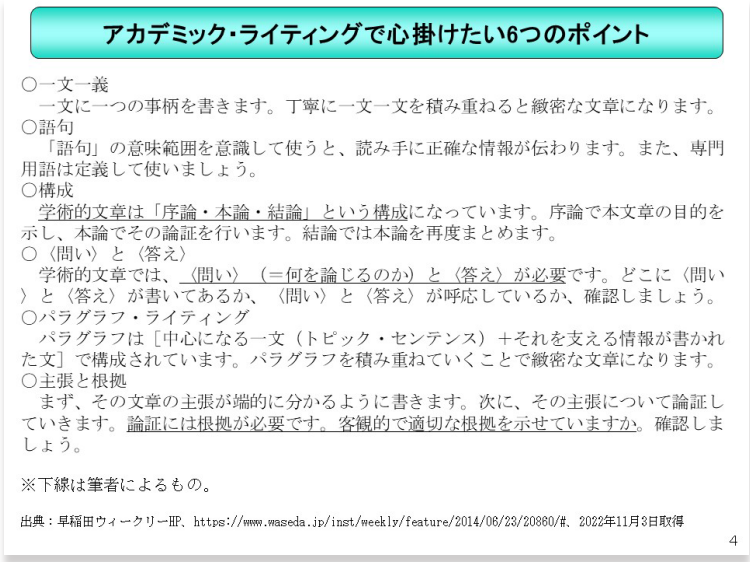
第一の特徴は「分かりやすい文章」です。学術的文章では、専門的な内容を論じたり、まだ〈答え〉が発見されていない〈問い〉について論じたりします。時に、非常に複雑な概念や専門用語を用いて論を展開します。どのような内容であっても読者に伝わらなければ文章の意味がありません。そのために、書き手は思考（考え）を整理する必要があります。

第二の特徴は「科学的な文章」です。アカデミック・ライティングでは主張を裏付ける根拠の提示が求められます。この点が中学校や高校で書いてきた文章と大きく異なる点です。主張を裏付ける根拠とは、先行研究、文献やデータなどさまざまです。

※下線は筆者によるもの。

出典：早稲田ウィークリーHP、
https://www.waseda.jp/inst/weekly/feature/2014/06/23/20860/#、2022年11月3日取得

3



アカデミック・ライティングで心掛けたい6つのポイント

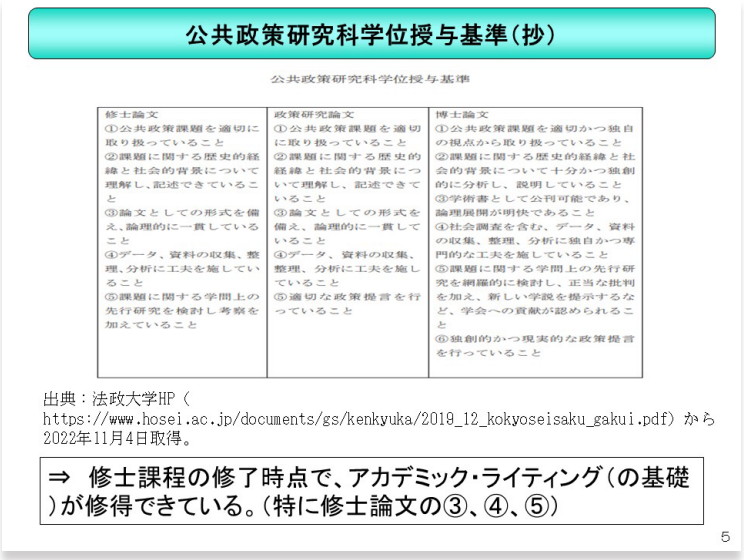
○一文一義
一文に一つの事柄を書きます。丁寧に一文一文を積み重ねると緻密な文章になります。
○語句
「語句」の意味範囲を意識して使うと、読み手に正確な情報が伝わります。また、専門用語は定義して使いましょう。
○構成
学術的文章は「序論・本論・結論」という構成になっています。序論で本文章の目的を示し、本論でその論証を行います。結論では本論を再度まとめます。
○〈問い〉と〈答え〉
学術的文章では、〈問い〉（＝何を論じるのか）と〈答え〉が必要です。どこに〈問い〉と〈答え〉が書いてあるか、〈問い〉と〈答え〉が呼応しているか、確認しましょう。
○パラグラフ・ライティング
パラグラフは［中心になる一文（トピック・センテンス）＋それを支える情報が書かれた文］で構成されています。パラグラフを積み重ねていくことで緻密な文章になります。
○主張と根拠
まず、その文章の主張が端的に分かるように書きます。次に、その主張について論証していきます。論証には根拠が必要です。客観的で適切な根拠を示せていますか。確認しましょう。

※下線は筆者によるもの。

出典：早稲田ウィークリーHP、https://www.waseda.jp/inst/weekly/feature/2014/06/23/20860/#、2022年11月3日取得

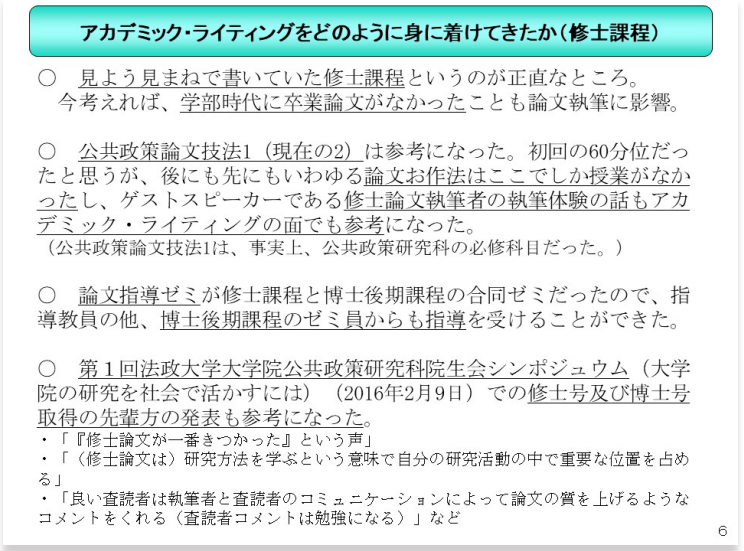
4

ミック・ライティングと照らし合わせて見ると、修士論文の③、④、⑤、あたりは、アカデミック・ライティングと内容が合致していると思います。すなわち、修士号の学位が授与された時点でアカデミック・ライティングの基礎はできているということになりますし、逆に基礎ができていなければ、修士号が授与されないということになります。



ここから、私の体験を踏まえてアカデミック・ライティングをどのように身に着けていったかをお話ししたいと思います。

まず、修士課程のころですが、正直に言えば、見よう見まねで書いていたということです。今考えれば、周りの大学院生より自分の論文リテラシーが低いなと感じたこともあり、学部時代に卒業論文がなかったことも論文執筆に影響していたと感じます。



公共政策研究科の授業としては、公共政策論文技法1は参考になりました。初回の60分位だったと思いますが、後にも先にもいわゆる論文お作法はここでしか授業がなかったですし、ゲストスピーカーである修士論文執筆者の執筆体験の話もアカデミック・ライティングの面でも参考になりました。

あと、論文指導ゼミが修士課程と博士後期課程の合同ゼミだったので、指導教員の他、博士後期課程のゼミ員からも指導を受けることができたのも良かったです。

ちょうど修士課程に在籍している時に、公共政策研究科院生会が立ち上がりまして、第１回の院生会主催のシンポジュウムで先輩方の研究への取組を聞くことができたのも参考になりました。

先ほど、お話ししたとおり、修士課程修了後、1年間、大学院に在籍していない時期がありました。この1年間を利用して、修士課程で身に着けたことの力試しの意味もあり、公共政策研究科の査読付き紀要である『公共政策志林』に投稿をしてみました。

まず、投稿にエントリーをしたら、投稿のための執筆要領が送られてきました。この執

筆要領で形式面での論文お作法を体系的に確認することができました。これが自分自身の論文執筆時の基本スタイルになり、博士論文も公共政策志林の執筆要領により執筆しました。

また、査読は、公共政策研究科の先生方などが担当をされますが、査読コメントについては、通信教育のような感じで指導をしていただき、論文の書き方を再認識するいい機会になりました。

『公共政策志林』の執筆要領の一部です。

最後に、博士後期課程に入学してからの状況ですが、私は、自分自身の研究のスキルを身に着けるために、修士課程の授業を履修しました。博士後期課程の大学院生は、あまり修士課程の授業を受ける人はいないのですが、修士論文を書き終えた状況で授業の履修をすると、修士課程の時にあまり理解ができていなかったアカデミック・ライティングに関する部分についても理解が進んだ部分があります。

アカデミック・ライティングをどのように身に着けてきたか（空白の1年）

○　修士課程修了後、大学院には残りませんでしたが、修士課程で身に着けてきたことの確認の意味もあり、『公共政策志林』（大学院研究科紀要）の査読付き論文に初投稿。（修了生も投稿資格があります）

○　『公共政策志林』には、投稿のため執筆要領があるので、いわゆる形式面での論文お作法も投稿論文の執筆に当たって体系的に確認ができた。これが自分自身の論文執筆時の基本スタイルに。（投稿先の学会等により執筆要領が異なるのでその点は注意）

○　いただいた査読コメント（公共政策研究科の先生方等で査読）を読むと、『公共政策志林』は論文の通信教育だと認識。論文の書き方を再度確認する良い機会になった。

（査読コメント例）
本論文は、先行研究や先行調査（以下では「先行研究等」とする）を丹念に実施している点は評価できる。一方で、先行研究等ですでに明らかにされている部分はどこまでであり、その先行研究等をうけて、本論文の議論のどの点に新規性があるのか、議論の枠組みの立て方が新しいのか、などについては、やや薄い感じがする。この点は、より明確にされるとよい。特に14 頁に「仮説」が提示されているが、その仮説提示と先行研究等の関係がやや薄い感じがする。先行研究等を踏まえた、本論文の新規性については明確にしておくべきと考える。

7

参考：『公共政策志林』執筆要領（抄）

『公共政策志林』執筆要領（2020 年度）

1. 原稿の長さ

ア）和文原稿の長さは、「研究ノート・投稿論文」（※学生執筆論文）、「寄稿論文」（※教員執筆論文）とも 24,000 字を上限とする。字数には和文表題・英文表題・図表・注・文献リスト・和文要旨を含む。ただし、コース・専攻で承認されれば特例として上限を 48,000 字とすることも認める（希望する場合は投稿申込書の該当欄に記入すること。希望が認められたかどうかは 7 月中に編集委員会から通知する）。
イ）英文原稿の長さは、「投稿論文」「寄稿論文」とも、1 万単語以下とする。単語数には表題・図表・注・文献リスト・英文要旨を含むが、和文要旨は含まない。

2. 要約

ア）和文の「投稿論文・寄稿論文」には和文要旨（600 字程度）をつける。
イ）英文の場合には、英文要旨（200 語程度）および和文要旨（2,000 字程度）をつける。

3. 書式

原稿の書式は、以下のルールに従う。
ア）原稿は、A4 版の用紙を使用して、40 字×36 行（明朝体 10.5 ポイント）で見やすく印字する。各頁には、行番号と頁番号を付ける。
イ）「投稿論文」「寄稿論文」は、和文表題・英文表題・和文要約・キーワード・本文・注・参考文献の順序で構成する。
ウ）英文活字は、Times New Roman を使用する。

4. 表記法

ア）節、項には半角数字を用いて、それぞれ「1.」「1.1」「1.1.1」のように記す。
イ）数字は、原則として、半角のアラビア数字とする。ただし、「第一人者」「第三者」「十人十色」などは漢数字を使用する。「,」「.」「（ ）」「=」などの記号類は全角文字を用いる。
ウ）暦年は西暦で統一する。元号を使用する場合には、「2011（平成 23）年」のように記す。
エ）外国人名や外国地名はよく知られたものの他は、初出の箇所にその原綴りを「シン（Peter J. Shin）」のように記述する。

8

あと、博士論文の提出に当たっては、査読論文が2本掲載になることが条件になっているので、この論文提出要件も意識をしながら、査読論文の投稿を積極的に実施しました。査読のコメントは採択不採択に関わらず勉強になりました。

最後に、まとめとして話題提供を4点ほどさせていただきたいと思います。

１点目として、学際的な研究科なので、様々な学部学科卒業の大学院生が在籍していると思いますが、コースの性格上、公共マネ

アカデミック・ライティングをどのように身に着けてきたか（博士後期課程）

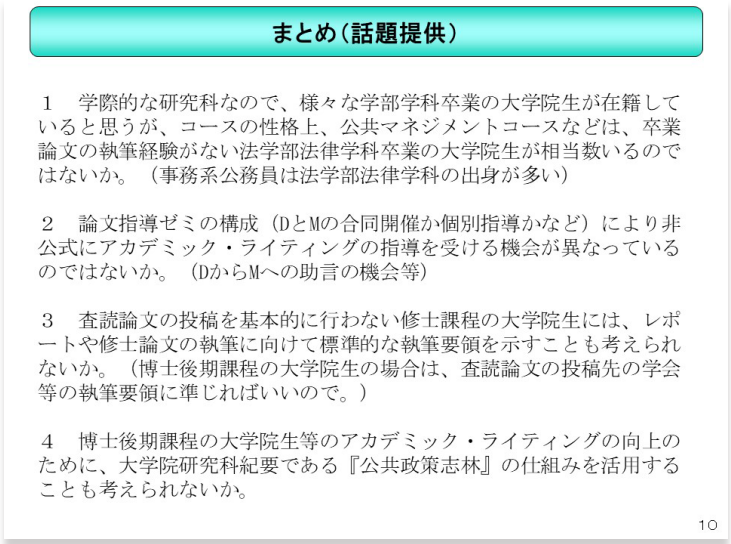
○　博士後期課程に入学後も研究に必要なスキルを身に着けるために修士課程の授業（社会調査法1～8等）を履修。授業の中で論文の書き方を再認識。（社会調査法の履修により専門社会調査士の資格も得る）

○　博士論文の提出要件として査読論文2本（うち1本は『公共政策志林』も可）という条件があるため、提出要件も意識しながら、査読論文の投稿は積極的に実施。
→査読のコメントは採択不採択に関わらず勉強になる。論文の形式論に係るコメントもある。
（ただし、査読論文（特に学会誌）にアカデミック・ライティングの教育機能を求めるのは、本来的な話ではないかもしれない。）

（コメント例）
○そして、本研究の結語であたる「５．おわりに」の第3段落「本論文では論じなかったが、総合議決条例については・・・・」の箇所で「長により議会の権限が実質的に調整され、政策決定に与える影響が調整されるという事である」と指摘されている。これは理論的には大変重要な視点である。これが実証データから支持される、あるいは、否定されることが示されるならば、本論文は日本の地方政治研究へ貴重な理論的貢献をなすものとなろう。しかし、「本論文では論じなかった」のであるから、裏付けとなるデータが記載されていない。そして、そもそも、論文の形式論として「本論文では論じなかった」内容を結語の部分で扱うことは不適切であると言わざるを得ない。

9

ジメントコースなどは、卒業論文の執筆経験がない法学部法律学科卒業の大学院生が相当数いるのではないかと思われるので、ここをどう考えるか。



2点目として、論文指導ゼミの構成により、ドクターコースの大学院生からマスターコースの大学院生への助言のあるなしの差がでてくることはないのか。いわば非公式な指導の有無なのですが、ここをどう考えるか。

3点目として、査読論文の投稿を基本的に行わない修士課程の大学院生には、レポートや修士論文の執筆に向けて標準的な執筆要領を示すことも考えられないかです。博士後期課程の大学院生になると、査読論文の投稿などを通じてカタが出来てくると思われますが、修士課程の大学院生は、意外とこのあたりで悩んでいる方もいらっしゃるのではないかと思います。

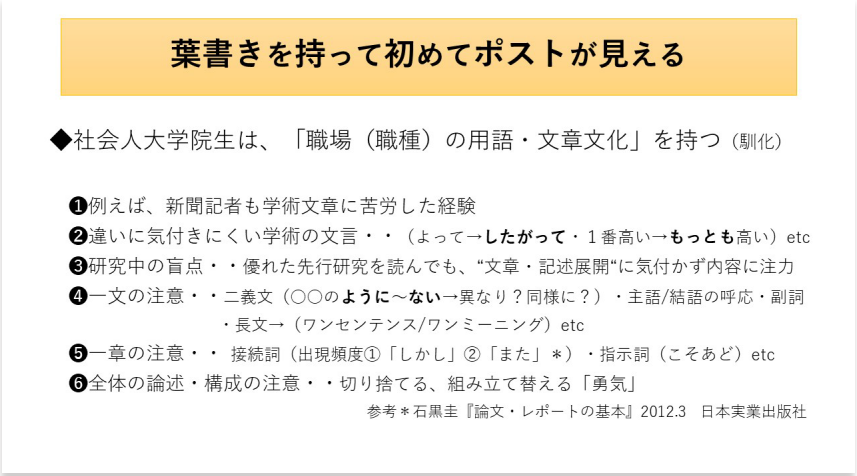
4点目として、修士論文を執筆し、基本的なアカデミック・ライティングが身についている博士後期課程の大学院生等のアカデミック・ライティングの向上のために、大学院研究科紀要である『公共政策志林』の仕組みを活用することも考えられないかということです。例えば、1本目の査読論文として『公共政策志林』への投稿を促す等です。査読自体をアカデミック・ライティングの教育に使う事はいかがなものかという意見もあるかと思いますが、査読をする先生方の御負担もあると思いますが、研究科紀要であれば、教育的な面もあるかと思いますので、ここをどう考えるかということです。

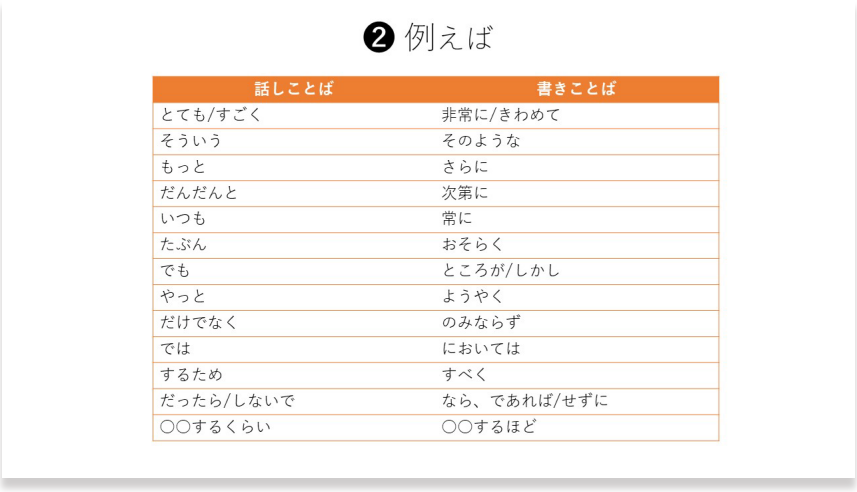
以上をもって話題提供とさせていただきます。よろしくお願いをいたします。

法政大学大学院公共政策研究科
博士後期課程在籍
田中典子

皆さん、こんにちは。在校生の田中典子と申します。それでは10分ほどになりますが、私からもお話をさせていただきます。

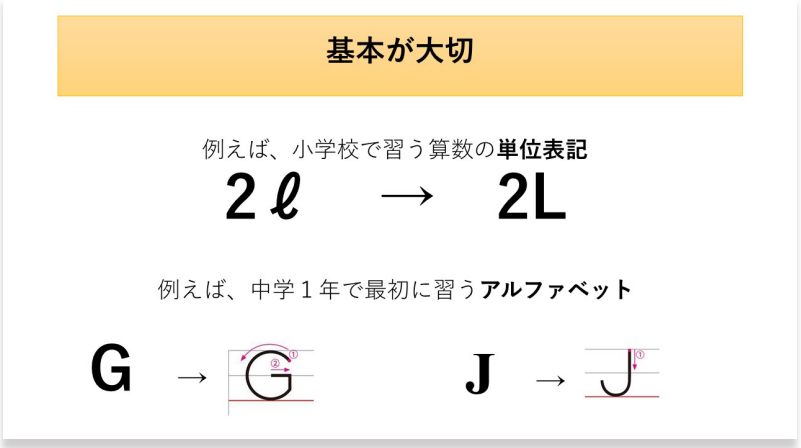
自己紹介を視覚認知で作ってみました。この中で大学院の進学をお考えの方、今日ご参加の方の中にはいらっしゃるのでしょうか？あっ、いらっしゃいますね。あまり参考にならないかもしれませんが、アカデミックガウンで記念写真を撮れるその日までという感じで、私は頑張ってまいりました。新潟県出身です。仕事は小中高のスクールカウンセラーを現在、3校担当しており、都立高校で心の授業というのも3校担当し授業をしていたりする者です。学びのトピックとしては、1995年の阪神大震災の時に、大阪の豊中という所で被災し、そこから心のケアといった事がすごくフューチャーされるようになり、トラウマについてもう少し研究したいと、ボストン・ヴァンデコークトラウマ研究所で研修。翌年は発達障害の理解や対応、不登校が非常に仕事の中で大きな部分を占めますので、そちらをドイツのウィンスハイム市立特別





支援学校に見学に行くなど、そうした学びをしている中で、大学院のキャリアデザイン研究科に入りました。16年に、修士を終えています。少しタイムラグがあり、2021年、昨年度、法政大学の公共政策研究科サステイナビリティ学専攻博士後期課程に入りました。私のテーマはキャリアデザインの時もそうでしたが、不登校についてです。博士課程では、体調不良で中々学校や用意されているような施設に、通いたくても通うことができない不登校生、施策に届かない不登校生がいるのでは、との問題意識から、身体症状の視点をもう少し教育政策に取り入れてもいいのではないか、というテーマで研究しています。

さて、基本はとても大事と思います。例えば、少し余談かもしれませんが、見ていただきます。今の小学校では、チョークはないのかな、ありました（板書）。以前、私たちの頃は、例えば、「2ℓ」という表記を習ったんですが、今、子供たちは、「2L」と単位の書き方を習います。今はパソコン指導があるので、小学校3年生の後期からローマ字は習います。が、中学に入学すると改めてローマ字を習います。英語でABCからです。私の時はGをこう習いました（板書）。こうだったんですね、大文字は。今、違います。よく見てくださいね。1、2、3（書き順）となります。ヴァンガードが変わっています。さらにJは、ブドウの房のようについて、これが大文字だよと習いました。が今、公立中学校ではJリーグと一緒で、これがJの大文字です。これも間違いではありません。これも間違いではありませんが、スタンダードも指導要領によって、このように変化する。話を元に戻してこれは余談でしたが、私たちも、このようにきちんと基本を習った上で英語を学び進めるように、アカデミック・ライティングについても学ぶ機会が欲しいなぁというのが、私の今日のお話になります。皆さんお気づきかと思いますが、アカデミック・ライティングがなかなか身につかない、この作法がわからない。先程の色々な先生方の話の中でも、先行研究を読んでいるだけで書ける人がいますよね。また、アメリカで最初に色々学んだのでビックリしましたという先生方の話が複数出て来ました。ここから、どうもアメリカの方では丁寧に最初スタートの時にアカデミック・ライティングや研究方法を教えるんだということが分かりました。もし、日本の大学院生にそのアカデミック・ライティングの力があまりついていない、あるいは使えない人もいるとしたら、「どこに課題があるんでしょう」と思いながら聞いていました。犯人探しではなくて、双方に足りない視点があるのではないかというのが、今日のテーマではないかと思います。日本は中々、専門家がいないというのを、今日はラッキーなことに、佐渡島先生をアテンドすることで控え室に行く時に、お聞きしました。中々専門家がいないので、そ

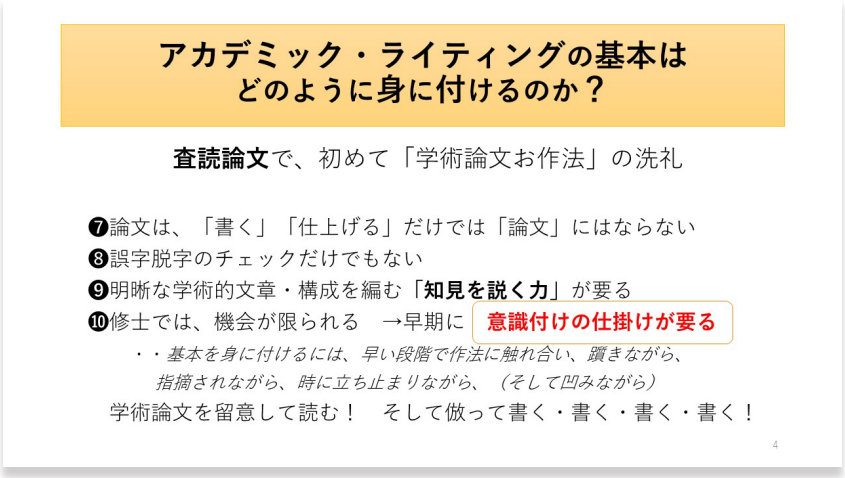


こをきちんと教え込むというプログラムが難しいかもしれない。そんな風に感じながらお話をお聞きしました。そこを教える、という視点が、確かに教える先生方や大学の方でも薄かったのかもしれないなと、誤解を恐れずに、やはりそんなふうに思います。更には、私たちも先行研究を読んでいても、中々身につかない場合がある。それはなぜかということですね。私は心理が専門ですので、これが“葉書をもって初めてポストが見える”んです。私たちみんな視力を持っているのですが、視力ではなくて視覚認知という力も持っています。見たいものだけ拾って見ることができるというものです。赤ちゃんがたくさんいても、お母さんが子供の泣き声を聞いて、あっ、家の子の声って、選択的にその情報をキャッチすることが私たちはできます。すると、私たちは初めての研究という道、街に行って、あそこにこれ、こんな研究がある、 こんな先行研究がある、あっ、こんなデータがある、と街を彷徨いますが、あれ、ポストってどこにあっただろうって、皆さん初めての街に行ったらおそらくわからないと思います。ところが、はがきを出そうと手に持った時にポストが見えてくる。そういったことになります。私たちは、こんな風にアカデミック・ライティングの作法があるんだよということ、それがはがきになるかと思います。ああ、ここでもハガキ、あっ、出すポストがあった。ここにもあった、とチェックしながら町をさまよって先行研究をどんどん読み進めることができたらなと思ったりしました。

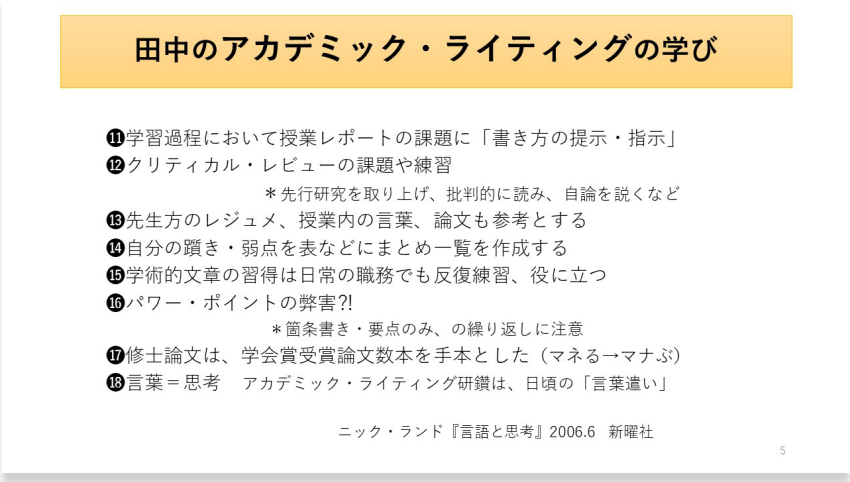
社会人大学院生は、先ほどお話しにも出ましたし、佐渡島先生のレジュメにもありましたね。やはり社会人なので、職場でそれぞれの文化を持っている、心理学では馴化と言います。やはりその場で慣れてくる文章作りというものがあります。それが実に学術的なお作法の中では邪魔になることがあるのだと、私も身を持って体験しました。ここから通し番号になりますので、もし何かお尋ね、ご質問がありましたら番号でお尋ねください。例えば、新聞記者の人も普段記事を書いていますよね。でも、学術文章に非常に苦労したという経験を読んだことがあります。それから、うっかり気づきにくい学術の文言があります。私は「よって」と書いた論文を「したがって」に指導されたこともあります。それからデータを持ってきた時に「一番高い」という表現を「最も高い」というような学術の文言に。研究中の盲点として、優れた先行研究を読んでも、先ほどのように手にはがきを持って、いろんな先行研究に学術的な作法が使われていると、それを注意しながら読むんだよ、とハガキを持っていないとポストに気づかない。先行研究の中身に注力してしまって、明晰な文章がどのように作られているか、というところに気がいきませんでした。まず、一つ一つの文章作りで一文の注意があります。佐渡島先生もご丁寧に説明してくださいました。ちなみに佐渡島先生の本を読ませていただきましたが、わかりやすくこちらにも書いてありました。例えば右の文ですね。二つの意味にとれるような文、それから主語が結語に呼応していない、副詞の使い方、さらに長文ですね。やはり何度も出てきています、ワンセンテンス・ワンミ―ニング、そうした一文自体の注意がまずあること。次に、一章の注意。これはパラグラフと言われるのですが、私は、佐渡島先生の本を読むまで日本でいう段落とパラグラフの違いは全然わかっていませんでした。まず、このパラグラフでは何を説くのか、ということを一文で出していく。最後にそれを拾うと全体が見えてくるような書き方になるというのが、非常

に、なにか目から鱗のような思いをしました。さらに６番は全体になります。論述・構成の注意です。私はまだまだ研究者として幼いので、捨てる勇気がないことに気が付きました。たくさん先行研究を広げて読むと、切り捨てる、これは必要ないとか切り捨てられなくなり研究を編むうちに愛着がわいてくるような気がしています。すると、組み立てたり切り捨てたり、要らないものを整理して、読みやすく淘汰していくということが、とても私は苦手だな、と。読むと愛着が出てきて入れ込みたくなるというのが、文章が分かりにくくなる私の傾向だと気付きました。先ほどの黒丸の二番ですね。これについて、例えば、という表を作っています。こういったことをきちんと最初の頃から意識して書き慣れて、馴化が私の中で行われていれば、もう少しいい修論を書けたのかなと今にして思っています。

さて、そのアカデミック・ライティングの基本は、どのようにして身に付けるのでしょうか？私自身は、査読論文で初めてそのお作法の洗礼を受けました。とても丁寧に見てくださいましたので、査読の方のコメントが大変参考になりました。そして、改めて自分の文章の稚拙さに気づいて、変なのですが「本気が入った」こんな感じ、電池が入ったような感じがいたしました。つまり、論文は書く、仕上げる、書き終えるだけでは論文にはならないのだと改めて。８番、誤字脱字のチェックは、もう提出のギリギリまで、それはそれは繰り返ししましたが、それではないのだ、と全体がきちんと整っているのか、９番ですね。明晰な学術的文章で構成が編まれているのか、実証を説く力がいるのだな、と言う事に気付きました。



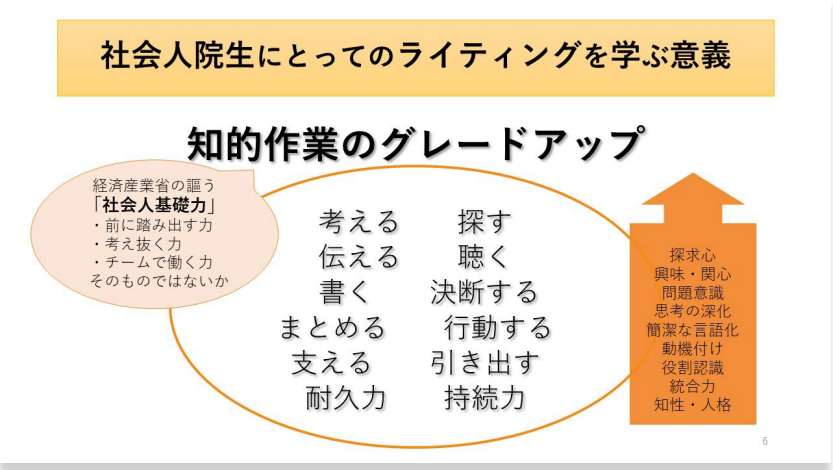
修士では先ほどお話しにも出ましたが、学長先生が「実質一年半で修士は書かなきゃいけないからね」。なんだかちょっとホッとしました。修士ではやはりその機会が限られます。短時間で提出を目指すとなると、文章力のことに時間を使うというのが難しかったのが事実でした。こうしたことを気にかけながら書いていくんだよ、という「意識付けの仕掛け」がいるのではないかな、と私は思います。これは、カリキュラムの作成側へのお願いにもなるかと思います。基本を身につけるには、早い段階で作法に触れ合いながら、そしてつまずきながら指摘されながら、それでも自分の癖があるので、時に立ち止まりながら、そして凹みながら“学術”論文に留意して、まずは読む、そして倣って書く、書く、書く、書くかな、と思っています。



私の場合のアカデミック・ライティングの学びのおさらいになります。学習過程においては、授業レポートの課題に書き方の提示や指示を頂いたことが、分かりやすかったです。“あなたの研究分野の中で一番今取り上げたい先行研究を一つ取り上げなさい。それを批判的に読んで、どこがどう批判なのか、更に他の先行研究から、ここのデータが甘いんじゃないか、これはそう言い切れるのか、と自分で批判的にクリティカルレビューを書きなさい”という課題が非常に役に立ちました。それから13番、この手にはがきを持ってからですね、私は先生方の授業のレジュメや授業内の言葉、それから先生方の論文などもすごく参考としてポストが見えるようになってきたので、どのように先生方が説いていらっしゃるのか、論じていらっしゃるのか、編んでいらっしゃるのか、参考とするようにしました。以来、自分のつまずきや弱点を表などにまとめて、一覧をして作成し、自分に注意を促す、そんな風に工夫しています。それから学術的文章の習得は、日常の職務でも反復練習など役に立ちます。早速、職場で取り入れたところ、簡潔に無駄なく、ものが書けることに気がつきました。また、パワーポイントです。私たちの仕事や、講演会とか研修会に呼んでいただくため、パワーポイントの作成を日々していますが、このやはり弊害。先程、佐渡島先生でしたか、箇条書きのような職場文化とおっしゃいましたが、やはりパワーポイントは簡潔に、です、ます、を付けずに箇条書きのように要点のみが繰り返えされてページが進むので、やはりこの弊害もあるのじゃないかなと思ったりします。ほかに修士論文で私の場合は、心理学会や行動学会とか、そういうところの学会賞を受賞した論文を数本手本として、まずは“学ぶ”の原型“まねる”、まずは倣って書きました。このように説いて展開するのだと思いながら、読んで参考にいたしました。

それから、言葉＝思考。アカデミック・ライティング研鑽は、日頃のことば使い、きちんと無駄なく大切に必要なことを説明する。その後で補足するといった言葉遣いで、文書でなく話し言葉でも研鑽が積めるのではないかなと、実感しています。最後のレジュメになります。今日のテーマでもあります、社会人院生にとってのライティングを学ぶ意義。これは、知的作業がグレードアップするのではないか、と私は非常に思っています。経済産業省の方では今、「社会人基礎力」、これを挙げているんですけれど、まさにそれは全部言えているなと思います。考えます、それから探します、伝えようとします、聴きます、書きます。決断をします、いらないものを除けたり、それからまとめます。そして行動に移します。それから、自分が相手を支えるために言葉を使ったりしますから、相手のものを引き出したりもします。また、山のような先行研究を読んでい

くことは耐久力にもなります。絶えずに歩んでいくという、持久力・持続力にもなるなと思っています。これは仕事にも非常に生きる力が育成されるものと思います。まとめると、オレンジのところですね。探究心、疑問を持ったり、それを自ら答えを見つけたり、それから、興味・関心を持って事に当たる。さらに、これって本当にそれでいいの？という問題意識ですね。思考の深化、一歩深く考えてみる、それを短くまとめて分かりやすく伝える簡潔な言語化、さらには動機づけ、なぜそう思うのか。そして役割、認識ですね。私の仕事は、特に先生方をサポートするものなので、私たちが前に出すぎないように、先生方、担任の先生を押退くと言うところがあるんですが、役割の認識なども私は最近、意識が高くなっているように感じています。さらには、全体を常に俯瞰で見る、主観的になり過ぎてはいないか、自分の思いだけになりすぎてはいないかという、全体を見渡す統合力、加えて知性や人格にも非常にアカデミック・ライティングを学び、研究を進めるということが、役立っている、意義を持っているなと感じています。早口になりましたが、田中からは以上となります。ご清聴ありがとうございました。



渕元

田中さん、ありがとうございました。そうしましたら。金藤先生、よろしくお願いいたします。

法政大学大学院公共政策研究科
金藤正直

ちょっと感想めいた話と、私が今、大学院での指導経験の中から少しお話をさせていただこうかと思っています。今日は、アカデミック・ライティングというテーマで、お話が進んでいると思うんですけれども、ライティングの技術というのは、私個人の院生の時に経験したこととか、また教員になって、やはりその色々と指導している中で感じていることは、あの先生方や皆さんが今おっしゃっていただいたことが全てなんですけれども、私自身が考えているのはあの書くことの意味とか意義とかをちゃんと考えてるのか。どうやって、そのライティング技術を生かした文章を書いていくのかということのまず前提をちゃんと知っておかないと多分書けない、と思うんですよね。全てに言えること、共通していることは何かというと、良い論文を、いい文章をどうやって書くかといった時に、確かにライティングっていう技術ってのはものすごく大切です。今日先生方がお話した内容は、ものすごく大切なんですけれども、そこに行くまでの過程っていうのが、私自身はもっと大切じゃないかって思ってます。先ほど田中さんがおっしゃっていたように、パワーポイントの弊害っていうのもあったんですけれども、まず書く前に重要なのは、文章を書く前提となるもの。情報システムを作る時、まず概念設計っていうのをすると思うんですけれども、それがまず大事だと思うんですね。すなわち、それは、文章を書かれた時に黒板に絵を描くっていうことなんですよ。それは何を求めているかというと、書いてあることを絵で描いて見える化しないと、結局その文章も研究もダメだ、ということを理解してもらいたいんですよね。あとは何が問題なのかということを知る上では、文章を見るよりはむしろ絵で描いた方が良い、っていうか楽。私自身はそれがすごくわかりやすいと思っています。また、私以外のメンバーもどこが悪いんだろうっていうことも、ひと目で分かるんですよね。研究したことを書いてくれっていきなり言ったって書けないので、まずはパワーポイントを使って報告をしますよね。その時に最後でも良いし、最初でも良いんだけど、絵（ポンチ絵）を描いてくれ、とりあえず。絵が描けなければ、三角でも四角でも丸の絵もいいですし、文章の構成でも良いので描いてくれと。こうすることによって、今書いている文章自体が論理的なのかということと、あとなにか問題がないかどうかということを探ることができます。それは繰り返しますけれども、教員である私と他のゼミメンバーがひと目で分かるということ。さらには自分自身が客観的にそれを明確にすることができるっていうことなんですよね。そういった作業を繰り返してほしい、常にゼミ

メンバーには常に伝えてはいるんですけれども、なかなか難しい作業です。でもそれは訓練だと私は思います。何度も何度も繰り返して練習を繰り返すんですね。まあ、野球で言うと素振りをするとかね。あのトスバッティングをするとかっていうことと、同じことで何度も何度も繰り返すことが非常に大切なんです。けれども、なかにはセンスがある人っているんですよね。さっきあの逆上がりができるって話をされていたと思うんですけど、すぐにできる人がいるじゃないですか。やっぱりそれは運動神経が良いというセンスなんですよね。センスってあれ、なかなか身につけれないんですよね。だから、できない人は努力するしかないです。練習するしかないんですよ。それと論文の作成も私は同じだと思っています。だから、それを何度も何度も繰り返して絵で描いて、またその絵で描いたものを文章化し、文章化したものが本当に絵と対応しているのかどうなのかっていうことを繰り返して行くことによって、あのなんて言うのかな、まあ、構成も内容も良い（センスの良い）ものが一歩一歩作れていると私自身は思う。そして、その文章を書いていく上で当然必要となってくるのは、今日あの先生方が先ほどおっしゃっていた、あの発表していただいたライティングの技術と思います。ですので、私自身が思うのは、それぐらいなんですけど、非常に簡単に言っていたと思うんですが、ものすごく難しい技術だと僕は思っています。ですが、やり方としては非常に簡単だし、それを何度も何度も繰り返して、まず人に見てもらって、本当にそれが正しいかどうか、それで本当に良いかで相手（聞いている側）を説得し、本当に納得しているかどうかをちゃんと判断するのが非常に良いやり方だと私自身は思ってます。ですので、論文をこれから書こうとされている方とか、なかなかうまく書けないと考えている方は、ここのお話しした作業を繰り返しつつ、私のような教員がいないところでもどこでもいいので、ゼミメンバーにそれを見てもらって、それを何度も繰り返してやっていく。そして、先ほど皆さんがおっしゃっていたライティング技術を上手く使いながらその絵をちゃんと文章化できているかということ。いきなり長い文章を書く必要性はないと思います。ですので、5、6ページでも良いので、それをちゃんとゼミの人に見てもらって、誰しもがそうだと思えるようなものを書いていけば、必ずや良い論文が書けるんじゃないかなと思ってます。本日対面で何人かゼミ生の方もいらっしゃってますし、オンラインでもえっとゼミのメンバーが何人かがいらっしゃると思うんですが、うなずいている方や「あちゃー」と思っているか方がいるかもしれませんが、今回お話しした作業の重要性を気づいていただきつつ、ほかの方もこの私の考えに賛同いただけるのであれば、それをぜひやっていただきたいなと思っています。こんな感じです。

第３部 その2 ディスカッション

渕元

金藤先生有難うございました。先生方から頂いた講演からパネルディスカッションでの報告を含め、最後に大切なまとめをして下さったなと思っております。文字通りまとめになりますが、「絵を描く」という行為それ自体、具体的なキーワード、抽象的な営みですが、文字で書くところを改めて絵を描くことによって抽象度を上げていくという、その訓練ができるといいなと感じました。

それからセンスということも先生が仰って下さいましたが、そのセンスがない場合に、実は自分もそうだと思っているのですが、どういうふうに絵を描くトレーニングをするべきなのかということも今の先生方の報告を伺いながら思っていました。

やはり論文を書いていく際、「抽象的なところ」と「具体的なところ」を行ったり来たりするっていうこと、その往復作業をひたすら行うということになると思うのですが、それがなかなかできなくて、例えば、私はお蕎麦が好きです、私はスパゲッティが好きです、うどんが好きです、ほうとうが好きですっていうふうに言っていると「くどく」なるので、私は麺類が好きです、とまとめて抽象化するということを、学術論文の中でも繰り返し、繰り返し行っていくと思います。これはすごく単純な例を使ってお話し申し上げましたが、絵を書くっていう行為になるとなかなかできなくて、後はやはり抽象的なものは望ましくないのではないかという思い込みみたいなものもあったりするのではないかと思います。

田中さんから小学校や中学校での学びの変化が生じている旨のお話があったんですけれども、子供の頃から「具体的に説明しなさい」というふうに育てられてきた、教育を受けてきたという面があって、そのせいにするわけではありませんが、「抽象的」な説明を行うと、「空中戦」のようなものになってしまうのではないかという恐れもあって、結局くどくど説明しがちになってしまう、そのようなことを訓練によって、例えば研究科の中でカリキュラム上の科目に出していくか、出して行くとしたらどういうふうにやっていけばよいのかと言った時、どういう分野かは不明ですが、論理学的思考を鍛えるような訓練が必要なのか、もっと認識論的に具象から抽象に上って行って、またそこから具象に降りてくるといった作業ができるような訓練をどういうふうに提供していけるのだろうかなと考えています。

具体的には来年度から「学術的文章の演習」という科目を研究科のカリキュラム上に設定していくことになりましたけれども、どういうことを教えていくべきか試行錯誤しながらやっていかなくてはいけないと思います。

また私の感想として、それも比較的具体的に述べてしまったかもしれませんが、どういったカリキュラムが望ましいかを考

える中で、佐渡島先生から早稲田大学で英語でチュータリングをすることの実践についてのお話もありました。英語と日本語の往復作業も具体と抽象の間の作業の一つに入ってくるのではないか、と思いました。

私自身は修士論文を英語で書いたのですが、留学先で論文を英語で書いて、それがすごく楽しかったんです。英語で書くという行為は自分の中では不自由なんですね。英語が流暢でないものですから。なのに母語が日本語である自分が英語で書くことが思いのほか楽しくて。ですが日本に帰ってきて博士論文をいざ日本語で書いてみるという段になると非常につらかった。この違いは何なんだろうと。このことが今でも自分の中であまりうまく説明できてなくて、英語という言葉を紡いでいくということだからこそ、ことさら先程田中さんが「文章を編む」という表現をされていましたが、そういうことを留学時にことさらに認識したからこそ、逆に楽しかったのかなあと思ったりしました。

そういう意味では異なった言語で教育をしていくことはどういう意味を持つのか、後は、今私たちは社会人大学院というところで、アカデミック・ライティングについて検討をしていますが、学部生への指導との違い、もしくは伊藤さんからも指摘があった点、博士課程における『公共政策志林』への投稿を通じた教育的効果は重要と考えていますが、修士課程においても同様にすべきで、学部、修士、博士とその教育の在り方は同じでよいのかどうか、「同じだよ」っていうお話もあるかもしれませんし、または違ってくるべきなのか、違いがあるべきとすればどうあるべきなのかということも個人的に伺ってみたいポイントです。

もしよろしければ、以上の点について議論頂きたいと思いますが、限られた時間の中ですし、皆さんのプレゼンテーションも時間の管理を厳密に行って下さり、途中省略された箇所もあったりしたかと思いますし、またパネリストの先生方同士で、少しこういったことも聞いてみたいということがあれば、その点をお話しして頂くこともいいかと思います。

またフロアの皆さんやZoom参加の皆さんからの質問もあるかと思いますので、お受けしたいいと思います。またZoomで御参加の方はチャットお知らせ頂ければこちらから読む形でも結構です。

参加者２（（聴衆*Zoom）院生・連帯社会インスティテュート）

有難うございます。連帯社会インスティテュートに属しております。貴重なお話有難うございました。仕事柄、人材育成や広報活動の講師をしておりますが、ライティングは全体のプロセスの中でも５分の１の作業かと思っております。つまり情報のインプットとアウトプットが出来ていないという問題意識から、まずは情報の収集と整理について割とこだわった研修を普段行っております。これは先程の「剽窃」につながっている作業と思っておりますが、アカデミック・ライティングを考える際に「書く」ということに比重が置かれたお話が多かったと思います。そこで情報の収集や整理の仕方や整理について、学習の方法といった点についてどのようにお考えかということをお聞きしたいです。

金藤先生のお話に出た「絵を描く」という作業は「プロットを描く」ということだと思いますし、プロットを描いた上で原稿を書くというのが大事と考えています。その原稿書く前段階の話でどんなことを考えるべきなのかということを一回聞いてみたいと思いました。以上になります。

渕元

有難うございます。論文を書く前の段階の話、情報収集のついてのお話でした。金藤先生いかがでしょうか。

金藤

文章を書く前にどういうふうな情報収集をするかっというお話でしょうか。

それは結局、文章化するっていうこと、何を書くかっていうことはもうとりあえず決まっているのですから、その研究のテーマに沿った形でその先行研究をちゃんと拾い上げていくっていうことぐらいですよね。

それと別の観点から言うと、その先行研究を集めていく際に、あまり楽をしてほしくないっていう気持ちがあって、早くその論文を完成させようとして文章化させようという段階になると、何かピンポイントで自分が言いたいことに合致したものだけを拾ってくるっていうような傾向があります。これはごめんなさい、院生の方だけじゃなくて、学部生にもすごく多いです。

先程渡邊先生とも話をしたんですが、いわゆる「剽窃」という形で、学部生に論文を書かせると、まるまる1ページを「「　」をつけて引用しました」というようなことを言ってくる学生がいるので、「このようなことをしてはダメ…」と注意をするんです。こういうことになってしまうので、自分の考えていることに近い文献だけではなくて、遠い文献（関連する文献）もあると思うので、そういうような文献をちゃんととりあえず集めるだけ集めて、ちゃんと読み込むっていうことが非常に大切だと思うんです。

私自身が院生に伝えていることとして、さっき PowerPoint で絵を描くという話もしましたけれども、文献を読み込んだ時に表現がちょっと難しいんですが、地層とかミルフィーユみたいにちゃんと年代毎に積み上げていって、最終的にそれをもとにあなた自身が何を言いたいのかっていうような形で、そのようなまとめをし続けること、そしてそれは実際に結局は1本のパラグラフになるのかもしれないし、1ページ、2ページの論文の形になるので、そういった形になるようにちゃんとその論文とか、著書を集めつつ、しっかりと綺麗にミルフィーユのような形にまとめる。またそれらはあなた自身がちゃんとまとめたものなのだから、一つの文章として一個一個、パズルの中のピースのような形にしていけばいいんじゃないかと思います。

佐渡島

論文を書く前の段階の話、私も非常に大事だと思います。特に修士は2年で卒業する、論文を書き上げる間に就職活動があったりする、と本当に慌ただしいんですよね。

先程来、名和田先生が私にご質問下さった価値観のことが私ずっと気になっていて、それが繋がってくると思うんですけれども、研究の「問い」を立てるところまですごく時間

がかかってしまう修士の方が多いですね。私も大学院でゼミをやってるんですけれども、博士の方が期間は長いですよね。なのに修士は２年しかいなくて、授業もたくさんあって、論文を書いて、就職活動もしなきゃならないで、その最初に「問い」を立てるところまでがすごく時間がかかっちゃう。それが修士の人達の苦しみの一つなんだなといつも見てて思うんですね。

その上で「問い」の立て方、特に公共政策大学院だったら学生の皆さんは現場で経験をしている、その価値観と言いますか、こういうふうになったらいいのにとか、この問題が解決されればもっと良い世の中になるのにとか、あの人たちの困ってることはこういう方向で解決できるんじゃないか、という非常に豊かな体験・問題意識を持っていらっしゃる。それを研究を通して、「何、何、何、何？」という問いのリサーチクエスチョンの形に持って行くまでがすごく重要な、これは今日ライティングが主題で、あまりお話できなかったのですけれども、これこそが学問をやる上ですごく大事なところですよね。

その上で研究にはふさわしいものとそうでないものがあるとか、その問いによって誰が幸せになれるのか、自己満足ではなくて世の中が良くなって誰かが幸せにならなければいけない。そのためにはどうしたらいいのかってことを指導するのが非常に重要なことだと思うんです。

その上で学術的って言うと価値観や習慣的なものを一切入れてはいけない、全て客観的にしなければいけないだと思い込んでいる学生さん達多いと思うんですけれども、そうじゃないと私いつも言うんですね

あなたがやってきた固有の経験ないし思い、そういうものを反映できる。「問い」にも反映できるし、研究方法にも反映できるし、最後のインプリケーションを言う時にも思う存分それは書いていいんだということを言いたいですね。そういうところで熱い指導ができる大学院だといいなといつも私思ってます。そこはとっても難しくて私も発展途上なんですけれども何かいい考えをお持ちの先生がいらしたら是非教えて頂きたいと思うくらいです。

測元

有難うございました。アカデミック・ライティングといったところを超えて色々な話題になるすごく広がりがあるテーマなんだなあというふうに思いながら伺っていました。

今のお話にありました「問い」が出来れば、研究は９割できたようなものというふうに皆さん仰いますけれども、伊藤さん、田中さん、西谷内先生、博士論文をお書きになるときにどんな苦労があったとか、そういうことがもしあれば、今の鹿野さんのお話にも関連してお話頂ければと思いますが。

西谷内

「問い」をたてるのが一番難しいし、私先ほど1年間かけて修士課程でライティングを学んだと言いましたけれども、やはりそれはもう本当にど真ん中のものでした。いかに学術的な問いを立てるのかっていうのはライティング教育のど真ん中にあるんじゃないかなと思います。実際私がどうしたのかっていうのは、ちょっと余りに古い話で忘れてしまいましたので、最近の方から如何でしょうか。

伊藤

最近の方でもあまり覚えていないですけれども…。

博士論文は文字数が多くなることから全体が長くなりますし、一方で先程も申し上げました通り、学位請求論文である博士論文を大学院に提出するに当たっては、査読論文要件などもあって一定の要件を満たしたそれなりの論文を博士論文の1章分程度の文字数で定期的に投稿していかなければならないといったことがあります。

博士論文の全体の構想と、査読論文として投稿する博士論文の１章分程度の内容の調整が自分の中では一番難しくて、博士論文の全体設計図のようなものを一応描いてその中で「仮問」のようなものを置きながら、その各章に対応する査読論文を書いていくんですが、この査読のコメントの中で「お前の考えは甘いぞ。」みたいな指摘を受けます。指摘を受けた点を修正し査読論文を執筆しながら、更に博士論文の「仮問」も新しい問いに修正し、もう一回論文を書き始めます。査読論文として完成しても、博士論文の全体の構成の中では収まり切れずに、博士論文の「仮問」に基づいて執筆した査読論文にも関わらす博士論文には使わずに捨てていく、そして博士論文の「仮問」もまた修正していくといった作業を繰り返し行ってきたような感じがします。ですから、スパッと最初から「問い」が立てられ、直線定規で引いたように博士論文を執筆するようなことは出来ては行かなかったなという感じが致します。以上です。

田中

有難うございます。私は去年「問い」が決まるまでに１年かかりました。理由ははっきりしています。今コロナで不登校の子供がすごい数に増えてしまったので、文部科学省も、今、施策を頑張っているんですね。つまり最初に立てた「問い」を施策が追い越してしまって、その結果が先に出てしまったなど、もう１回一から戻ったということがありました。

「問い」の立て方、それからその「問い」はどの研究分野のどこに位置するのかということを、常に近い視点と遠くの視点を持ちながら、独りよがりにならないよう、「問い」を立てる時に私個人は気にかけています。

それから今佐渡島先生が、すごくいいことを仰っていたんですが、やはり社会人大学院生は現場の問題意識のもとに研究を進める方が多いと思うんですが、問題意識が強ければ強いほど、パッションが強ければ強いほど客観性が欠けていくというか、「現場ではこ

うなんですっ。」というところをどうしても解き明かしたくなってしまい、気を付けつつも客観性に欠けがちになってしまうのです。

その点に気をつけているんですが、「あなたの固有の経験は大事にしていいんだ。」という点が、ものすごく勇気づけられて。そこを独りよがりにならずに説いていく。また新たなライティングの技術が要るな、と思いながらも「その現場で感じているもの」を大事に研究に取り込んでいく、それが社会人の方、皆さん同じ気持ちだと思うのですが、すごくほっとしたところです。有難うございました

測元

有難うございます。延長してもいいですよっていうことですので、先生方がからも如何でしょうか。田中さんお願いします。

田中

これから大学院を考える方もいらっしゃっているようなのでお聞きします。院生にアンケートをとって下さって西谷内先生がまとめてくださいました今日のテーマのアカデミック・ライティング、これが入学後、私達の教育プログラムにカリキュラムとして入っていくのか、お答えになれる範囲で良いのですが、私はぜひ出来たらな、学びたいな、と思っているのですが、そのあたりは先生方の検討対象となられているのでしょうか。

測元

研究科長の名和田先生を中心に構成を検討していただいてますけれど、その実動的なというか、アンケート調査を踏まえてどういうところが足りないかなとか、そういったことを少し西谷内先生にどういう講座にした方がいいかなとか、そういう目論見みたいなものがありましたら教えていただければと思います。

西谷内

そうですね、私は少しずつライティングを教えることをさせていただいてまして、やっぱり結局私が学んだことしか教えられないので、そうやっているんですけども。

先ほど図を描くと言いましたけども、私はマインドマップをよく使ってまして、クレーム・リーズン・エビデンスっていうふうに、どのエビデンスを持ってして自分のクレームを支えていくのかっていうのを整理整頓して、そしてそれをただ紙に移せばいいというようなことをやっています。

もし私が教えることがあれば、そういうふうに教えていくことになるだろうと思います。そういう話でしたかね。

金藤

皆さんが思っているように、例えば銭湯にあるような富士山を描くとかそういう意味では全然なくて、さっき仰っていたように

マインドマップ使ってもいいし、さっき言った三角、四角、丸等、本当単純で簡単なものでもいい。とにかくその論文を構成する要素だけを全部抜き出して、それがどういう繋がりがあるかっていうことを綺麗に書くか、本当にバクっと書くかっていうような絵があるだけでも全然違いますっていうふうな話を先ほどさせてもらいました。

渕元

ありがとうございます。佐渡島先生にもぜひそういった新しい科目を設置するような場合のポイントですとか何かご指導いただけることがあればお伺いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

佐渡島

ポイントですか。どうしたらいいでしょうね。アメリカの大学院を経験して、すごいなと思った点を一つだけ言います。これは日本でできるかどうかは分からないんですけど。

研究方法が体系的に教えられていたんですね。これが日本の大学院で多分、すごく足りないところの一つかなと思っているんですけれども。

必修の授業だったんですけれども、全部風呂敷を広げると研究方法にはどんなものがあるかっていうところから説いてくれて、例えば八つぐらいの研究方法が―インタビューとか観察とかケーススタディとか統計学とかいろいろある中で、「これ系の研究をする人はこれと、これと、これ」、「これ系の研究をする人はこっちと、こっちと、こっち」っていうふうにその授業が並べられていたんです。系統によって。

で、自分の研究はどんな研究にするのかなっていうことを発想するときに、ああ私はこの系列だな。じゃあこの研究方法とこの研究方法をよく知っていれば、多分博論が書けるんだなっていうふうになっていて。

その一つひとつの研究方法の専門家を呼んでの授業があったんですね。インタビューの専門家も。日本では統計の専門家はあって、ほとんどの大学院ではそれは必修とかで教えられていると思うんですけど、アメリカでは、インタビューの専門家、それから観察をするときの専門家、あるいは映像分析の専門家、テキスト分析の専門家っていうふうになってたんですね。

そういう授業を取りに行くと、そこには自分と同じ領域じゃない人たちもいて、研究方法で繋がっているような仲間・友達もできたんですね。

これを1年2年経験すると、もうどんな論文もよく読めるようになっちゃうっていうんですか。自分が採らなかった研究方法を使っている論文でも、全体で見るとどういう位置づけなのかがわかるっていうところまで理解が進んだんですね。これはとてもすごいことだと思いました。研究方法を知っていれば自立できますよね。研究者として。

アメリカも博士がすごく余っている社会なので、博士を持ってる人が事務職員にいたり、普通の企業の中にもたくさんいたりするわけです。そういう中で世の中を分析する方法を知ってるっていうことはすごい強いことだと思うんですね。アカデミアが社会に浸透してるというんでしょうか。そういうところで日本の方もこれから進んでいけるとい

いなっていうふうに思います。

渕元

ありがとうございます。研究方法についての学びということで、法政大学では社会調査法の授業であるとか、そういったものが準備されていますけれど、それとの新しい科目との連携といったところも意識しながら進めていかなければいけないなというふうに今、お伺いしました。

佐渡島

アメリカかぶれのように聞こえたかもしれませんけど、アメリカが何もかもいいというのではありません。大衆化の部分でいろんな問題もあるとは思ってます。詳しいことは今日お話する機会はないんですけど、全部アメリカに習うと良いというふうに思ってるだけでありません。日本で独自のやり方を作っていけばいいと思っています。

渕元

ありがとうございます。承知いたしました。本当にそれぞれの、法政大学独自のやり方であったりというのを進めていけるようにしていきたいと心がけてまいります。

そうしましたら他にいかがでしょうか。最後にこれは言ってみたいという感想とか、もしフロアの方やZoomの方から無いようでしたら、ちょっとまとまりがつかない状態でまたマイクを渡してしまうようで非常に恐縮でございますが、コメンテーターの佐渡島先生にパネルを通じたお言葉を最後にいただければと存じます。よろしいでしょうか。

佐渡島

すみません何回も。西谷内先生はプロセスに着目したご発表をしてくださいました。40人学級、私が子供の頃は50人以上座ってました生徒が。そういう中でプロセスに着目した指導ってどうしても欠如してしまうと思うんですね。考えてる途中、書いてる途中でそれを公表して人に指導してもらうということが日本の学生は苦手だと思うんです。そこに着目してるところがすごくいいと思いました。

ご自分の図で、一番複雑でとおっしゃっていた「試案」なんですけど、その中にあった問いの設定とクリティカルリーディングっていうところ、これ非常に大切な要素なんですけど、あまり深く追求している授業が日本ではないかもしれないなと思ったので、そこにこれからご研究されて発展させていったら素晴らしいんじゃないかなと思いました。簡単ですみません。

伊藤先生、社会調査士でいらっしゃる伊藤さんのご発表なんですけども私、非常に感銘を受けたところがありました。それは『公共政策志林』を通信教育だと認識して、これを一つの教育的観点から利用したらいいというご提案がありました。本当にそうだなと思いました。これは学内のプルーフリーディングがあるわけなので、紀要ですよね。これが本当に研究者として自立していく道の一歩になるので、ここを上手に利用していくっていうことは本当に良い提案だなと思いました。私のいる大学院でも、もう少し教育的にで

きないものかなと思ったところです。ありがとうございました。

それから田中さんのご発表は、確かに視覚認知っていうものができてくる過程、それが大学院にいる意味の一つなのかなと思いました。この意識付けの仕掛けが必要だっていうことが本当にそうだなと思いました。大学院で教えているものが毎日それを目指してるっていうことなんだろうなと思いました。そして知的作業のグレードアップ、本当にそうなんだろうと思います。

入学する前と、それから論文を書き上げて大学院を出た後に本人が知的にグレードアップしたということがきっと論文を書いた経験から、自覚できると思うんですね。それを私達は目指してるんだなということを改めて感じて勇気づけられました。

それぞれのご発表の中の中心的なところを追求していくと、日本の大学院そしてこの公共政策大学院がすごく発展するんじゃないかなと思いました。ありがとうございました。

素晴らしい卒業生と教員群のこの大学院が、きっとこれからますます発展していくものという思いを強くした半日でした。ありがとうございました。

渕元

佐渡島先生、貴重なコメントありがとうございました。最後に私ども、すごく勇気づけられました。ありがとうございます。それでは閉会の時間が過ぎてしまいましたが、こちらで本日のシンポジウムを終了とさせていただきます。最後に閉会の挨拶といたしまして、公共研究科のサステイナビリティ学専攻の武貞稔彦先生から閉会のご挨拶をいただきたいと思います。武貞先生よろしくお願いいたします。

閉会のご挨拶

法政大学大学院公共政策研究科教授
武貞稔彦

皆さんこんばんは。いまご紹介に預かりました、公共政策研究科サステイナビリティ学専攻の武貞と申します。学部の方では、人間環境学部の学部長を務めております。もう皆さん帰る用意をしたいぞという感じかと思いますけど、ちょっとだけ今日のお礼を申し上げたいと思います。

まず、最初のお礼は、土曜日の午後、麗らかな日にもかかわらず、長時間にわたりご参加いただきました、オンラインの方も含めて、長い時間お付き合いいただき、どうもありがとうございました。それから、本日ご登壇をいただきました、佐渡島先生はじめ、皆さん、どうもありがとうございました。貴重なお話しを伺えたと思っております。ありがとうございます。

いきなり何を言うのかと思われるかと思うのですが、実は、このシンポジウムの前、告別式に参列しておりました。私が昔、会社で色んなものを教わった上司が、お亡くなりになったのでご挨拶に行ってきました。社会人としての振る舞い方だけではなくて、文章の書き方、本当に色んなものを指導いただいた方で、今日文章の書き方についてのシンポジウムで最後に締めの挨拶をしろというのも、なんらかのご縁があるのかなあと思います。ただその一方で、一生懸命教わった文章というのが、国会の答弁の書き方だったので、あまり皆さんからすると、いい文章を書いていたわけじゃないだろうと、思われるかもしれません。国会での答弁というのが、民主主義の基礎であるのと同じ様に、知の生産という観点でみると研究の世界では、論文を書くという行為、アウトプットをするという行為は、非常に基本的なものにあたると思います。

社会人の院生の方たちの論文を拝見していると、本当に現場での想いが溢れるような論文を沢山拝見します。一方で、劇作家の井上ひさしが言っているように、文章の極意というのは、「自分にしか分からないことを、他人にも分かるように書くことだ」という言葉があり、皆さんの想いを、どうやって他人に伝えることができるのか、それを考えながら、書いていただく作業というのがきっと必要だろうと思います。そういう作業のなかで、

単に書いたアウトプットのプロダクトの良し悪しをみるだけではなくて、「本当に自分は分かっているのか」ということを確認する作業に、おそらく繋がるんだろうなあと、いうふうに思っています。

本日、色々とお話を伺ったなかで、私が一番思うことは、研究というのは、とかく孤独な作業と思われがちですけれども、アカデミック・ライティングの教育、そういったプロセスを経ることで、そこには大事な共同作業が実は必要なのだなあ、ということを、本日は強く感じました。

公共政策研究科は、それまでの、それぞれの前身の組織の積み上げを無視すれば、ちょうど十年、人間でいうと十歳というのは、小学校の高学年に入ってきて、ようやく少し難しい文章を読んだり書いたりすることができるようになった年です。これから、さらに次の十年、公共政策研究科が、大人に成っていく過程で、皆さんとの協働作業を通じて、より意味のある研究成果を発信していけるように努めていきたいと思いますので、引き続き皆さんのご支援ご指導を、ぜひよろしくお願いいたします。

それでは、本日のシンポジウムはこれでお終りといたします。

どうもありがとうございました。

測元

最後にアンケートのお願いを申し上げます。片づけされながら聞いていただければと思います。ご参加の皆様には、大学院よりアンケートのURLをお送りさせていただきますので、本日のシンポジウムに際しましてご意見をいただければ幸いでございます。どうぞよろしくお願いいたします。それでは長い時間ありがとうございました。失礼いたします。

以上

参考資料

・学術的文章作成（アカデミック・ライティング）
に関するアンケート集計結果 63

・佐渡島紗織先生 配布資料. 80

・西谷内博美兼任講師 配布資料. 107

・伊藤哲也氏 配布資料. 116

・田中典子氏 配布資料. 122

学術的文章作成（アカデミック・ライティング）に関するアンケート集計結果

西谷内博美（公共政策研究科兼任講師）

1. 解題

アンケートの回答そして作成や回収にご協力いただきました院生、卒業生、そして職員の皆様に改めてお礼を申し上げます。貴重なデータを収集することができました。回答数は全部で 49 件（修士課程在籍院生 31 件、博士課程在籍院生 18 件）です。データの分析結果については改めて発表する機会を設けますが、ここでは集計結果の印象を述べます。集計結果のうち、執筆経験、学習経験、そして執筆能力の自己評価からみるかぎり、当研究科在籍院生の学術論文執筆能力は上級から初級まで広く分散していることが読み取れました。教育的観点からみて重要なことは、執筆能力が分散していることよりも、初級者の存在が少なからず示唆されたことです。つまり、大学院とはいえ、初歩的なスタディスキルにおいても教育ニーズのあることが読み取れる結果となりました。

まず、学術論文の執筆経験については、経験値の高いものから低いものまで大きな差が見られました。一方では単著を出版したことのある人が 3 名いました（6%。修士 1 名、博士 2 名）。また、査読つきの論文を発表したことがある人が 10 名いました（20%。修士 1 名、博士 9 名）。しかし他方では、卒業論文を含め、学術論文を提出あるいは発表したことのない人が 10 名いました（20%。すべて修士課程）。このように、一方ではそれなりの研究業績をもつ人がおり、他方では学部生と同等の執筆経験しかもたない人もいることがわかりました。

次に、ライティング教育を受けた経験は、総じて低いことが分かりました。まず、学部時代に卒業論文を提出していない人が 21 名いました。つまり全体の 4 割以上が、学部時代にライティング指導を受ける機会の乏しかったことがうかがえます。さらに、アカデミック・ライティングを体系的に学んだことがある人は 1 名だけでした。昨今では日本の大学でもライティング教育が盛んになりつつありますが、その波はまだ当研究科には届いていないようです（アンケートにご協力いただいた方々の限りでは）。

それでは、現状として学術論文の書き方がどのように学ばれているのかというと、指導教員が大きな役割を果たしていることが分かりました。研究科で学術論文を書くにあたり役に立った学習リソースとして最も多かったのが「指導教員からの個別的な指導・助言」で、次に「ゼミの授業」でした。そしてその 2 点は、それに続く選択肢、すなわち「先輩や友人からの助言」、あるいは「市販のテキスト」や「論文などをモデル」とした独学に比して圧倒的に大きく役に立っていると回答されました。

そのような執筆経験と学習経験を踏まえたうえで、在籍院生らがどれほどの執筆能力を備えているのか、という部分が一番知りたいところであります。本来はテストを実施して実際のスキルを測定できればよいのですが、当アンケートではその代替として自己評価を実施していただきました。質問は全部で 15 問、基礎・作法・研究という 3 つのカテゴリーに分かれています。「基礎」カテゴリーは基礎的なスタディスキルを問うもの、「作法」カテゴリーは学術論文の作法についての知識を問うもの、「研究」カテゴリーはやや高度な研究のスキルを問うものです。それらを「自信がある」「少し自信がある／少し自

信がない」「自信がない」という 3 つの段階で回答していただきました。具体的な設問文と回答結果のヒストグラムは本文をご参照ください。

ここでも、執筆諸能力についての自己評価は「自信がある」から「自信がない」まで、当初の予想よりも広く分散していました。アンケートの作成時点では、研究カテゴリーでは「自信がない」もしくは中間の回答を、基礎カテゴリーでは「自信がある」との回答を予想していました。ところが実際は、研究カテゴリーにおいて「自信がある」との、反対に基礎カテゴリーにおいて「自信がない」との回答が予想より多く存在しました。

より詳しくは、次のような操作をいたしました。「自信がある」を 2 点、中間を 1 点、「自信がない」を 0 点として集計し、カテゴリーごとに 10 点換算しました。そして「研究」カテゴリーが 8 点以上の人を研究者としての論文執筆能力をもつ上級者と、反対に「基礎」カテゴリーが 5 点以下の人を学部生と同等のスタディスキルしかもたない初級者と想定しました。結果、上級者と想定される人が 14 名（29%。修士 6 名、博士 8 名）、初級者と想定される人が 19 名いました（39%。修士 14 名、博士 5 名）。この結果からみると、在籍院生の論文執筆能力は次のように解釈されます。一方では独立した研究者としての研究スキルを持つ上級者が 3 割程度いるにもかかわらず、他方では学部生と同等のスタディスキルしか持たない初級者も 4 割程度存在します。（ただし、初級者と上級者の両方に該当する人、すなわち基礎点が低く研究点の高い人が 1 名含まれます。博士課程）

なお、「作法」カテゴリーの集計結果は、先に見た学習経験値の低さと符合する結果となりました。まず集計結果は、10 点満点が 3 名（6%。修士 1 名、博士 2 名）、7〜8 点が 14 名（29%。修士 4 名、博士 10 名）、5 点以下が 32 名（65%。修士 26 名、博士 6 名）でした。次に作法カテゴリーの特徴ですが、先述したようにここでの質問項目は技術の問題ではなく知識を問うものであり、すなわち学んだことがあるかないかを問うに相当する質問項目です。よって作法カテゴリーの集計結果からは、回答者の 6 割以上が、学術論文の作法について本格的に学ぶ機会をこれまで持たなかったと推測できます。

以上当アンケートの集計結果からは次のようなことが見えてきました。すでに場数を踏み、独学あるいは指導教員の手引きにより、高度な執筆能力を備えている在籍院生がいる一方で、これからその一歩を踏み出そうとする在籍院生も少なからず存在するということです。たとえば、引用の際に自分の意見と他者の意見を区別し、直接引用と間接引用を使いこなすことに自信のない人が 10 名（20%、修士 8 名、博士 2 名）、やや自信のない/やや自信のある人が 24 名（49%。修士 17 名、博士 7 名）います。このような「基礎」的なスタディスキルに対して多少なりとも不安を覚える在籍院生が一定程度存在していることが、当アンケートでは確認されました。こうした結果を踏まえると、当研究科においては、アカデミック・ライティングを体系的に扱う科目を設け、スタディスキルの底上げと、そして論文作法の学習および基本的な研究スキル（論証の技法など）の習得を図ることは有効だと考えられます。そうすることで、指導教員はそれぞれの専門分野からの助言や指南に専念することが可能となり、結果として研究科全体の論文指導・研究指導がより効率的かつ効果的になることが期待されます。

2. アンケートの目的と方法

2.1. 目的と概要

本アンケートは、公共政策研究科及び連帯社会インスティテュートの在籍院生を対象として、学術的文章作成についての教育的背景や現状の課題等を明らかにし、今後の教育環境の改善に資することを目的として実施しました。質問の構成は以下の通りです。

1) 回答者について
2) ライティングの経験
3) ライティング学習の経験
4) 学術論文執筆に関する能力の自己評価
5) 学術論文執筆に関する学習方法
6) 今後の研究科のライティング教育

2.2. 調査期間

2022 年 10 月 10 日から 10 月 31 日まで

2.3. 調査対象

公共政策研究科及び連帯社会インスティテュートの在籍院生（休学者を含む）144 名

2.4. 調査方法

法政ポータルサイト（Hoppii）の「お知らせ配信」を介してアンケートを依頼。
google フォームから回答を回収。

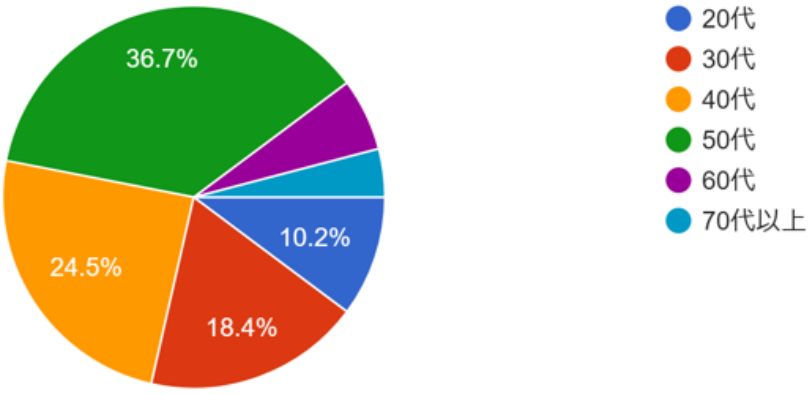
2.5. 回収状況

回答数：49 件　（回収率 34%）

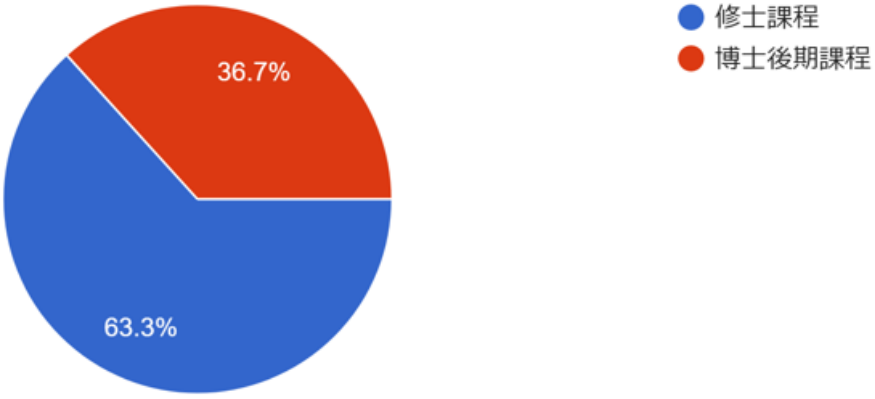
3．アンケートの集計結果

3.1.　回答者について（すべて 49 件の回答）

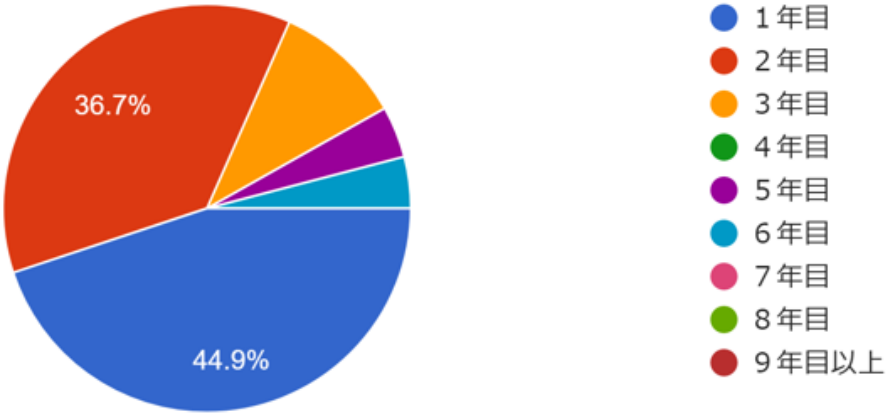
1.　あなたの年齢は？



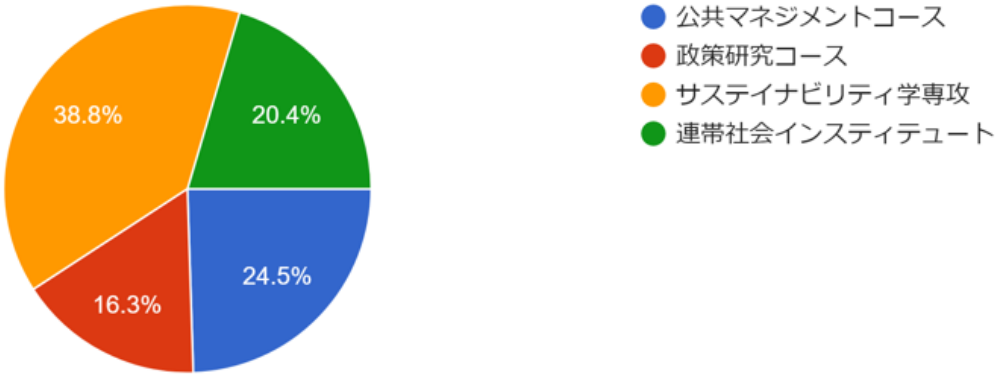
2.　あなたの在籍課程は？



3.　その課程での在籍年数をおしえてください（休学期間を含む）

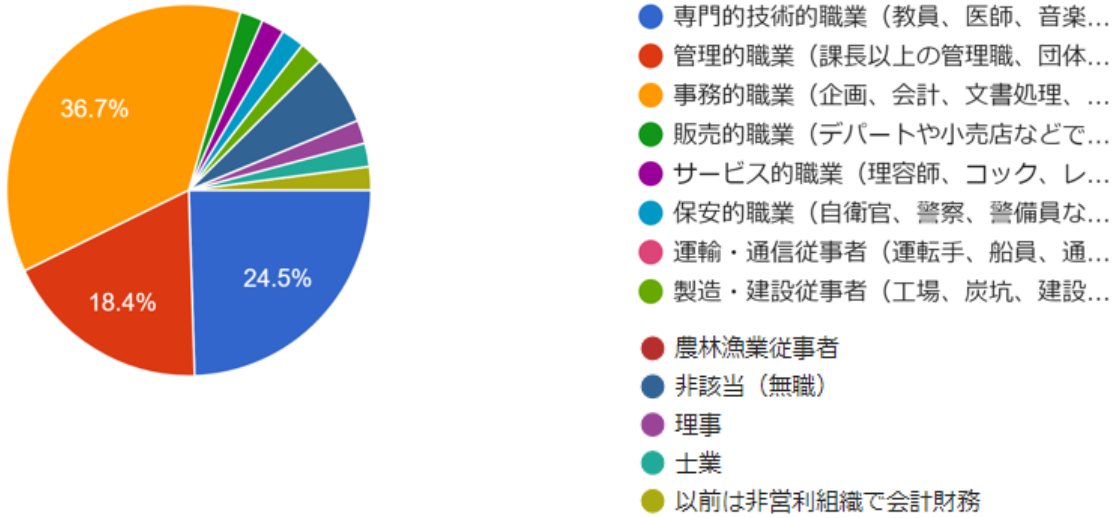


4. 所属のコース・専攻

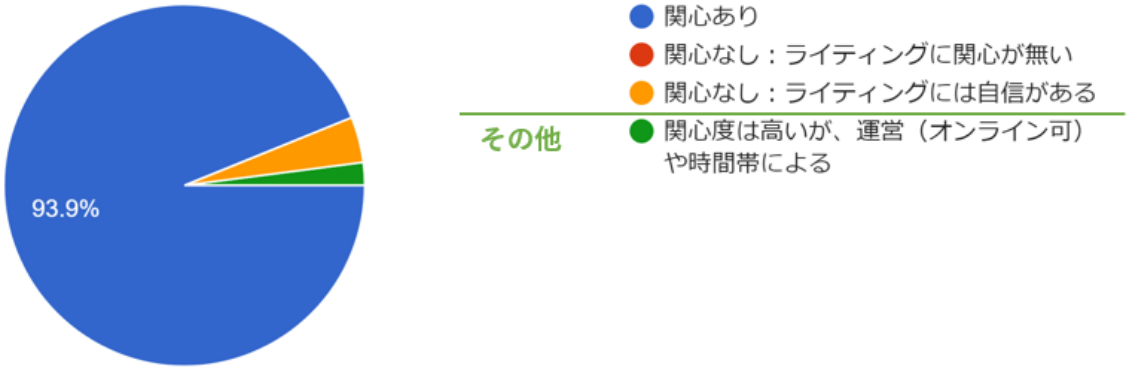


5. お仕事を雇用されているか自営かなどの従業タイプで次のように分けるとすればこの中のどれに当たりますか？（盛山和夫, 2004,『社会調査法入門』有斐閣, 113.から引用し一部修正）

6. 勤め先で具体的にどんなお仕事をしていますか？（盛山和夫, 2004,『社会調査法入門』有斐閣, 113.から引用し一部修正）

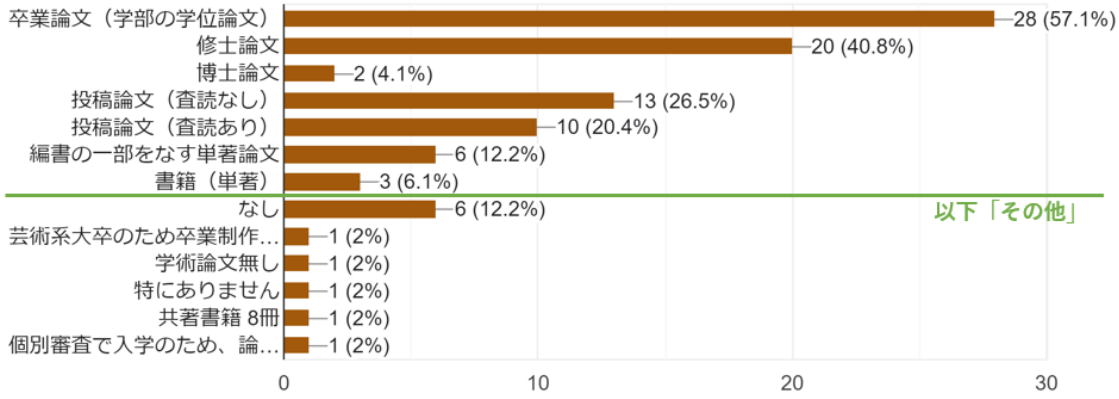


7. アカデミック・ライティングについて教育をうけることにどれほど関心がありますか？

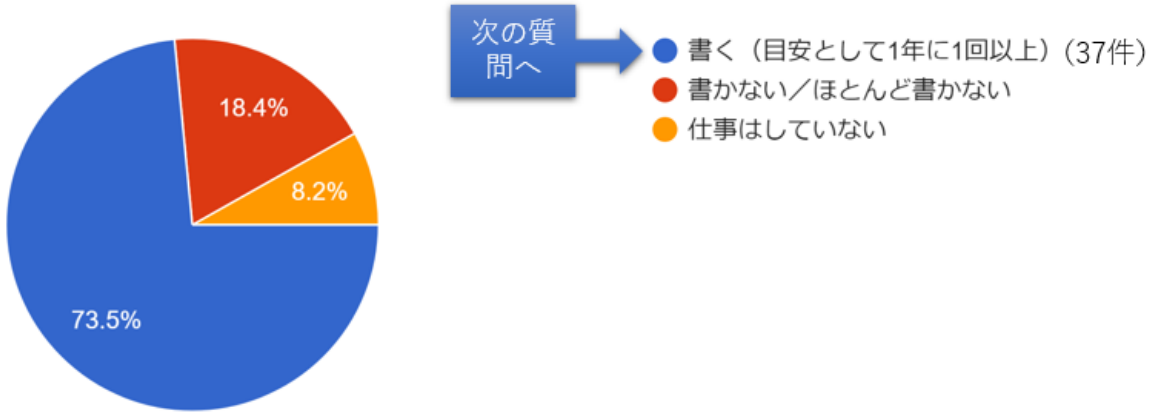


3.2. ライティングの経験

8. これまで提出した／発表したことのある学術論文の種類をすべて選択してください。（49 件の回答）



9. あなたはお勤め先で文章 （目安として A4×1 枚以上）を書きますか？（49 件の回答）



3.2.1　勤め先でのライティング（すべて 36 件の回答）

質問 9 で「勤め先で文章を書く」と回答した 36 件の回答

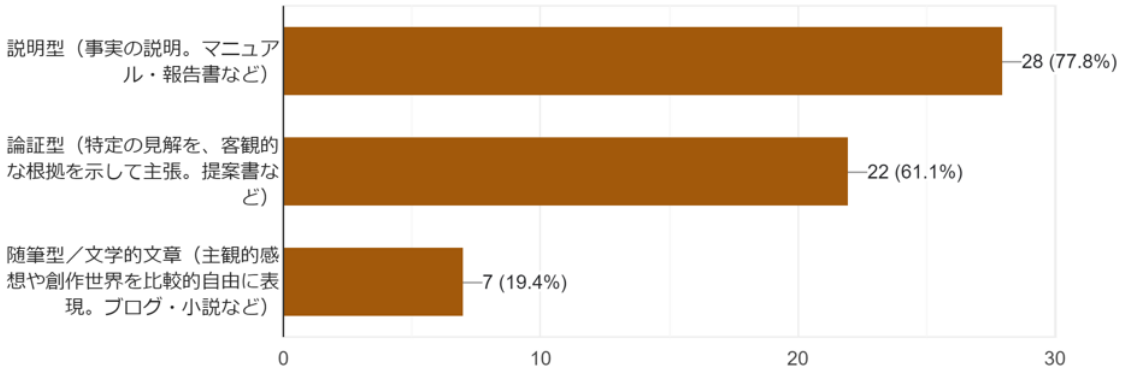
10. お勤め先で書く文章のタイプとタイトル例を教えてください。例えば「企画書：テレワークの導入」「報告書：IT 研修報告」「マニュアル：乾燥機の取扱説明書」「エッセイ：晴れた日の朝食」など。一つの文章タイプにつき 1 つのタイトル例をお示しください。文章タイプは可能な限り列挙してください。

タイプ	タイトル例
企画書	• アウトドア事業、計画書:自治体の実施計画 • リスキリングのためのキャリア支援者研修のご提案、キャリアデザイン研修実施の背景と概要 • 担当分野に関する方針、具体策について等 • 広報戦略、人材育成 • 人事部の今後の活動について • ２０２２年度の福祉型労働運動の取り組み ○　○報告会企画書 • 自社メディア向けの連載企画の作成 • 寄付講座など各種教育事業 • キャンペーンやコンテンツ • 女性防災リーダー育成研修
報告書	• 越境学習ワークショップの効果 • 欧州のビジネスと人権セミナー視聴 • 研修報告書 • 出張報告等 • 業務報告書 • 連合平和行動への参加報告 ○　○会実施報告書 • 各国情勢 • 製品導入後ビネスレビューレポート • 東日本大震災１０年連続学習会報告 • 視察報告書 • 経営や担当部門への報告書 • クレーム報告書 • ケース報告書
調査報告書	• ～～に関する調査報告書 • 自転車政策の動向と課題
発達知能検査の結果報告書	• wisc 検査　結果報告　ーー保護者へ
地域分析レポート	• 長江デルタ地区に組み込まれ発展する安徽（あんき）省
機関紙・冊子	• 労働組合の社会貢献に関する取材レポート
マニュアル	• 事業評価の仕方 • 勤務管理システム説明書 • ロボットの操作説明 • プロジェクトの進め方やコンテンツ制作の手引き
議事録	• ○○会議議事録研究
エッセイ	• 経済紙オンライン • XXX プロジェクトでの誤算、課題と学び
会報誌のエッセイ	• 齊民日誌
記事	• もっと知りたいスマートワーク用語　男女雇用均等法、職務経歴書が激変！新卒入社・転職ゼロでも「強み」は書ける【あなたの職務経歴書、添削します】、変革型のリーダーシップが女性活躍の鍵を握る • 自社メディア向けのビジネスニュース記事

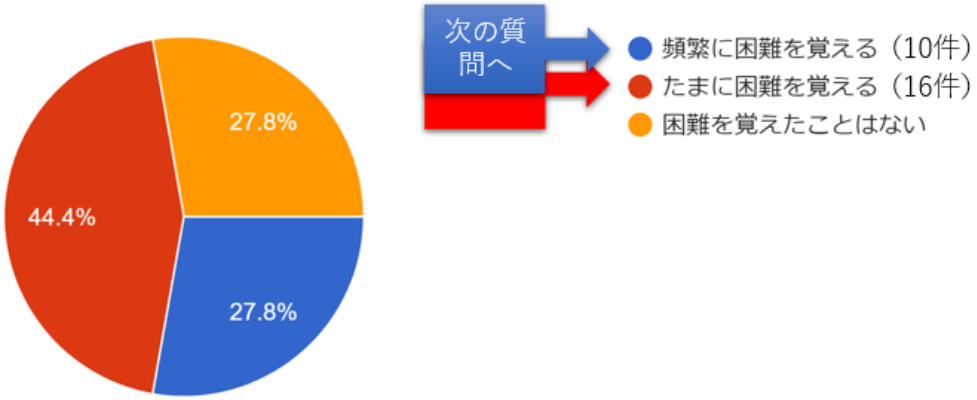
雑誌記事	• なぜ防災にジェンダー視点が必要なのか？（男女共同参画センターの機関紙への寄稿）、ほか過去には好事例集も作成（防災活動、被災者支援）
契約書	• 新規サービス導入 • 業務委任契約書
申請書	• ○○○に関する申請書
助成金申請書類	• (カンボジアにおける)住民参加型ソーシャルビジネス、農村部でのコミュニティバス事業
医療機関等への所見書、意見書	• △病院思春期外来科　◇医師殿　本校 1-4○○雄の学校生活における集団面・学習面での所見について
計画書	• ○○に関する研究報告遺書
市長協議資料	• 古河市 SDGs パートナー制度の創設について
職員研修企画案	• 入庁 3 年目研修
通信教育テキスト	• マネジメント系、スキル系
書籍	• マネジメント系、スキル系
n/a（未記入）	• 技術者養成用　縫製・検査に関するテキスト • 東京都のいわゆる「新築住宅における太陽光パネル設置義務化」などへの主張 • 書籍の校正、編集が業務。 • (カンボジアにおける)玩具花火のバリューチェーン構築と安全な打上花火の実現に向けた案件化調査 • 就業規則、在宅勤務規定、旅費規定 • 3-2○○子　面接経過報告及び教育センター面接依頼への情報提供
映像ナレーション	以下、タイトル例無し
教員研修のレジュメ	
生徒へのお便り	
アジェンダ	
本の評論	
稟議書	
論文	
規定	

※　タイプおよびタイトル例はすべて回答のまま

11. その／それらの文章は、次の分類でいうとどれに当てはまりますか？当てはまるものをすべて選択してください。※選択肢は「説明型」「論証型」「随筆型/文学的文章」



12. 仕事上の書き方と大学での書き方（学術論文）のモードの切り替えに困難を覚えたことがありますか？



3.2.2. ビジネスと学術とのライティングモード切り替えの問題（26 件の回答）

質問 12 で「仕事上の書き方と大学での書き方（学術論文）のモードの切り替えに困難を覚えたことが」あると回答した 26 件の回答

13. 仕事上の書き方と大学での書き方（学術論文）のモードの切り替えの困難を具体的に教えてください。（たとえば、要求されることが一方はこう、他方はこう…）

カテゴリー	回答
言語の違い	• 言葉の使い方の違い • 学術的な文言の転換例:「よって」→「したがって」、「1 番高い値」→「もっとも高い値」など余談となるが、一言記す。 • 仕事で作成する報告書は事実を整理して述べるタイプであるが、語尾が論文調になる場合があり修正する。
読み手の違い	• 読み手が異なる。 • 仕事では、読み手が一定の知識を有している前提で文章を書くが、大学では、誰もが理解できる文章が求められる。 • 仕事上ではその文書を読む対象者が限られているが、大学では対象

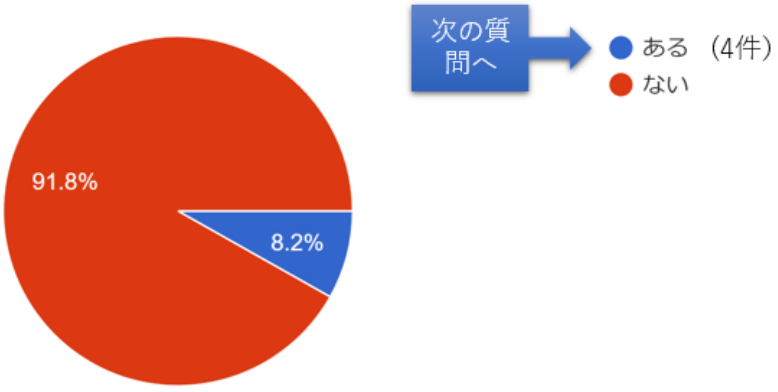
	者が不特定多数であること。 • 仕事上の書き方は、提出する相手によって得たい目的とゴールが異なるため、内容が同じでも強調する箇所が異なってくる。 • 一番大きいのは使用する用語。特に、一般市民に読んでいただく文章については、できるだけ難しい用語を避け、わかりやすい表現にする必要がある。文字数が制約されていることも多く、概念の説明に苦慮することも多い。研究者の方が対象であっても、専門領域が異なると、同じ概念でも強調ポイントや活用方法が異なる場合もあり、前提の説明で労力を割かれることもある。研究者と一般市民の間に立つことの多い実務家は（自身もこのカテゴリーに当てはまる）、学術的な素養の有無やレベルによって求められる表現はさまざまと感じる。 • 会報誌は一般の会員向けなので、大衆的、内観的な親しみのある書き方を心掛けている。大学院でのレポート提出については、学術論文を前提としているため当然だが学術性を問われる。
簡潔　vs.説明的	• 簡潔な文章と論文の差 • 文字数。職場は簡潔、大学はある程度の量が求められる。 • 仕事上の文章→視覚的にわかりやすく端的に。論文の文章→お作法通り、型通りに書く。 • 仕事で記述する文章は、読み手が早い段階で全体の意味を理解できるよう、短い文章で意図を伝えることが求められる。正確性よりと意思伝達が重視される。　一方で、学術的記述は文と文の繋がりを正確に記述し、論拠で主張を支える等、精密な書き方が求められる。そのため、一つの文の長さや気を配る方向性に違いがあり、記述する際は多少意識する必要がある。 • 仕事の報告書は根拠に基づき論点整理にとどまるが、学術論文では仮説検証を求められる。 • 同僚の心理専門職は皆、修士修了の有資格者であるが、これまで回覧してきた報告書の書き方に個人差が大きい。参考にしたい、簡潔・明瞭な文章を書く方の割合はとても少ない。読解困難、長文で句読点の多用、報告したい要点の迷走(自戒も込めて)は、多々見られる。このことからも、修士論文の作成だけでは、文章力はつきにくいのでは、という感想を持っている。
主観の扱い	• 学術論文：主観なし　報告書：最後に業務にどう生かすかなどの感想を入れる • 論文における主観的文章の表現方法
オリジナリティの有無	• 仕事上は前年の内容がベースになることが多いが、大学ではオリジナリティーが要求されることなど。 • 仕事上は、事実に基づいたことを重視してわかりやすく伝えるが、大学院では授業や教科書に対する批判であったりが必要とされる • 仕事上の書き方は、作法や慣習により、書くべきことが決まっている。事実のみを記載する。学術論文は、考察や分析を加え筆者により事実の捉え方が異なる場合がある。 • 記事はファクトベースで事実関係を強調して文章を組み立てていく一方、学術論文は先行研究や理論を使って主張を明らかにするため、手順や流れが異なる
先行研究への応答	• 自分の関心、社会の関心に加え、学術的関心が求められる点（文献研究が不足している） • 仕事の書類は実際の出来事やデータに基づいて書くが、論文は必ず先行研究に基づいて書くこと。
作法が分からない	• 学術論文の作法を学ぶのはこれからである。 • お作法がよくわからない。お作法もいろいろあると聞き、初心者にはわかりにくい。
引用作法の違い	• 論文における引用の書き方 • 引用の仕方についてのルール、参考文献の種類の制限（学術論文か否か、など） • 分野が違うと、引用記載を理由にハラスメントを受ける。しかも、教員はそれを表面的な修正で繕い、本質的に何もしない。

文章	• 基本的な立て付けはほとんど変わらないが、文章作成に難あり

※ 回答を調査者がカテゴリー別にまとめた。

3.3. ライティング学習の経験

14. これまでに体系的にライティングを学んだ事がありますか？（目安として、90 分×5 回以上の科目や講座。「公共政策論文技法」は除く）（49 件の回答）



3.3.1. 体系的なライティング学習の詳細（4 件の回答）

質問 14 で「ライティングを学んだ事が」あると回答した 4 件の回答

15. それはいつ頃ですか？／どこで学びましたか？（たとえば、○○大学の○○科目、○○センターの○○講習会）／その科目や講習の期間を教えてください（たとえば、90 分×10 回、2 単位の科目など）／何を学びましたか？（学術論文の書き方/広くライティング一般）／ライティング学習の経験について補足事項があればご説明ください。

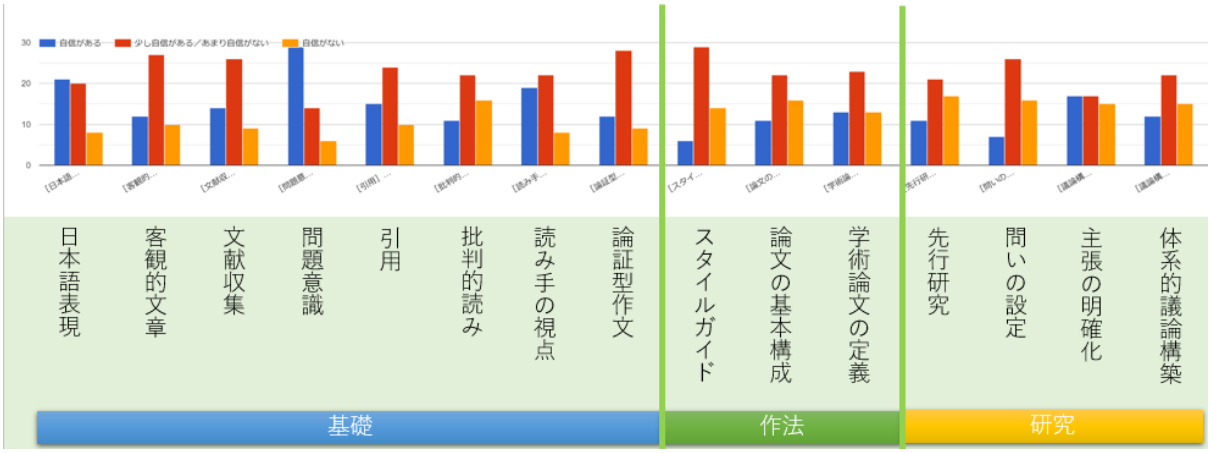
いつ頃	どこで	期間	学習対象	補足事項
2003 年	大学	90 分×24 回	広くライティング一般	
2010 年	勤務先	60 分×10 回	広くライティング一般	普段から書いていないと習慣にならないと思う。
2016 年	政策研究大学院大学 修士課程	2 単位	広くライティング一般	
2022 年	大学院	社会調査法 5	学術論文の書き方	大学院入学までライティング学習経験はありませんでしたが、大学在学中から書く仕事をしてきました。そのため自分なりに体系的に書くための知識・スキルを習得してきた自負はあります。また、文章の書き方についての著作もあり、広報セミナーの講師として指導もしています。

3.4. 学術論文執筆に関する能力の自己評価

■ 自己評価の設問一覧

基礎	日本語表現	16. 日本語の文法や語彙を人並みに使うことができる。――何を言いたいのか分からない、「てにをは」がおかしいと言われたことはあまりない。
	客観的文章	17. 書き手中心ではなく、対象を中心とした客観的な作文ができる。――具体的には、一人称の使用、主観的、あいまいな表現をできるだけ避けて、ある程度断定的に事実を記述する書き方ができる。
	文献収集	18. 文献を収集する方法を知っているし自由に実践できる。――つまり、CiNii や図書館などを使い慣れている。（ここでは外国語文献の検索能力は問わない）
	問題意識	19. 授業や読書の際に、受動的に知識を得るだけではなく、自分なりの疑問や関心が新たにうまれたり、それに引き付けて考えたりすることが多い。
	引用	20. 自分の意見と他者の意見を区別できる。加えて直接引用と間接引用の違いが分かる。
	批判的読み	21. 先行研究を読む際に、感心し納得しながら読むだけではなく、議論の構造を捉えたり、批判的に読んだりすることができるし、そうしている。
	読み手の視点	22. 書いたものが伝わらないのは、読み手の理解力のせいではなく書き手の問題と捉え、読み手の視点から文章を書いたり推敲したりしている。
	論証型作文	23. 理路整然と首尾一貫した文章を書くことができる。（ちなみに、パラグラフ・ライティングができる場合は「自信あり」です）
作法	スタイルガイド	24. 特定のスタイルガイドに則して、適切な引用処理ができる。
	論文の基本構成	25. 学術論文における序論・本論・結論について、それぞれが一般的にどのような役割を持っており、何を書けばよいのか、他者に説明できる程度まで理解している。
	学術論文の定義	26. 学術論文と他の文章の違いがよくわかる。――たとえば、学術論文とは「問いと答えと論証からなる」という意味を明確に説明できる。
研究	先行研究	27. 自分の研究が先行研究にどう位置づけられるのかを、常に概ね、明確に捉え説明することができる。
	問いの設定	28. 自分の問題関心を、比較的容易に、学術的な問いに接続することができる。――オリジナリティが弱いと指摘されたことはほとんどない。
	主張の明確化	29. 少なくとも執筆終盤において、自分の言いたいこと（＝主張、答え）がなんであるのかを 1 ～ 2 文程度で明確に答えられる。――総花的、サマリー的などと指摘されたことはほとんどない。
	体系的な議論構築	30. 議論を分節化・階層化し、客観的な根拠を示しながら、自分の言いたいこと（＝主張、答え）を体系的に論証する方法を知っているし（我流であっても）、そうしている。

■　自己評価の集計結果（49 件の回答）



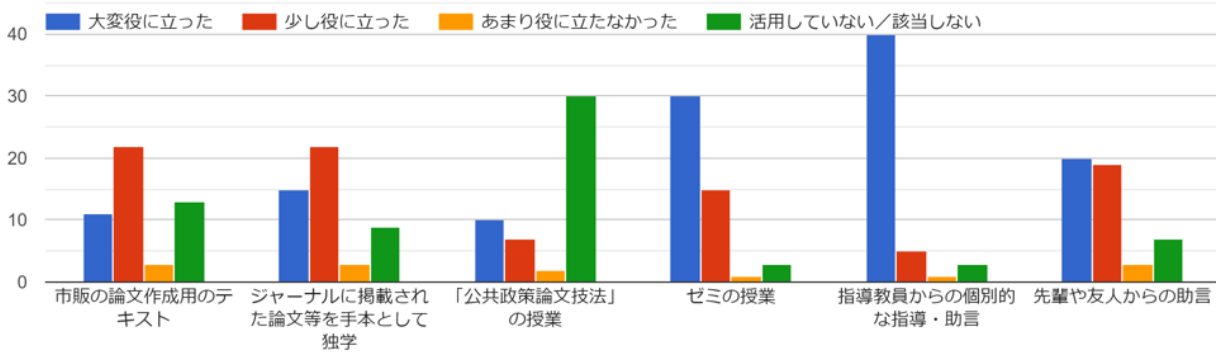
※　青：自信がある、赤：少し自信がある、オレンジ：自信がない

31. その他、学術ライティングについて、あまり自信がない、あるいは困っていることがあればおしえてください。（11 件の回答）

- アンケートを答える中で、文章についてコメントをあまりもらったことがないことに気づいた。良いのか、悪いのか、客観的に評価されたことがない。そういう機会がないと自分の技術が上がらず困ると思った。
- 量的研究と質的研究の論文構成（仮説検証型と仮説創設型の話の持って行き方）
- 実務家の場合、ビジネス書のようになりがちになる。
- 現状はできるだけ信用できる執筆者の論文からお作法を学んでいる状態であまり自信がないです。分野によってお作法が違うところも難しいです。
- 独創性
- 統計データを個票データからどのように構築していくか、具体的な流れと実践を教えて欲しかった。
- 小説やエッセイなどとの違いに最初は戸惑いました。
- 簡潔で言い得ている熟語の知識や、整理された論の展開に弱いと感じている。
- 学術論文に関する用語は、「中心命題」「独立変数•従属変数」「モノグラフィ」「含意」「仮設生成型」など、少し難しいものが多く感じる。　辞書的な理解ではなく、学術論文における意味について、わかりづらいと感じる時がある、
- 言葉の定義は、なにをどこまで行えばよいか分かりにくい。スタイルガイドがさまざまで、なにに倣えばよいか分かりにくい。

3.5. 学術論文執筆に関する学習方法

32. 研究科で学術論文を書くにあたり、次の学習リソースはどれほど役に立ちましたか？（49 件の回答）



※ 選択肢は左から順に、「市販の論文作成用のテキスト」「ジャーナルに掲載された論文等を手本として独学」「『公共政策論文技法』の授業」「ゼミの授業」「指導教員からの個別的な指導・助言」「先輩や友人からの助言」

33. その他、役に立った学習リソースがあれば教えてください。（12 件の回答）

カテゴリー	回答
その他の授業	• 課題レポートを添削の上返却してくれる授業 • ゼミ以外での授業でのワンポイントアドバイス • 社会調査法の講義（1、5、8）
大学が作成した論文作成用のテキスト	• 法政大学が発行している論文・レポートガイドライン的なもの • 立教大学 Master of writing
市販の書籍	• 伊丹敬之, 2001,『創造的論文の書き方』有斐閣 • 川崎剛, 2010,『社会科学系のための「優秀論文」作成術』勁草書房 • ブルーバックスの本など
オンラインリソース	• SNS • YouTube
ジャーナルに掲載された論文	• 書きたい分野の、学会賞を受賞した論文

※ 回答を調査者がカテゴリー別にまとめた。

34. 先の学習リソースにおいて、特にどのような助言や学びが参考になったり、ブレイクスルーにつながったりしましたか？特に役に立ったものだけ、学習リソースの種別ごとに教えてください。（16 件の回答）

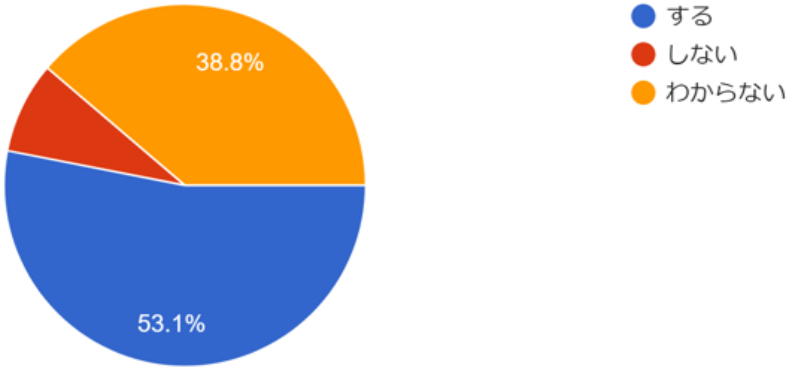
学習リソース		回答
授業	ゼミ	自分の研究の研究枠組みとしての理論はどういったものが適しているかのアドバイスを、また論文の書き方（参考文献のスタイル）などのご教示いただいている。
		特に専門分野の違う先輩後輩や初めて聞く者に研究内容や論文の一部を説明するため、読者を意識する第一歩となった。
		ゼミの授業、先輩・友人（研究関係）からの助言では、異なる研究領域の人からみた自身の研究への関心や指摘が、論述の展開方法の工夫につながったことが多い。
	ゼミ以外の授業でのワンポイン	「基本の書き方はこれです。まずはこれで書いてください。（アレンジはいったんできてからでもいい）」

	ト講座	
	公共政策論文技法	スケジュール感や苦悩をどのように乗り越えたか、研究自体の詳細はどういう手順で行っていたか、紹介いただいた参考文献を活用した。
	修士研究科（他科）の授業	課題レポートについて。毎回のレポートに赤でコメントして下さる先生や、毎週提示論文のクリティカルレビューを課し、書き方を繰り返し教えて頂いた機会は、大変であったが学びとなった。レポートを提出するだけではなく、レスポンスを頂けていた事を今更感謝している。
個別の指導や助言	指導教員	主観的な言葉遣いを止めることや、引用したソースの明示、なぜ、その資料を使うのか、なぜその調査なのか、なぜその人にインタビューするのか、など研究との関連を常に考えてデザインするようにとの指導を受けている。
		結論を際立たせるための導入部分の論述方法
		草稿を見ながら、…具体的に論のつながりや記述の指導を受けることで、具体的な修正方法を学ぶことが役に立った。
		概念の活用においての説明の甘さや、論述の方法についての指摘が大いに役立った。
		既存概念や、先行研究者について教示があったとき
	先輩	学会での発表の様子や、これまでの研究のスケジュール感、どういった成績で博士課程に進めるのか、参考文献の紹介など実際の院生生活に役立つ情報をいただいている。
	友人	パラグラフ・ライティングの書き方を米国大学修士を持つ知人から教わったこと 世界標準のルールとしては、前置きではなく結果が冒頭にくること、補足的なことほど伝える順序が下り、最後は未来的な展望で閉じる云々。
テキスト	市販のテキスト	論文の型、調査方法、分析手法などを参考に研究デザインを行った。
		学術論文の序論、本論、結論それぞれの役割の整理
モデル	学会誌などの論文	どのように話を組み立てるかの参考や調査用資料作成の参考にしている。
	ゼミの先輩が書かれた修士論文	スタイルガイドの見本として参考になります。
n/a		自分のオリジナリティを見つけること
		指導・助言が論理的な反論であった場合、論文の欠陥を認識し改善策につながった事

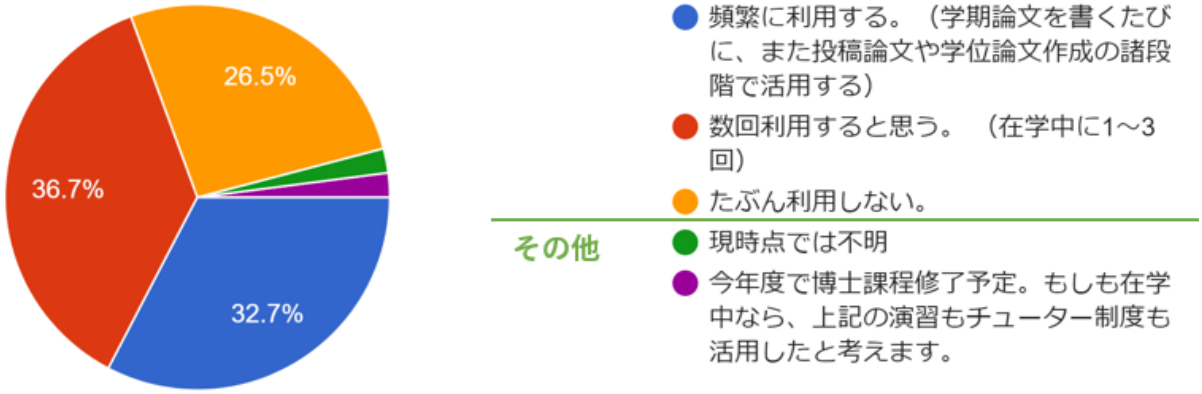
※　回答を調査者がカテゴリー別にまとめた。

3.6. 今後の研究科のライティング教育（すべて 49 件の回答）

35. 来年度から「学術的文章作成演習」（仮称）というライティングの授業を開設することを予定しています。開設された場合、履修しますか？



36. 研究科に無料のチューター制度があれば活用しますか？チューター制度とは、一回60 分程度でライティングに関する相談をしたり、論文原稿の助言をしてもらったりするしくみです。



3.7. 自由記入（7 件の回答）

37. 伝えきれなかったことやメッセージなどがありましたら、自由にご入力お願いいたします。

- ライティングについて、アンケートをとって対策を講じていただけるのは、大変ありがたく感じます。
- 細部にわたる質問を設定されたことで、アカデミック・ライティングの概要が分かった気がします。ありがとうございました。
- アンケート作成、大変おつかれさまでした！
- もう２年なので履修できません。もっと早く開設していただきたかったです
- 学部から上がり系の方の書き方と、社会人学生系の書き方とで、分けたほうが、事実上、よりフィットするように思いました。
- 大学院生の中には、資格スクールのように、教員や先輩がすべて教えてくれるものだという受身姿勢の方にお会いしたことがあり、違和感を感じます。参考資料や役立つ講座の提示と共に、主体的な行動が必要な点は入学時にお伝えしたほうが良いかと感じます。過去に論文を書いたことがない方も多いため（大卒ではない、論文不要な学部だったなど）、想像が難しいと思われます。2019 年・2020 年度の論文技法講義での先輩方の体験談は、具体的なスケジュールと実際の行動の紹介は参考になりましたが、個人的な想いのお話で終わるケースもあり、物足りなさがありました。また専攻に偏りがありました。今後は、内容について事前のすり合わせをされるとさらに良いかと感じました。
- ①入試の際の指導教員の選択は、自分の研究がどのような道筋をたどるのかが明確でないまま決定し、研究を進めていきながら次第に指導教員の研究分野と自分研究のデザインにマッチしない点が出てきた。指導教員の考え方と違う点については同じゼミの先輩方に聞くこともためらわれ、その為わからないことを聞くことができない。また指導教員以外に質問がしたくてもどなたに聞けばよいかわからない。他の教授に質問するには指導教員の許可がいるのかどうかもわからないし、許可がいるなら質問しにくく結局できずに一人悩んでいる。②先輩方の口述試験を視聴すると、最後の最後になって研究に対するコメントが山のように出てきている。そのようなコメントはできれば中間発表の際に頂き、修正して研究に生かし、しっかりした論文を仕上げて提出したい。しかしながら、我々の前回の中間発表では教授からのコメントは一つも一言ももらえずじまいであった。中間発表は何のためにやるのか？これまでの経過で不足している点や目の付け所がずれていたり、今後の見通しとして必要な部分があればそこを指摘してもらえるのを学生は期待している。学生は発表前に時間をかけて準備している。教授陣もしっかりと資料に目を通し、たとえ分野が違って理解に苦しむ内容であったとしても、それは初めての人にはわかりにくいね、といったコメントをした上で、どこが悪いのかを指摘してほしい。中間発表が他の先生方に見てもらえる唯一の機会であるのに、大変残念であった。

法政大学大学院公共政策研究科
設立十周年記念シンポジウム

2022年11月26日（土）14:00ー17:00
法政大学市ヶ谷キャンパス外濠校舎S306＋Zoom

大学院における
ライティング教育の意義

早稲田大学　国際学術院
佐渡島紗織

祝辞

設立十周年、おめでとうございます。

これまでに様々な御苦労を経て、10年という実績を重ねられてきたことと、お慶び申し上げます。

そのようなお目出たい席にお招きいただき、光栄です。

自己紹介

◆早稲田大学で最初に嘱任されたのは大学院アジア太平洋研究科（国際関係論＋国際経営論）

特に国際経営論ではビジネスの経験を積んだ人がステップ・アップとして学びに来る大学院で、存在する問題点が貴研究科と類似していると推測される（ライティングを含む研究方法を指導するために任期付きの教員として雇用された）。

◆アメリカの大学院で博士課程を経験し、日本の大学院において不十分な点を実感していた。

…指導教員から個別指導を受ける、先輩後輩の関係から学ぶ（ゼミが「タコつぼ式」の教育）。

アメリカでは、研究方法（論文の書き方を含め）が体系的に指導されていた。博士課程の学生も、最初の2年間は科目の履修が必須。その中で基礎的な内容を領域を超えて学ばされる。この体験が、現在の私の指導に大きな影響を与えた。

次第

1. 学問へのいざない
   - そもそも学問をするとは何をすることか

2. アカデミック・ライティング指導がめざすところ
   - 何を行う場か
   - 何を指導すればよいか

3. 早稲田大学アカデミック・ライティング教育部門での実践
   - アカデミック・ライティング授業の例
   - ライティング・センターの例

1. 学問へのいざない

そもそも学問をするとは何をすることか

社会で仕事をしてきた人の文章

効率よく要点を伝えるための文章

- 箇条書きが得意
- 体言止め
- 表現の緻密さよりもスピードを重視

機関や仕事の種類による慣習を重んじる

- 定型に沿って書く
- 先輩が行っている方法を踏襲する

大学院に入って学問をする

学問とは

人類が積み上げてきた知識を知り、

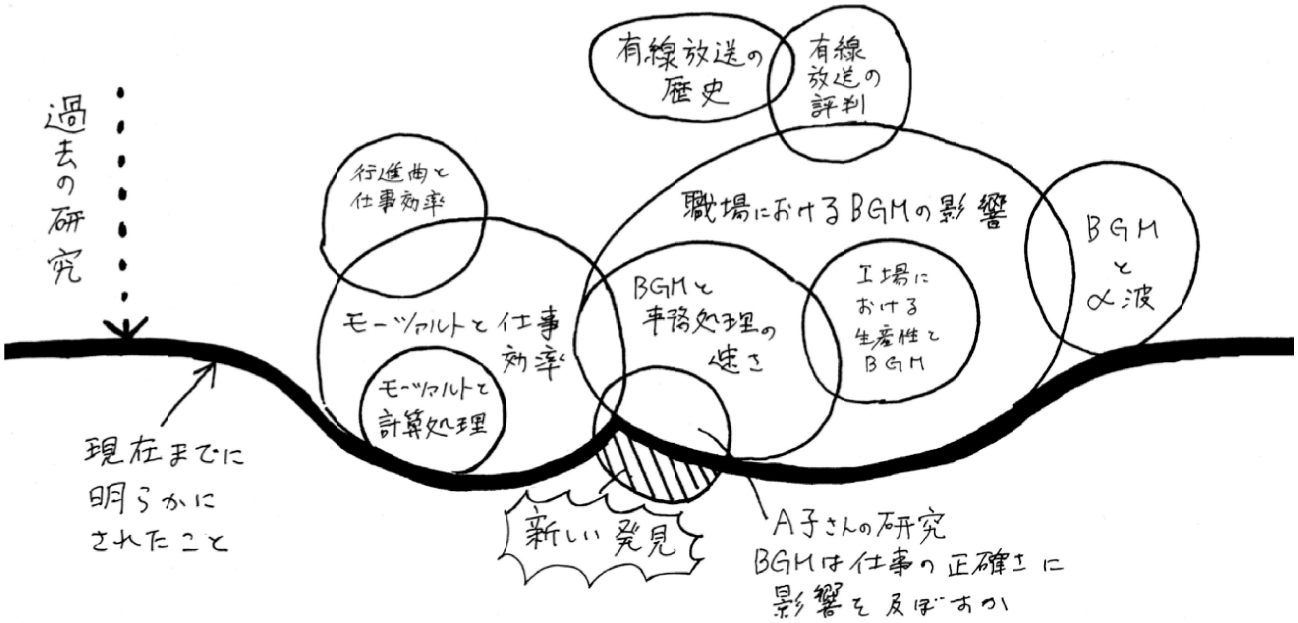
その上に新しい知識を構築する営み

ジャーナリズム…新しい知識を発表するが、先人が行った発見については触れなくてよい。

政策…新しい方針を打ち出すが、これまで行われてきた個々の事柄との違いを詳細に説明することは求められない。

「先人たちの知識をふまえて、新しい知識を構築する」営み

佐渡島・吉野（2021）p.190



ビジネスマンたちを対象とした授業（研究方法）の授業記録

佐渡島紗織・吉野亜矢子（2021）
『これから研究を書くひとのための
ガイドブック　第2版』ひつじ書房

研究における「新しい発見」とは

- 問いそのものが新しい
- 同じ問いであっても研究対象者が異なれば新しい
- 同じ問いと研究対象者であっても研究方法が異なれば新しい
- 異なる言語で発表されたものは新しい

学術研究の種類（人文社会科学系）

■研究目的の分類
　理論構築、モデル構築の研究
　理論検証、モデル検証の研究
　　仮説検証を含む
■データ収集法の分類
　文献研究
　実証研究
　　実証研究における研究者と対象者の関係
　　実験的
　　準実験的
　　自然的
■データ分析法の分類
　数量的研究、定量分析
　質的研究、定性分析
■研究対象の分類
　大規模な調査
　比較研究
　事例研究

文献研究論文の構成

（要旨）
（目次）
序論
　研究のテーマとその範囲、
　研究の目的、
　先行する研究と本研究との関係、
　使用する資料、
　論文の構成
本論　（いくつかの章）研究の結果と解釈
　Ⅰ
　Ⅱ
　Ⅲ
　～
結論
　研究結果まとめ、結果に関する考察、先行研究との関係／社会との関係、残された課題
注記（本文の終わり、または各章の終わり、または各ページの終わりに）
参考文献リスト（注の中に書誌情報を含ませ、リストを出さない場合もある。）

実証研究論文の構成

（要旨）
（目次）
（表のリスト）
（図のリスト）

Ⅰ　序章　　…研究目的、その背景、その重要性
Ⅱ　研究の目的　…研究の問い
Ⅲ　先行研究　…これまでに明らかにされた点、不十分な点
Ⅳ　研究方法　…どのように研究するか
Ⅴ　研究結果　…何が分かったか
Ⅵ　考察　　…結果と方法についての振り返り
Ⅶ　結論　　…学術界と社会における貢献、今後の課題

注記（本文の終わり、または各章の終わり、または各ページの終わりに）
参考文献リスト
資料

2. アカデミック・ライティング指導がめざすところ

何を行う場か
何を指導すればよいか

企業がライティング研修を求める背景

「ライティングの研修をしてください。うちは、こんな事情です。」

新任の社員が書いた文書を3期上の先輩が直して戻す。

新任が書き直して、室長が見る。赤を入れて本人に戻す。

新任が書き直して、部長が見る。赤を入れて本人に戻す。

新任が書き直したら、元の文章に戻ってしまった。

みな、各自の感覚で「分かりやすい文章」にしようとしている。

が、共有されている基準がない。

添削の功罪

学内の教員

「徹夜で卒論の赤入れをしているのに、学生はちっとも書けるようにならない！」

◆どこがまずいかを特定している･･･教員

◆どう直すとよくなるかを考えている･･･教員

↑

書く力が伸びているのは教員

院生自身がもつ学術的な文章に対するイメージ

誤ったイメージ

学術的な文章は、小難しい文章である。

抽象的な言葉を多く使うのが学術的文章である。

↓

学術的な文章は、わかりやすい文章であるべき

…抽象的で複雑な事柄を扱う文章であるから

書き手の意図がそのまま読み手に伝わる文章が理想的

ライティング指導がめざすところ　その1

文章を診る観点を教える

- ✓ 添削をしない。
- ✓ よく書けている文章を見せるだけでは書けるようにならない。
- ✓ よく書けていない文章を見せても書けるようにならない。

⇒良し悪しの判断をするための「観点」を教えることが重要。

Do not give the fish. Teach how to fish.

⇒「観点」を教えれば、書き手は自力で文章を診断し修正できるようになる。

文章を点検するための観点の例

□シンプルな文を重ねている（一文一義）
□文の主語と述語がずれていない
□文と文の関係を適切に表す接続表現が使われている
□多義の「の」「こと」「もの」や指示代名詞が外されている
□概念（特にキーワード）が一貫して使われている
□不要な「について」がない
□不要な「的」「化」「観」「性」がない
□論点が整理されている
□抽象度が意識されている
□パラグラフ内の内容が一貫している
□パラグラフの先頭にパラグラフ内容を統括した文がある
□統括文をつなぎ合わせて読むと全体の要旨になる
□「はじめに」に問いがあり、中で問いが追究され、「おわりに」で答えがある

ライティング指導がめざすところ　その2

言葉使用に関する原理を教える

✓なぜ「○は△である。」というシンプルな文を重ねて書くとよいのか。

人が文を思考の単位として考えを組み立てるから。

✓なぜ、文章中でキーワードを一貫させて使う必要があるのか。

語はそれぞれに意味の範囲をもつ。

その意味の範囲（イメージされる意味）は人によって異なるから。

✓片仮名語を無自覚に使わない方がよいのはなぜか。

外国語を片仮名で表記しても、すでに原語と意味がずれている場合があるから。

ライティング指導の目標

■優れた学術的文章は、わかりやすい文章であると教える

■添削をするのではなく、文章を診る観点を教える

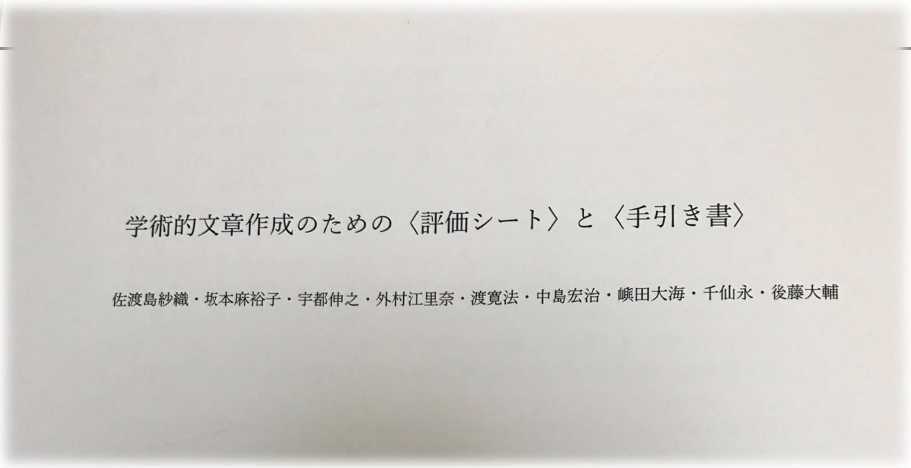
■良い悪いだけではなく、言葉使用の原理を説く

⇒アカデミック・ライティング教育を、この目標を念頭に作る

参考となるガイドブック

法にかかわる文章の作成法　　観点から文章を診断する　　先人たちの知識をふまえる

因子分析をもとにアカデミック・ライティングの観点をルーブリックにしたもの


学術的文章作成のための〈評価シート〉と〈手引き書〉

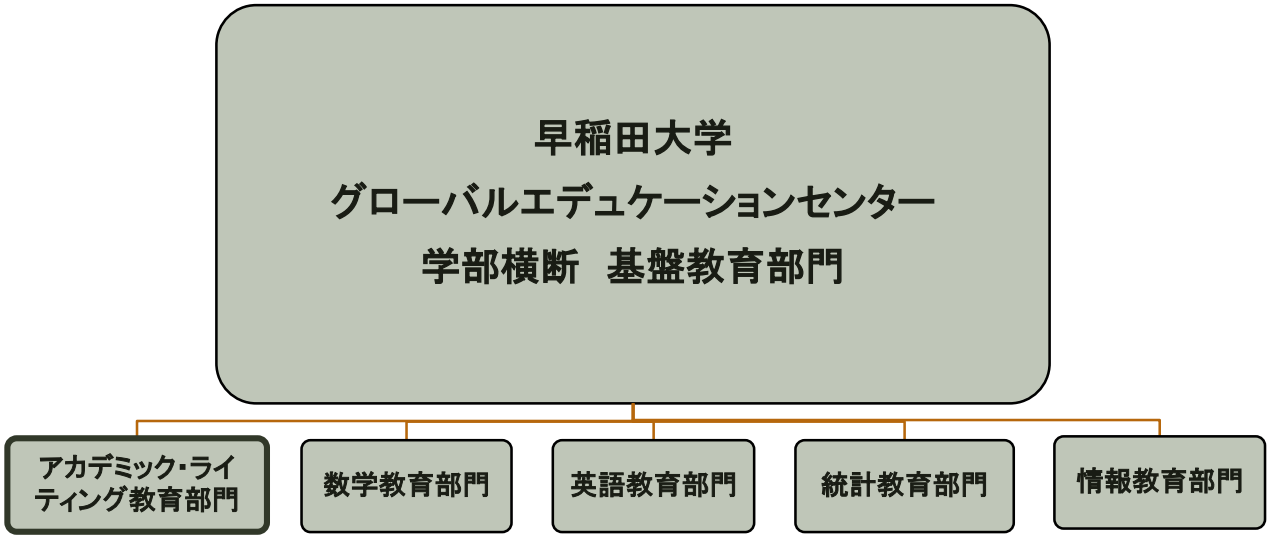
佐渡島紗織・坂本麻裕子・宇都伸之・外村江里奈・渡寛法・中島宏治・嶺田大海・千仙永・後藤大輔

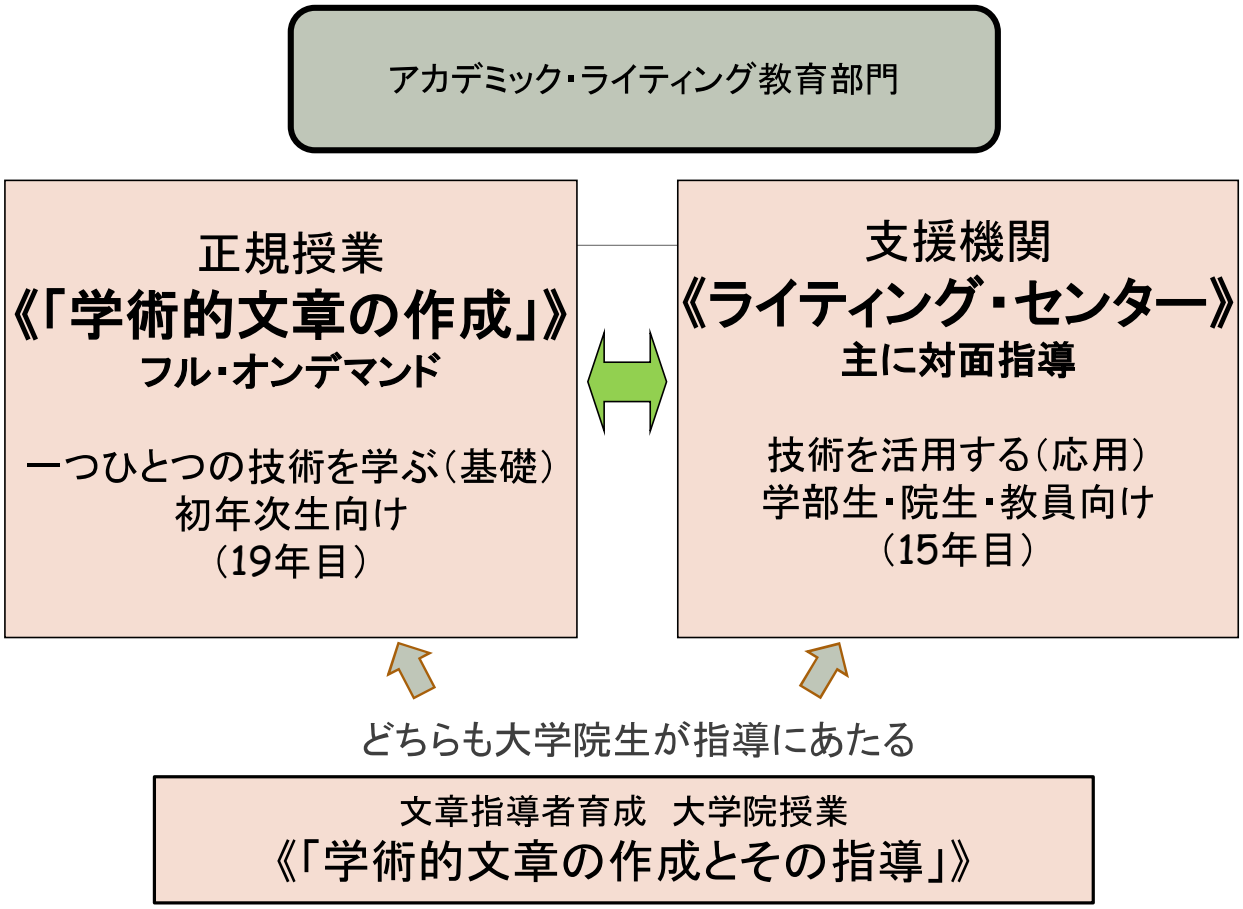
佐渡島紗織・宇都伸之・後藤大輔・坂本麻裕子・千仙永・中島宏治・平松友紀・渡寛法(2023出版予定)『アカデミック・ライティング　ルーブリックと手引き（仮題）』大修館

3. 早稲田大学アカデミック・ライティング教育部門での実践

アカデミック・ライティング授業の例
ライティング・センターの例

アカデミック・ライティング教育全体の学内位置づけ





アカデミック・ライティング教育部門の組織

教員4名

…ライティング教育・日本語教育・教育史・経営科学の専門分野

（テニア付3名、任期付き1名）　＊教員は、自分の分野の授業も行う。

助手・助教（5年任期）10名…日本語文章担当6名、英語文章担当4名

⇒毎週14名でスタッフ・ミーティング、教員ミーティング、助手ミーティング

専任職員2～4名…本センター2名、遠隔教育関連2名

委託職員4名…院生の勤怠管理、ライティング・センター受付

雇用している大学院生…60～70名

「学術的文章の作成」授業沿革

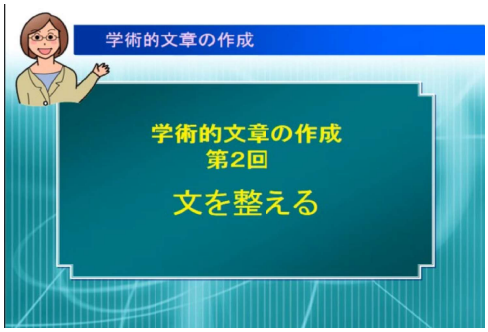
2007年　実験授業

2008年　全学共通科目として開講

2010年～2014年　教育GP助成金で運営

2011年～　4学部で必修・自動登録化

2025年～　5学部目が必修



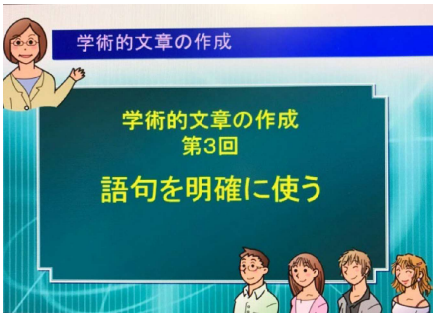
現在：春クヲーター約1500人

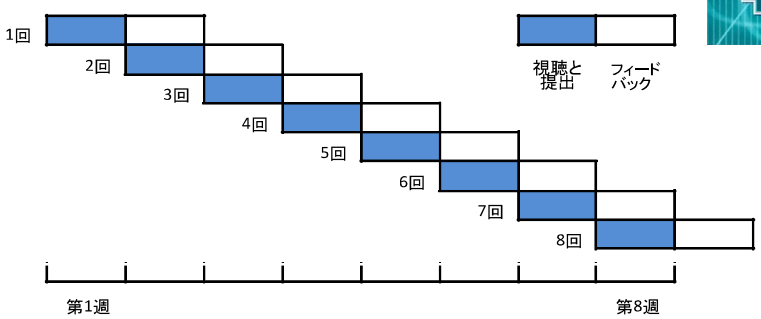
夏クヲーター約1500人

秋クヲーター約1500人　　＝初年次生の約半数

一斉配信と個別指導を組み合わせたフル・オンデマンド授業　50分間視聴＋文章作成課題

〈全8回、週1回配信、1単位〉



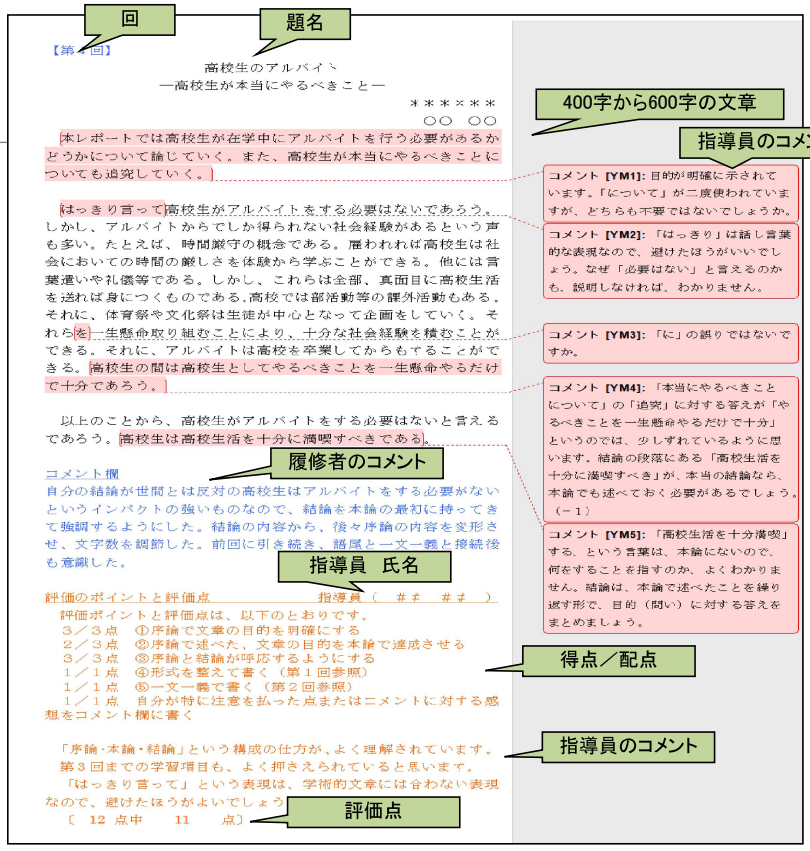


「学術的文章の作成」指導内容

□剽窃について

■第1回　学術的な文章とは
■第2回　文を整える
■第3回　語句を明確に使う
■第4回　全体を構成する
■第5回　論点を整理する
■第6回　参考文献を記す
■第7回　引用をする1
■第8回　引用をする2

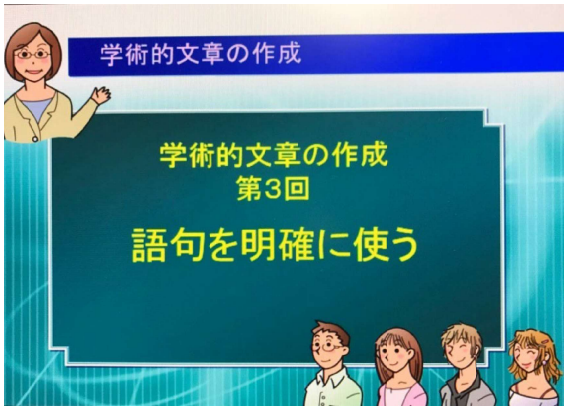
大学院生がコメントと評価点を書いて返却



一斉配信でも「考えさせる」授業の工夫

学生に見立てた4人がディスカッションを展開

（ディスカッションの台詞を書き、大学がアニメーションを作成、声優と私が吹き込み）



（2014年と2019年に早稲田大学e-teaching Award 受賞）

先生：このパラグラフのトピック・センテンスは、どのようなものがよいでしょうか。

学生A：これは、「例えば」で始まっていることからも分かるように、事例が並べられている文章ですね。だからこれらの事例を一般化した文を作ればいいということね。

学生B：「『けち』と『ぎすぎす』や『おしきせがましい』と『倹約家』や『スマート』や『積極的』はちがう」というのはどう？

学生C：間違えじゃないけど、それじゃ一般化されていないわ。

学生D：「日本語はむずかしい」というのはどうかな。

学生C：それじゃ、今度は抽象度が高すぎるのじゃないかしら。概括してだいぶ主観が入っているわ。

学生D：「同じ事柄を指し示す言葉でも肯定的な意味を持つ言葉と否定的な意味を持つ言葉がある」ならどう？

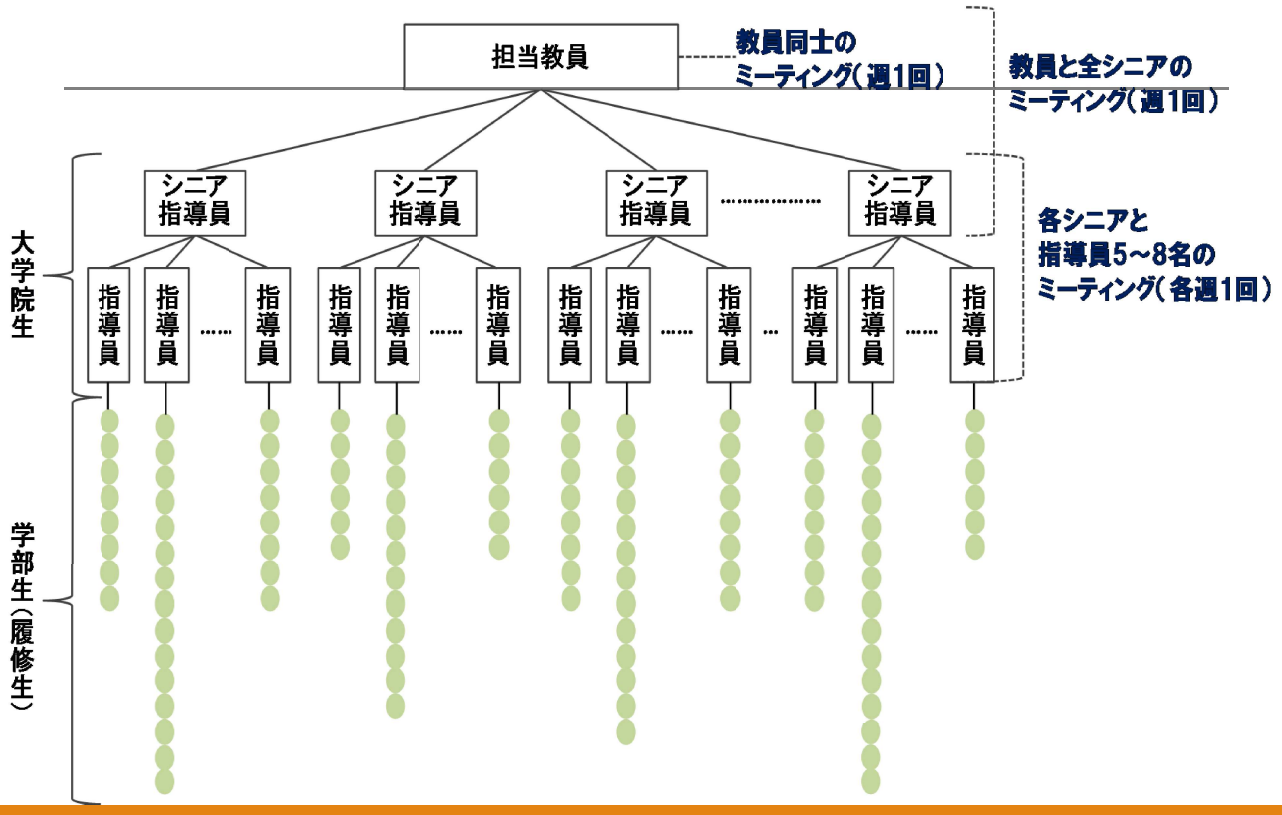
学生A：いいわね。私は、「同じ事柄でも肯定的なニュアンスで表現したり否定的なニュアンスで表現したりすることができる」としたわ。

授業に対する履修者の評価

…「大変役に立った」と「役に立った」の合計が毎回約9割

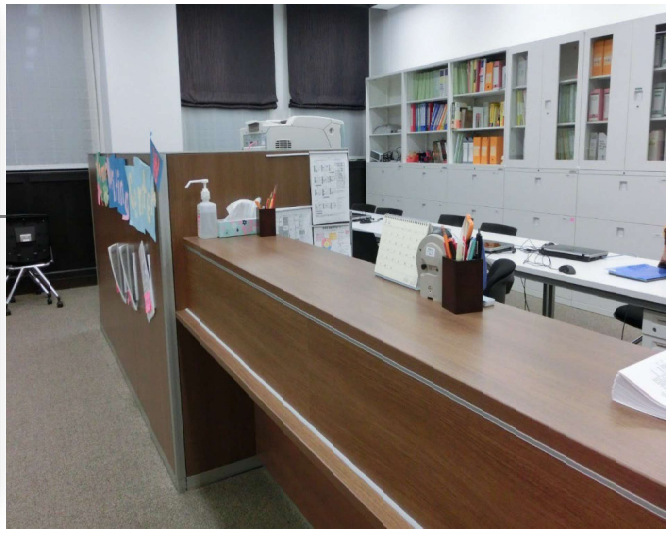
- 今まで学術的な文章の書き方をまったくといって良いほど**知らなかった**ので、授業で学んだことは全て自分にとっての財産になりました。
- **指導員の先生からのコメント**を読むのが楽しみでした。やる気を起こす言い方をしてくださるので最後まで頑張れました。
- 毎回出すのは大変だったが、自分の文章が少しずつ**良くなっていくのが実感**できた。

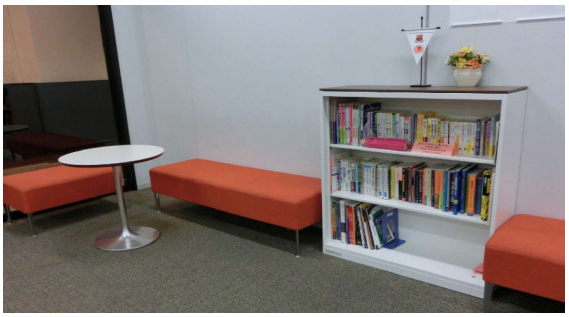
大学院生による指導の質を高めるための組織



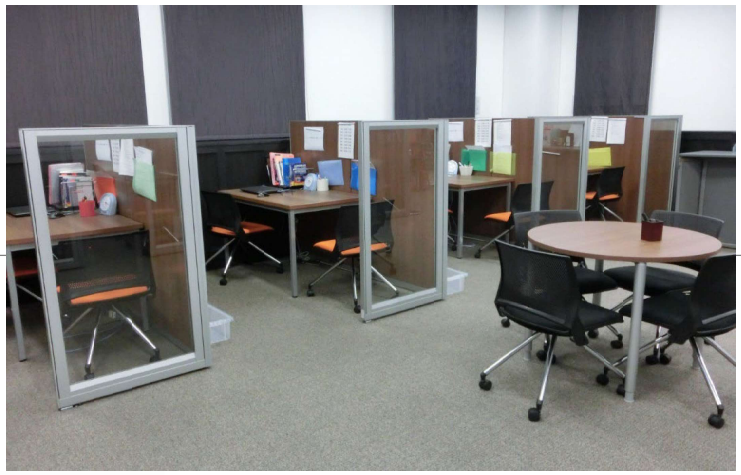
ライティング・センター沿革

2004年～2007年　国際教養学部に設立
　　国際教養学部の資金で運営（現代GP助成金）
　　国際教養学部の学生だけに開室
2008年　留学センターに所属移転
　　大学資金で運営（グローバル30助成金）
　　国際教養学部とアジア太平洋研究科に開放
2009年　オープン教育センターに所属
　　（現グローバルエデュケーションセンター）
　　教育GP助成金、大学資金で運営
　　全学の学生および教員が利用可能
2010秋　理工学部キャンパスに分室　（個室、週二回、チューター2名派遣）
2013春　所沢キャンパスに分室　（学習支援センターの中、チューター2名派遣）
2020年　オンライン・セッションを開始（週１～２日）



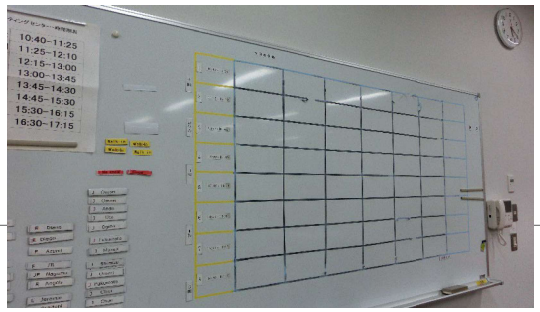


Waseda University



■1セッション45分間（無料）
■予約制だが空いていれば飛び込み可
■日本語か英語の文章を検討
■会話も日本語か英語
■就職関連の文章は扱わない

Waseda University



Waseda University

ライティング・センターの理念
（アメリカで発足）

1）書くことを「過程」で支援する

どの段階でも、何度でも、来室できる。

一行も書いていなくても書くことは始まっている。

2）領域を横断して書くことを支援する

ライティングには共通した問題がある。

チューターは専門領域に精通していなくてよい。

一読者として助言を与える。

3）「紙を直す」のではなく「書き手を育てる」

対話を通して書き手が自ら問題点と修正法に気づくようにする。

添削しない。翻訳しない。

ヒントや修正の選択肢を示し書き手が最終判断をする。

「書き手を育てる」とは

添削はしない

◆どこがまずいと感じているかを言わせる

（苦心している点を言わせる）

◆どう直すとよくなるかを一緒に考える

・・・**対話**を通し、書き手の**意図に沿って**一緒に修正する。

『オーナーシップを護る指導』『書き手に沿う指導』『自立した書き手を育てる指導』

書き手の自立を促す会話

…問題点、修正法に本人が気づくように

◆ **質問をする**

「このレポートで一番言いたいことは何ですか？」

「レポート課題に答えていますか？」

◆ **作業をさせる**

「根拠3つに下線を引いてください」

「下線部を続けて音読してください」

◆ **選択肢を複数示す**

「ほかの表現としては〇〇や～～がありますね。どちらを使いたいですか？」

文章を検討するための言語を来訪者が選ぶ （チューターは指名できない）

EE 英語の文章を英語で検討するセッション
EJ 英語の文章を日本語で検討するセッション

JJ 日本語の文章を日本語で検討するセッション
JS 日本語の文章を日本語教育専門のチューターと検討するセッション(主に日本語学習者対象)
JE 日本語の文章を英語で検討するセッション

CW Creative Writing （現在英語のみ）

早稲田大学ライティング・センターの広報

- 希望する学部のガイダンス、研究科のガイダンスで紹介
- 「学術的文章の作成」授業で紹介
- 教員のメールボックスに案内チラシ
- 教授会でプレゼンテーション
- 学内、バス、TWITTER、FACE BOOKで案内
- 新任教員ガイダンスで紹介
- 教員がクラス全体で来訪するツアーを案内
- 図書館と合同でワークショップ

早稲田大学ライティング・センターの利用状況（複数学期の平均）

◆セッション数　学期中、約**1700**セッション

◆日本語文章48%、英語文章52%

◆一般レポート20%、語学エッセイ21%、学位論文22%、投稿論文16%、その他21%

◆学部生52%、大学院生46%、教員2%

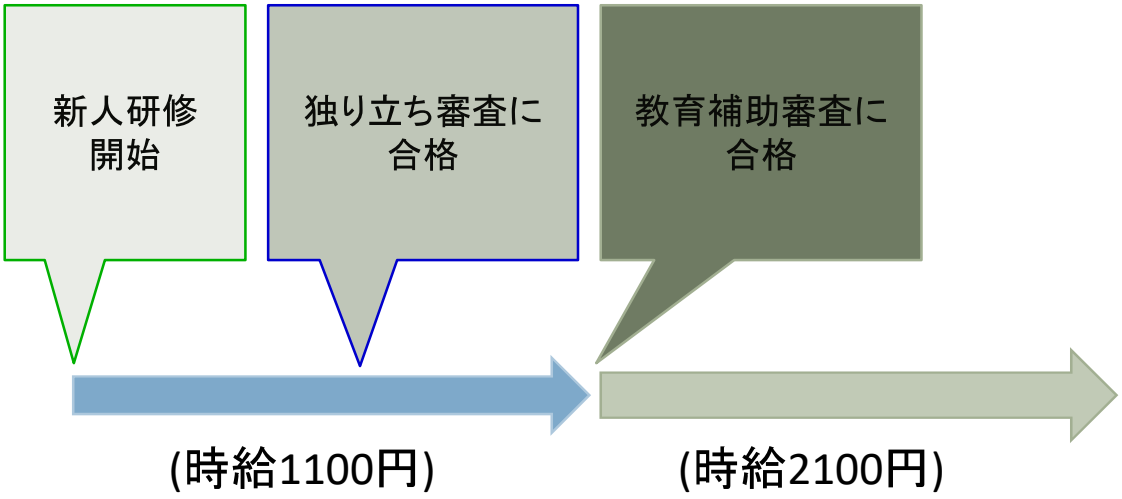
早稲田大学ライティング・センター利用者の声

（セッション後のアンケート記述より）

- 言いたいことがあるのにそれをうまく言語化できない時、チューターとの対話を通して、自分の考えが整理された。
- 「答え」ではなく「考え方」が与えられるので勉強になった。
- インターネットのコーパスを使って、語の組み合わせ方を調べる方法を教えてくれたのが役立った。

チューターの育成と報酬

（ライティング・センター発足時は、学部生チューターも雇用）



毎週行う、チューター全員参加の研修内容（80分間）

◆文章診断の練習
◆セッションの始め方、終わり方を練習
◆書き手の気づきを促す質問
◆書き手に書き込み作業をさせて気づきを促す方法
◆非母語で書いている／非母語で対話する場合の対応
◆長い文章を扱うセッション
◆専門的な分野の論文を読み、構成などの慣習を知る
◆ブレーン・ストーミングを行うセッション
◆アメリカで刊行されているチュータリング本の購読
◆セッション録音文字化原稿の分析
◆個人ファイルの中の文章を使った話し合い

←週研修の様子

学期末にはグループ研究

それを学会で発表→

・リピーターは自立しているか、依存の度合いを強めているか。

・日本語非母語話者が文法チェックを求めてきたときに主体的に取り組ませる対話とは。

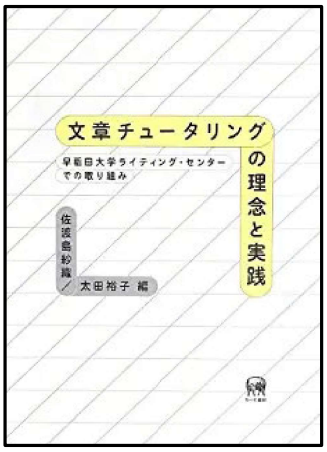
文章指導に携わった大学院生の成長

（学期末振り返りシートより）

- ゼミで、他の人の文章のどこが問題かを瞬時に分かるようになってきた。（チューター）
- 傾聴する態度が身についた。電話で友人が人生相談を持ちかけてきたとき、対応が変わった。（チューター）
- 投稿論文が査読を通るようになった。（チューター）
- 1期目は、配点に沿って評価することで精一杯だった。2期目には、学生さんがどういう思いで書いたかに目が向くようになった。3期目には、それぞれの学生さんが学期始めからどう伸びてきたかを考慮してコメントできるようになった。（授業、指導員）

⇒「教えることは学ぶこと」である

ライティング・センター指導と運営に関するガイドブック



佐渡島紗織・太田裕子編著（2012）『文章チュータリングの理念と実践―早稲田大学ライティング・センターでの取り組み―』ひつじ書房

アカデミック・ライティング教育

- 学問という営みの本質に触れる授業を

  ・・・「新しい発見」を世に発表する、創造的な過程を楽しむ

- 書き手の人生経験が反映された「思い」や「主張」をサポートする支援を

  ・・・ルールなどの表層的なレベルに留まらず、それぞれの院生が自己の認識を見つめ、社会を分析し、世界観が変わるような、修士研究、博士研究を支援する

参考文献

太田裕子・佐渡島紗織・冨永敦子・齋藤綾子(2012)「大学初年次日本語アカデミック・ライティング授業における帰国生と留学生の文章力―初回課題と最終回課題の文章評価調査から―」早稲田大学国際教養学部紀要『Waseda Global Forum』8 、pp.337-375

太田裕子・佐渡島紗織(2013)「『自立した書き手』を育成 するライティング・センターの研修とチューターの意識 ― 早稲田大学における実践事例とPAC分析 ―」早稲田大学国際教養学部紀要『Waseda Global Forum』9、pp.237ー278

坂本麻裕子・中島宏治・宇都伸之・渡寛法・嶼田大海・佐渡島紗織(2018)「ライティング授業で課題文章に付与されたコメントに対する学生の反応―実験とインタビューによる調査―」『リメディアル教育研究』12、pp.39-48

佐渡島紗織(2009)「自立した書き手を育てる―対話による書き直し―」全国大学国語教育学会編『国語科教育』66、pp.11-18

佐渡島紗織(2009)「早稲田大学における学術的文章作成授業―2年目における成果と課題―」『初年次教育学会』2-1、pp.72-79

佐渡島紗織・宇都伸之・坂本麻裕子・大野真澄・渡寛法(2015)「初年次アカデミック・ライティング授業の効果―早稲田大学商学部における調査―」『大学教育学会』37(2)154-161

佐渡島紗織・坂本麻裕子・宇都伸之・渡寛法・大野真澄・外村江里奈・中島宏治(2016)「因子分析による学術的文章作成力の構造解析」『リメディアル教育研究』11(2)39-48

佐渡島紗織・志村美加・太田裕子(2009)「日本語母語話者が日本語で英語文章を検討するセッションの有効性」早稲田大学国際教養学部紀要『Waseda Global Forum』5、pp.57-71

佐渡島紗織・冨永敦子・太田裕子・齋藤綾子・宮本明子(2012)「早稲田大学における学術的文章作成授業の成果―大学院生が個別指導するeラーニング初年次授業―」『大学教育学会誌』34-1、pp.119-127

早稲田大学オープン教育センター編(2012)『大学教育推進プログラム 全学規模で行う学術的文章作成指導―大学院生が個別フィードバックする初年次eラーニング・プログラム(平成22~24年度)最終報告書』

渡寛法・中島宏治・佐渡島紗織(2016)「ライティング・センターにおける文章作成支援の現状と課題―学生アンケートの自由記述分析から」『大学教育学会誌』38(2)、pp.77-86

御清聴ありがとうございました。

貴研究科におけるライティング指導の御発展を
お祈り申し上げます！

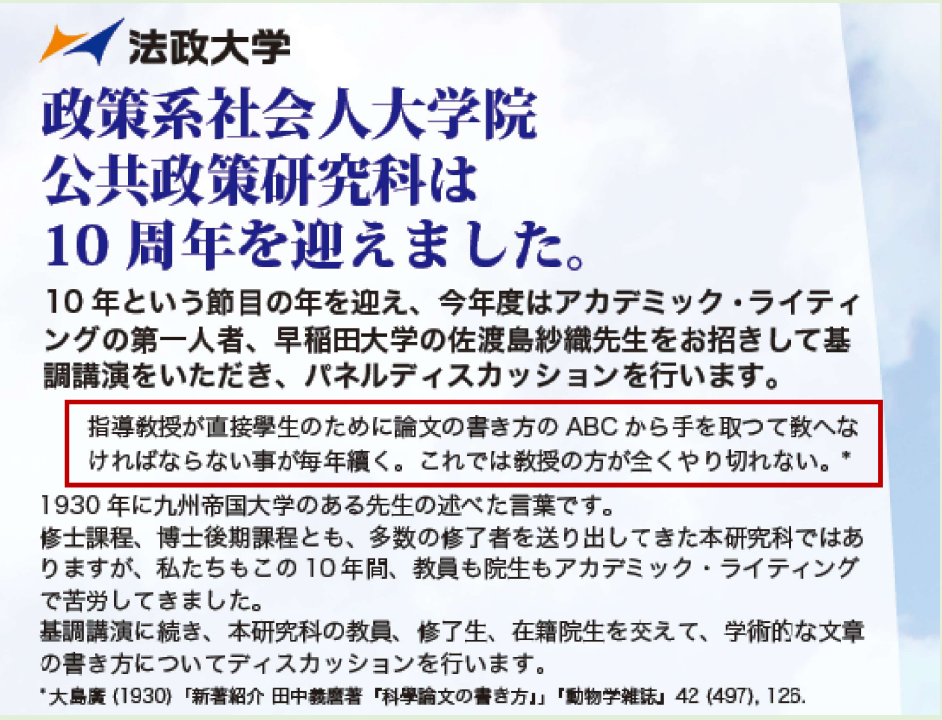
西谷内博美

法政大学大学院公共政策研究科
設立10周年記念シンポジウム
22.11.26

1. ライティング教育の変遷
（**プロダクト**から**プロセス**へ）

2. ライティング能力の構成要素
（専門、作法、研究、基礎）

3. 学術的文章作成に関する
アンケートの結果報告



（「公共政策研究科設立十周年記念シンポジウム」ポスターの一部）

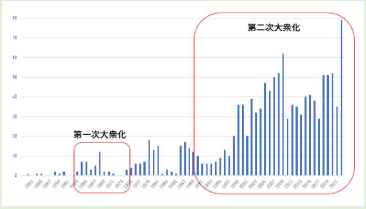
- 古くて新しい問題。
- ただし「大学生が論文の書き方のABCをわかっていない」という問題状況が、昭和4年と令和4年では異なる。
- プロダクト　→　プロセス
（ライティング教育のアプローチの変遷）
作品に介入　→　書くプロセスに介入

プロダクトアプローチの一例。ロングセラー：1929初版
→1987増補第32版

アメリカにおけるプロセス運動
（西口2019, 森本2022）

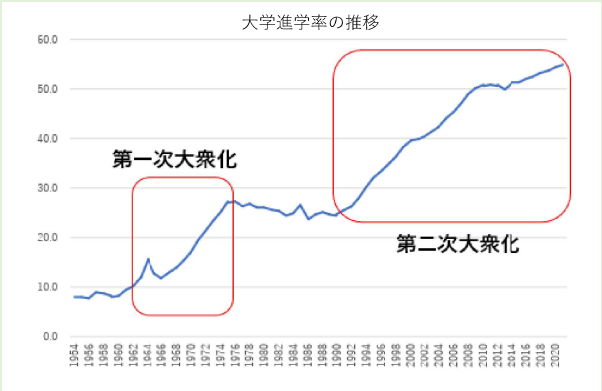
- 19C後半～　大学の大衆化
- 1950年代　プロセスへの介入を重視するライティング教育の模索が始まる
- 1980年　様々な制度や技術が発展（初年次教育、ライティングセンター、パラグラフライティング）

日本の場合は？



ライティング教育関連論文数の推移

大学の大衆化



1920年
2.2%

一部のエリート ⟷ 希望する人ならだれでも
学問的問題意識・素養が高い ⟷ それほど問われない場合も

ライティング教育の変遷

年代	発達区分	発達の様相
1980	黎明期	読み書き教育に対する問題意識の芽生え
1990	草創期	日本語表現科目の創設
2000	普及期	初年次教育としての文章表現科目の位置の確立
2010	転換期	転換点に立ち、模索する多様な取組
	発展期	ディシプリンと教養が発展の鍵

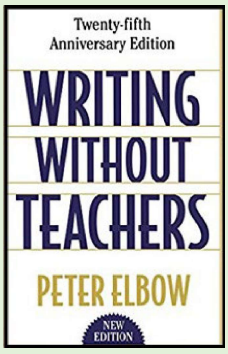
図 2-1　文章表現教育における 5 つの発達段階

（井下2008：12）

さらにポストプロセスの動向も

- 大学で学術論文を教える必要性／妥当性への懐疑。あるいはその政治性（権力作用）への危惧。
- 学術的であることに捕らわれず、自由に自分を表現する作文教育の導入（表現主義）
- Peter Elbow, 1973, “Writing without Teachers,” Oxford University Press.
- “I would begin by questioning Bartholomae's assumption that students come to the university seeking admission into our discourse community” (Boyd 1991: 337)
- 日本でも同様の論調や教育実践が散見される（西谷内2022）

David Bartholomae
Writing With Teachers: A Conversation with Peter Elbow

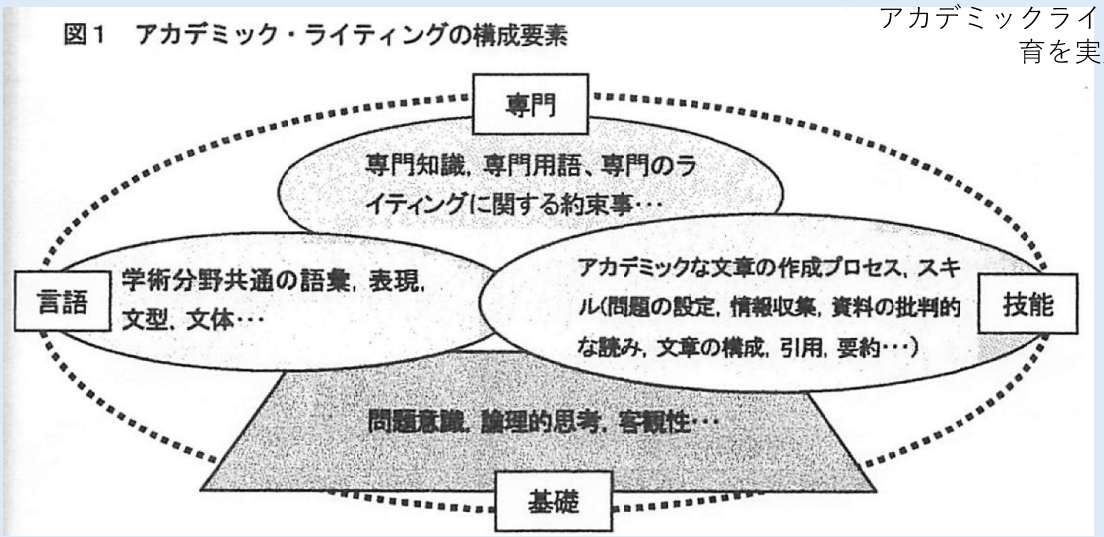


具体的に言うと、大学生が、何をできないのか？

プロダクト 作法
プロセス 研究
ポストプロセス 基礎

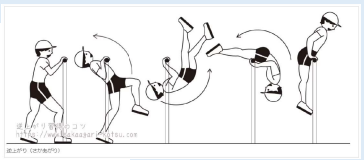
アカデミック・ライティングの構成要素（二通2004: 285）

留学生を対象に、
日本語教育のツールとして
アカデミックライティング教育を実施する場合

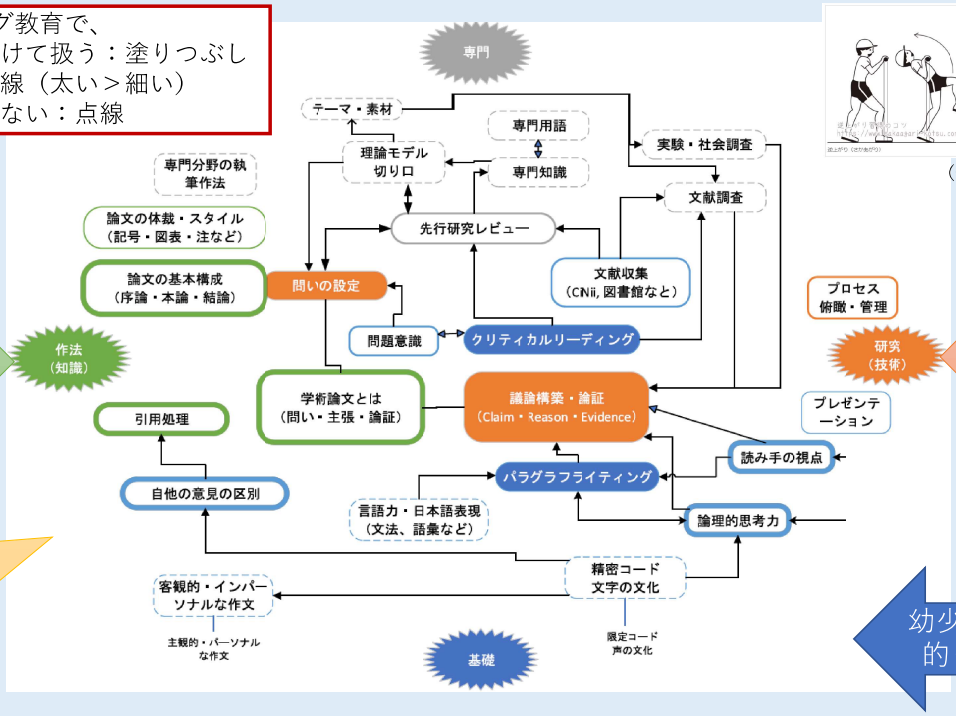


ライティング能力の構成要素（試案）

ライティング教育で、
- 時間をかけて扱う：塗りつぶし
- 扱う：実線（太い＞細い）
- 特に扱わない：点線

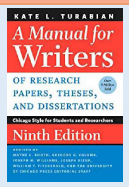


（逆上がり習得のコツ 2022）



90分×2〜3回

長期的：集中講義→数年



アンケート
各能力を、自己評価してもらった

幼少期からの学問的＜社会的学習

学術的文章作成（アカデミック・ライティング）に関するアンケート

49件の回答（回答率34％）

調査対象：法政大学大学院公共政策研究科および連帯社会インスティチュートの在籍者（休学者が含まれる）144名

調査方法：法政ポータルサイト（Hoppii）の「お知らせ配信」を介してアンケートを依頼。googleフォームで回答。

回答期間：2022.10.10～31

ライティング能力の自己評価

日本語表現	日本語の文法や語彙を人並みに使うことができる。――何を言いたいのか分からない、「てにをは」がおかしいと言われたことはあまりない。
客観的文章	書き手中心ではなく、対象を中心とした客観的な作文ができる。――具体的には、一人称の使用、主観的、あいまいな表現をできるだけ避けて、ある程度断定的に事実を記述する書き方ができる。
文献収集	文献を収集する方法を知っているし自由に実践できる。――つまり、CiNiiや図書館などを使い慣れている。（ここでは外国語文献の検索能力は問わない）
問題意識	授業や読書の際に、受動的に知識を得るだけではなく、自分なりの疑問や関心が新たにうまれたり、それに引き付けて考えたりすることが多い。
引用	自分の意見と他者の意見を区別できる。加えて直接引用と間接引用の違いが分かる。
批判的読み	先行研究を読む際に、感心し納得しながら読むだけではなく、議論の構造を捉えたり、批判的に読んだりすることができるし、そうしている。
読み手の視点	書いたものが伝わらないのは、読み手の理解力のせいではなく書き手の問題と捉え、読み手の視点から文章を書いたり推敲したりしている。
論証型作文	理路整然と首尾一貫した文章を書くことができる。（ちなみに、パラグラフライティングができる場合は「自信あり」です）

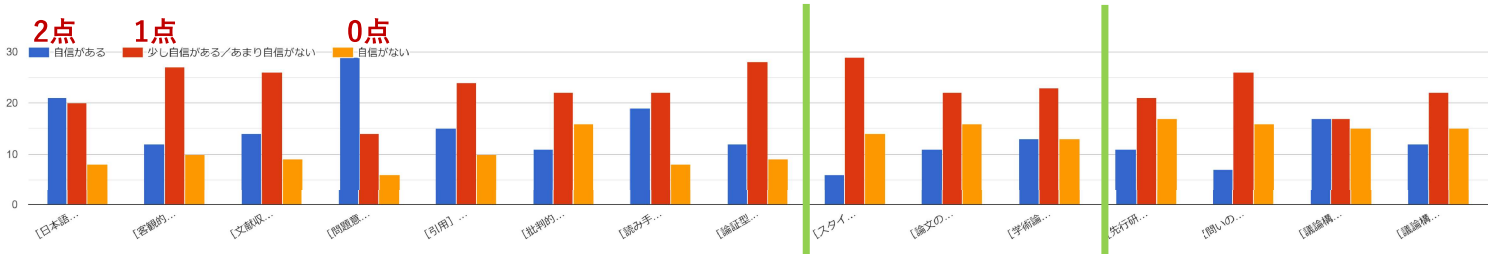
設問一覧（基礎／作法／研究）

スタイルガイド	特定のスタイルガイドに則して、適切な引用処理ができる。
論文の基本構成	学術論文における序論・本論・結論について、それぞれが一般的にどのような役割を持っており、何を書けばよいのか、他者に説明できる程度まで理解している。
学術論文の定義	学術論文と他の文章の違いがよくわかる。――たとえば、学術論文とは「問いと答えと論証からなる」という意味を明確に説明できる。
先行研究	自分の研究が先行研究にどう位置づけられるのかを、常に概ね、明確に捉え説明することができる。
問いの設定	自分の問題関心を、比較的容易に、学術的な問いに接続することができる。――オリジナリティが弱いと指摘されたことはほとんどない。
主張の明確化	少なくとも執筆終盤において、自分の言いたいこと（＝主張、答え）がなんであるのかを１～２文程度で明確に答えられる。――総花的、サマリー的などと指摘されたことはほとんどない。
体系的な議論構築	議論を分節化・階層化し、客観的な根拠を示しながら、自分の言いたいこと（＝主張、答え）を体系的に論証する方法を知っているし（我流であっても）、そうしている。

ライティング関連能力の自己評価

能力そのものではなく、
能力の自己評価！

学術論文を執筆するために必要な諸能力を自己評価してください。下記項目について、「自信がある」から「自信がな...も理解があやふやで、ほとんど実践できていない状態。「少し自信がある／あまり自信がない」は、両者の中間です。



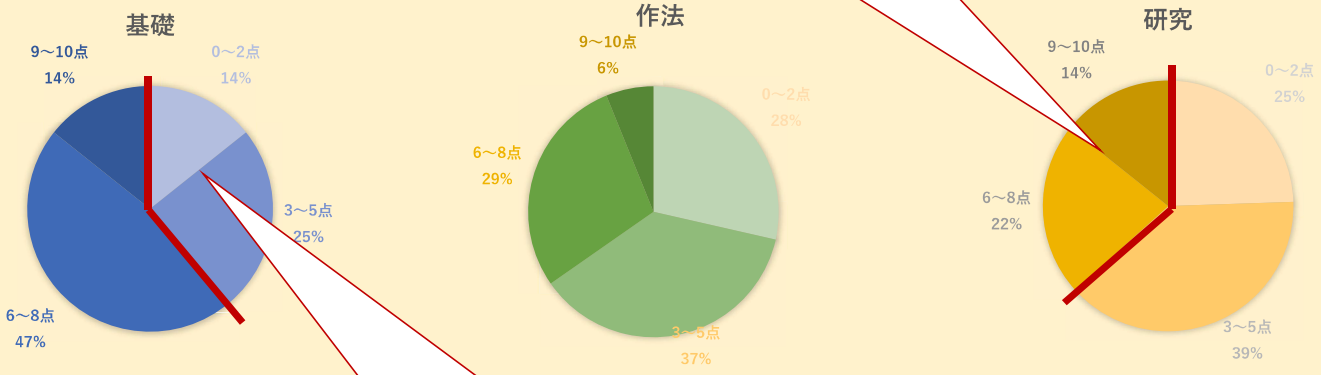
日本語表現
客観的文章
文献収集
問題意識
引用
批判的読み
読み手の視点
論証型作文
スタイルガイド
論文の基本構成
学術論文の定義
先行研究
問いの設定
主張の明確化
体系的議論構築

基礎　作法　研究

10点満点　10点満点　10点満点

得点の割合

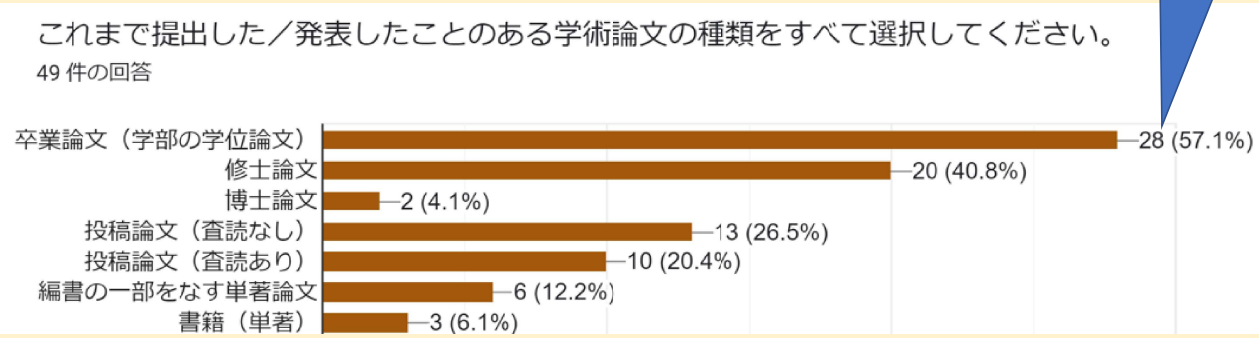
予想より多かった
→プロダクトアプローチで十分！？

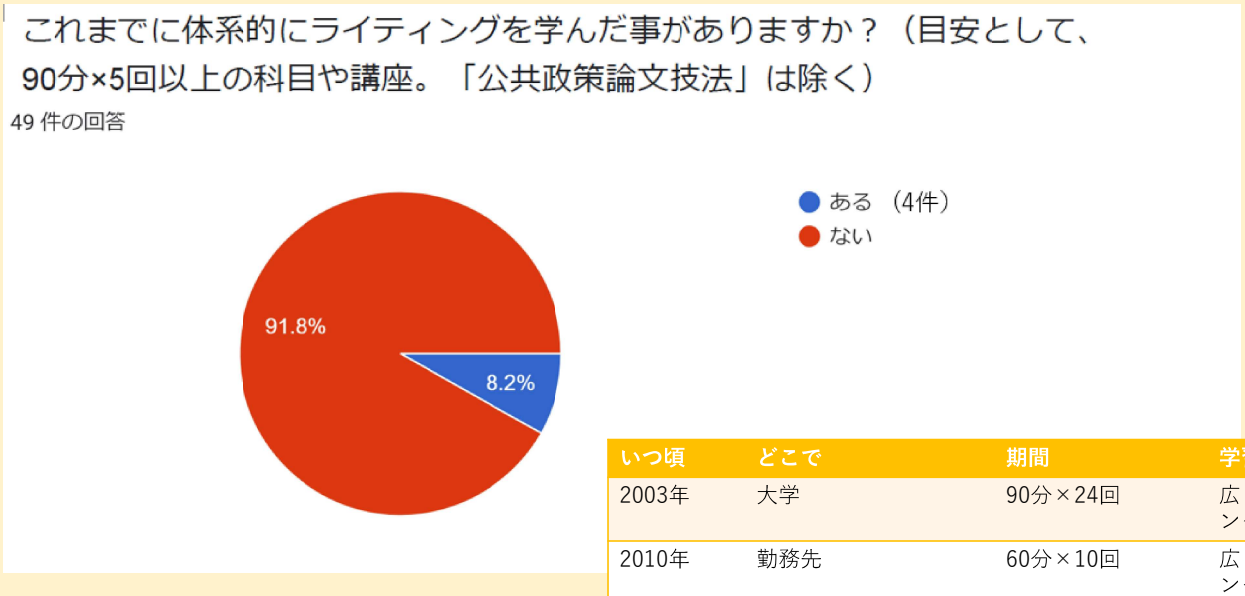


予想より多かった
→ややチャレンジング？

その他のアンケート結果

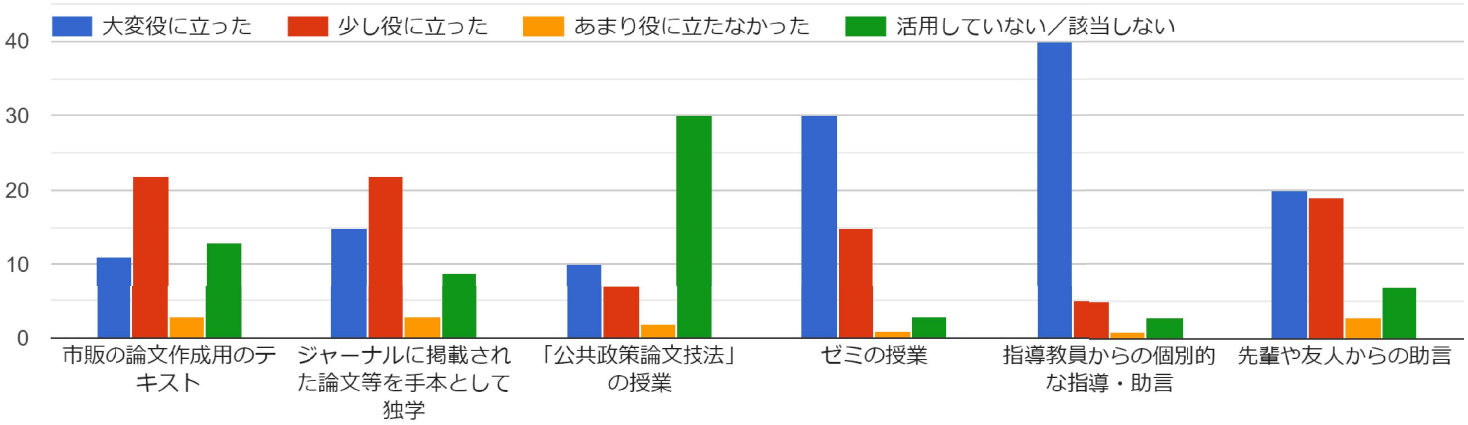
40%が卒業論文を書いていない





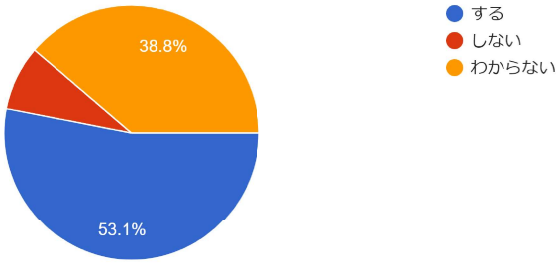
いつ頃	どこで	期間	学習対象
2003年	大学	90分×24回	広くライティング一般
2010年	勤務先	60分×10回	広くライティング一般
2016年	政策研究大学院大学修士課程	２単位	広くライティング一般
2022年	大学院	社会調査法５	学術論文の書き方

研究科で学術論文を書くにあたり、次の学習リソースはどれほど役に立ちましたか？



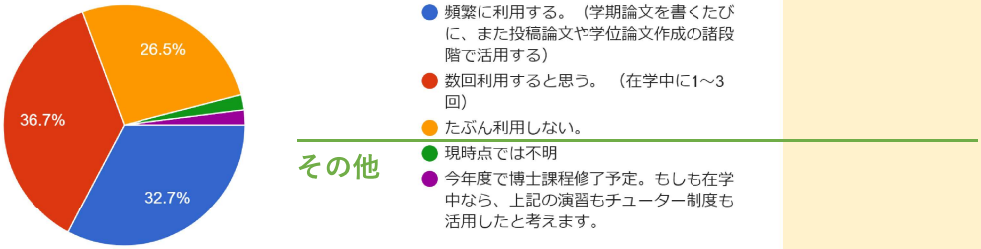
来年度から「学術的文章作成演習」（仮称）という...しています。開設された場合、履修しますか？

49 件の回答



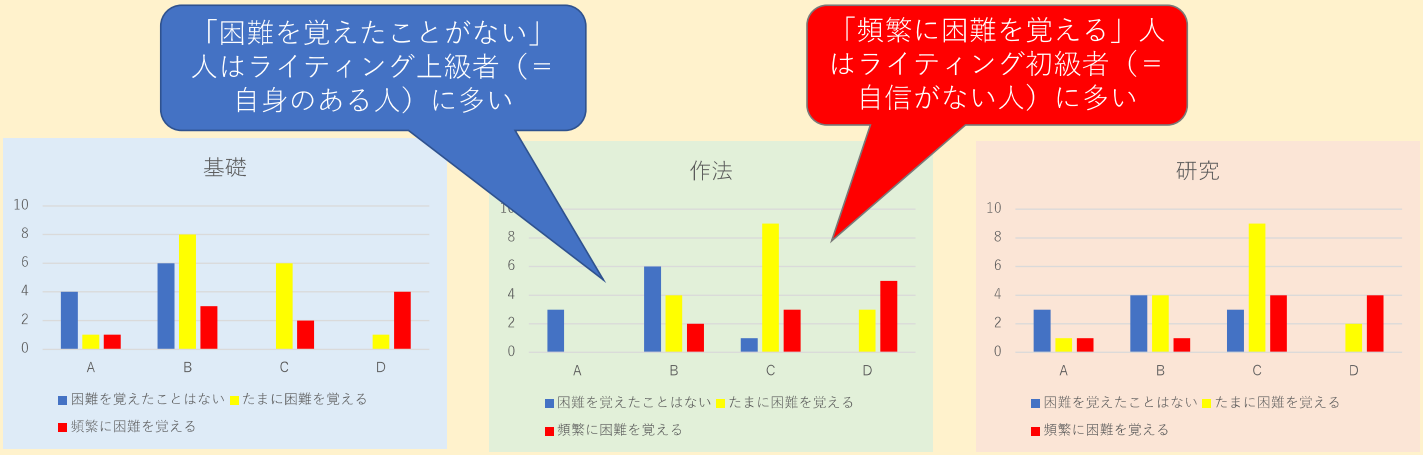
研究科に無料のチューター制度があれば活用します...原稿の助言をしてもらったりするしくみです。

49 件の回答



その他

仮説：社会人院生の、仕事上のライティングとの切り替えが難しいというお悩みは、切り替え問題というよりは、学術論文の定義や形を知らないことによる問題である。
→yes。モード切替の困難とライティング能力（作法＞基礎）の自己評価結果には相関関係がある。



カイ二乗検定　0.045332　有意

カイ二乗検定　0.013857　有意

カイ二乗検定　0.179341　not有意

引用文献

- Bartholomae, David, 1995, "Writing with Teachers: A Conversation with Peter Elbow," *College Composition and Communication*, 46 (1) : 62-71.
- Boyd, Richard, 1991, "Imitate Me; Don't Imitate Me: Mimeticism in David Bartholomae's 'Inventing the University'," *Journal of Advanced Composition*, 11 (2) : 335-345.
- Elbow, Peter, 1973, *Writing without Teachers*, Oxford University Press.
- Turabian, Kate, 2018, *A Manual for Writers of Research Papers, Theses, and Dissertations: Chicago Style for Students and Researchers*, 9th ed., revised by Wayne Booth, Gregory Colomb, Joseph Williams, Joseph Bizup, William FitzGerald, University of Chicago Press.
- 井下千以子, 2008,『大学における書く力――認知心理学の知見をもとに』東信堂.
- 大島廣, 1930,「田中義麿, 科學論文の書き方, 菊版129pp., 東京養賢堂發行, 昭和四年十月, 正價壹圓七拾錢」『動物学雑誌』 42 (497): 126.
- 逆上がり習得のコツ, 2022,「さかあがり習得　チェックシート」（22.11.13取得, https://www.sakaagari-kotsu.com/sakaagari_checksheet.pdf）
- 田中義麿, 1929,『科學論文の書き方』養賢堂.
- 西口啓太, 2019,「米国大学におけるライティング教育の歴史的変遷――1860年代から1980年代までの学習支援体制の視点から」『教育科学論集』神戸大学発達科学部, 22: 1-11.
- 西谷内博美, 2022,「日本における大学ライティング教育の変遷― ―プロダクト、プロセス、脱アカデミア」『東京電機大学総合文化研究』20（掲載予定）.
- 二通信子・大島弥生・山本富美子・佐藤勢紀子・因京子（2004）「アカデミック・ライティング教育の課題」『2004 年度日本語教育学会春季大会予稿集』pp.285-296.
- 森本和寿, 2022,「ライティング教育における『ヴォイス』 ――高等教育における表現と省察に関する実践的検討」『大阪教育大学紀要』70: 191-207.

公共政策研究科とアカデミック・ライティング

ー公共政策研究科修士課程・博士後期課程の経験からー

2022年11月26日
伊　藤　哲　也
博士（公共政策学）・専門社会調査士

自己紹介

伊藤哲也：博士（公共政策学）・修士（公共政策学）・専門社会調査士

○　2015年4月法政大学大学院公共政策研究科修士課程に入学。2017年3月修了。1年間空けて、2018年4月法政大学大学院公共政策研究科博士後期課程入学。2022年3月修了。学部は他大学の法学部法律学科を卒業。法学部法律学科は卒業論文がない大学も多く、卒業論文の執筆経験なし。

○　地方議会（議会費等）を主に計量分析により研究。計量分析に当たっては、自治体決算などの自治体財政に着目をすることも多く、地方財政と政治学を結びつけるような研究に着目。計量分析の手法を学ぶために博士後期課程入学後に社会調査法（修士課程授業）を学ぶ。

○　修士論文は「決算分析等から見る地方議会の自治体政策等への関与に関する研究　～大都市（人口　20　万人以上）における分析から～」、
　博士論文は「議会費の状況と自治体運営　ー決算統計等から分析する平成の市区町村議会ー」。

○　修士課程、博士後期課程を通じて指導教員は廣瀬克哉教授。

参考:年表(公共政策研究科と筆者)

年度	公共政策研究科の出来事（公共政策学専攻を中心に）	公共政策研究科の博士号（甲号）の授与数	筆者の出来事
2012	公共政策研究科公共政策学専攻開設（4つの研究科が基礎） 『公共政策志林』創刊	0	○基礎となった4つの研究科：政治学（夜）、政策科学、環境マネジメント、政策創造政治・行政プログラム。
2013		2	○公共政策学専攻に4コース設置：公共マネジメント、市民社会ガバナンス（現在の政策研究）、環境マネジメント、国際パートナーシップ。
2014		3	○環境マネジメント、国際パートナシップの2コースがサスティナビリティ学専攻に。
2015	博士論文提出要件として当年度入学から査読論文2本が必修になる。（当該年度入学から要件の変更）	6	修士課程入学（公共政策学専攻） 公共政策論文技法1（現在の2）履修
2016	サスティナビリティ学専攻開設（2つのコースが基礎）	5	公共政策論文技法2（現在の1）履修 修士課程修了（公共政策学専攻）
2017	公共政策学専攻博士後期課程においてコースワーク制及び科目の単位制を導入。（当年度入学から修了要件の変更）	9	『公共政策志林』に投稿論文掲載（1本目）
2018		5	博士後期課程入学（公共政策学専攻） 『公共政策志林』に投稿論文掲載（2本目）
2019	サスティナビリティ学専攻博士後期課程においてカリキュラム変更。（当年度入学から修了要件の変更）	7	『自治体学』（自治体学会）に投稿論文掲載 （他の学会誌等の投稿論文の不採用も2本）
2020		4	『公共政策志林』に投稿論文掲載（3本目）
2021		6	専門社会調査士（社会調査協会）認定 博士後期課程修了（公共政策学専攻）

出典：法政大学HP及び『大学院要項（法政大学）』から筆者作成。

2

アカデミック・ライティングとは

アカデミック・ライティングとは、学術的文章や学術的文章を書く技術を指します。学術的文章とは、授業レポート、卒業論文、修士論文、博士論文、投稿論文などです。つまり、大学・大学院で課される文章はアカデミック・ライティングの特徴やルールに沿っていなければなりません。アカデミック・ライティングの特徴は、二つあります。

第一の特徴は「分かりやすい文章」です。学術的文章では、専門的な内容を論じたり、まだ〈答え〉が発見されていない〈問い〉について論じたりします。時に、非常に複雑な概念や専門用語を用いて論を展開します。どのような内容であっても読者に伝わらなければ文章の意味がありません。そのために、書き手は思考（考え）を整理する必要があります。

第二の特徴は「科学的な文章」です。アカデミック・ライティングでは主張を裏付ける根拠の提示が求められます。この点が中学校や高校で書いてきた文章と大きく異なる点です。主張を裏付ける根拠とは、先行研究、文献やデータなどさまざまです。

※下線は筆者によるもの。

出典：早稲田ウィークリーHP、
https://www.waseda.jp/inst/weekly/feature/2014/06/23/20860/#、2022年11月3日取得

3

アカデミック・ライティングで心掛けたい6つのポイント

○一文一義
　一文に一つの事柄を書きます。丁寧に一文一文を積み重ねると緻密な文章になります。
○語句
　「語句」の意味範囲を意識して使うと、読み手に正確な情報が伝わります。また、専門用語は定義して使いましょう。
○構成
　学術的文章は「序論・本論・結論」という構成になっています。序論で本文章の目的を示し、本論でその論証を行います。結論では本論を再度まとめます。
○〈問い〉と〈答え〉
　学術的文章では、〈問い〉（＝何を論じるのか）と〈答え〉が必要です。どこに〈問い〉と〈答え〉が書いてあるか、〈問い〉と〈答え〉が呼応しているか、確認しましょう。
○パラグラフ・ライティング
　パラグラフは［中心になる一文（トピック・センテンス）＋それを支える情報が書かれた文］で構成されています。パラグラフを積み重ねていくことで緻密な文章になります。
○主張と根拠
　まず、その文章の主張が端的に分かるように書きます。次に、その主張について論証していきます。論証には根拠が必要です。客観的で適切な根拠を示せていますか。確認しましょう。

※下線は筆者によるもの。

出典：早稲田ウィークリーHP、https://www.waseda.jp/inst/weekly/feature/2014/06/23/20860/#、2022年11月3日取得

4

公共政策研究科学位授与基準（抄）

公共政策研究科学位授与基準

修士論文	政策研究論文	博士論文
①公共政策課題を適切に取り扱っていること ②課題に関する歴史的経緯と社会的背景について理解し、記述できていること ③論文としての形式を備え、論理的に一貫していること ④データ、資料の収集、整理、分析に工夫を施していること ⑤課題に関する学問上の先行研究を検討し考察を加えていること	①公共政策課題を適切に取り扱っていること ②課題に関する歴史的経緯と社会的背景について理解し、記述できていること ③論文としての形式を備え、論理的に一貫していること ④データ、資料の収集、整理、分析に工夫を施していること ⑤適切な政策提言を行っていること	①公共政策課題を適切かつ独自の視点から取り扱っていること ②課題に関する歴史的経緯と社会的背景について十分かつ独創的に分析し、説明していること ③学術書として公刊可能であり、論理展開が明快であること ④社会調査を含む、データ、資料の収集、整理、分析に独自かつ専門的な工夫を施していること ⑤課題に関する学問上の先行研究を網羅的に検討し、正当な批判を加え、新しい学説を提示するなど、学会への貢献が認められること ⑥独創的かつ現実的な政策提言を行っていること

出典：法政大学HP（https://www.hosei.ac.jp/documents/gs/kenkyuka/2019_12_kokyoseisaku_gakui.pdf）から2022年11月4日取得。

⇒　修士課程の修了時点で、アカデミック・ライティング（の基礎）が修得できている。（特に修士論文の③、④、⑤）

5

アカデミック・ライティングをどのように身に着けてきたか（修士課程）

○　見よう見まねで書いていた修士課程というのが正直なところ。
　今考えれば、学部時代に卒業論文がなかったことも論文執筆に影響。

○　公共政策論文技法1（現在の2）は参考になった。初回の60分位だったと思うが、後にも先にもいわゆる論文お作法はここでしか授業がなかったし、ゲストスピーカーである修士論文執筆者の執筆体験の話もアカデミック・ライティングの面でも参考になった。
（公共政策論文技法1は、事実上、公共政策研究科の必修科目だった。）

○　論文指導ゼミが修士課程と博士後期課程の合同ゼミだったので、指導教員の他、博士後期課程のゼミ員からも指導を受けることができた。

○　第１回法政大学大学院公共政策研究科院生会シンポジュウム（大学院の研究を社会で活かすには）（2016年2月9日）での修士号及び博士号取得の先輩方の発表も参考になった。
・「『修士論文が一番きつかった』という声」
・「（修士論文は）研究方法を学ぶという意味で自分の研究活動の中で重要な位置を占める」
・「良い査読者は執筆者と査読者のコミュニケーションによって論文の質を上げるようなコメントをくれる（査読者コメントは勉強になる）」など

アカデミック・ライティングをどのように身に着けてきたか（空白の1年）

○　修士課程修了後、大学院には残りませんでしたが、修士課程で身に着けてきたことの確認の意味もあり、『公共政策志林』（大学院研究科紀要）の査読付き論文に初投稿。（修了生も投稿資格があります）

○　『公共政策志林』には、投稿のため執筆要領があるので、いわゆる形式面での論文お作法も投稿論文の執筆に当たって体系的に確認ができた。これが自分自身の論文執筆時の基本スタイルに。（投稿先の学会等により執筆要領が異なるのでその点は注意）

○　いただいた査読コメント（公共政策研究科の先生方等で査読）を読むと、『公共政策志林』は論文の通信教育だと認識。論文の書き方を再度確認する良い機会になった。

（査読コメント例）
本論文は、先行研究や先行調査（以下では「先行研究等」とする）を丹念に実施している点は評価できる。一方で、先行研究等ですでに明らかにされている部分はどこまでであり、その先行研究等をうけて、本論文の議論のどの点に新規性があるのか、議論の枠組みの立て方が新しいのか、などについては、やや薄い感じがする。この点は、より明確にされるとよい。特に14 頁に「仮説」が提示されているが、その仮説提示と先行研究等の関係がやや薄い感じがする。先行研究等を踏まえた、本論文の新規性については明確にしておくべきと考える。

参考:『公共政策志林』執筆要領(抄)

『公共政策志林』執筆要領 (2020 年度)

1. 原稿の長さ

ア) 和文原稿の長さは、「研究ノート・投稿論文」(※学生執筆論文)、「寄稿論文」(※教員執筆論文) とも 24,000 字を上限とする。字数には和文表題・英文表題・図表・注・文献リスト・和文要旨を含む。ただし、コース・専攻で承認されれば特例として上限を 48,000 字とすることも認める (希望する場合は投稿申込書の該当欄に記入すること。希望が認められたかどうかは 7 月中に編集委員会から通知する)。

イ) 英文原稿の長さは、「投稿論文」「寄稿論文」とも、1 万単語以下とする。単語数には表題・図表・注・文献リスト・英文要旨を含むが、和文要旨は含まない。

2. 要約

ア) 和文の「投稿論文・寄稿論文」には和文要旨 (600 字程度) をつける。

イ) 英文の場合には、英文要旨 (200 語程度) および和文要旨 (2,000 字程度) をつける。

3. 書式

原稿の書式は、以下のルールに従う。

ア) 原稿は、A4 版の用紙を使用して、40 字×36 行 (明朝体 10.5 ポイント) で見やすく印字する。各頁には、行番号と頁番号を付ける。

イ) 「投稿論文」「寄稿論文」は、和文表題・英文表題・和文要約・キーワード・本文・注・参考文献の順序で構成する。

ウ) 英文活字は、Times New Roman を使用する。

4. 表記法

ア) 節、項には半角数字を用いて、それぞれ「1.」「1.1」「1.1.1」のように記す。

イ) 数字は、原則として、半角のアラビア数字とする。ただし、「第一人者」「第三者」「十人十色」などは漢数字を使用する。「、」「。」「(　)」「=」などの記号類は全角文字を用いる。

ウ) 暦年は西暦で統一する。元号を使用する場合には、「2011 (平成 23) 年)」のように記す。

エ) 外国人名や外国地名はよく知られたものの他は、初出の箇所にその原綴りを「シン (Peter J. Shin)」のように記述する。

8

アカデミック・ライティングをどのように身に着けてきたか(博士後期課程)

○　博士後期課程に入学後も研究に必要なスキルを身に着けるために修士課程の授業(社会調査法1～8等)を履修。授業の中で論文の書き方を再認識。(社会調査法の履修により専門社会調査士の資格も得る)

○　博士論文の提出要件として査読論文2本(うち1本は『公共政策志林』も可)という条件があるため、提出要件も意識しながら、査読論文の投稿は積極的に実施。

→査読のコメントは採択不採択に関わらず勉強になる。論文の形式論に係るコメントもある。

(ただし、査読論文(特に学会誌)にアカデミック・ライティングの教育機能を求めるのは、本来的な話ではないかもしれない。)

(コメント例)

○そして、本研究の結語であたる「５．おわりに」の第3段落「本論文では論じなかったが、総合議決条例については・・・・」の箇所で「長により議会の権限が実質的に調整され、政策決定に与える影響が調整されるという事である」と指摘されている。これは理論的には大変重要な視点である。これが実証データから支持される、あるいは、否定されることが示されるならば、本論文は日本の地方政治研究へ貴重な理論的貢献をなすものとなろう。しかし、「本論文では論じなかった」のであるから、裏付けとなるデータが記載されていない。そして、そもそも、論文の形式論として「本論文では論じなかった」内容を結語の部分で扱うことは不適切であると言わざるを得ない。

9

まとめ（話題提供）

１　学際的な研究科なので、様々な学部学科卒業の大学院生が在籍していると思うが、コースの性格上、公共マネジメントコースなどは、卒業論文の執筆経験がない法学部法律学科卒業の大学院生が相当数いるのではないか。（事務系公務員は法学部法律学科の出身が多い）

２　論文指導ゼミの構成（DとMの合同開催か個別指導かなど）により非公式にアカデミック・ライティングの指導を受ける機会が異なっているのではないか。（DからMへの助言の機会等）

３　査読論文の投稿を基本的に行わない修士課程の大学院生には、レポートや修士論文の執筆に向けて標準的な執筆要領を示すことも考えられないか。（博士後期課程の大学院生の場合は、査読論文の投稿先の学会等の執筆要領に準じればいいので。）

４　博士後期課程の大学院生等のアカデミック・ライティングの向上のために、大学院研究科紀要である『公共政策志林』の仕組みを活用することも考えられないか。

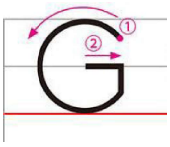
10

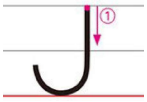
基本が大切

例えば、小学校で習う算数の**単位表記**

2ℓ　→　2L

例えば、中学１年で最初に習う**アルファベット**

G　→　 

J　→　 

葉書きを持って初めてポストが見える

◆**社会人**大学院生は、「職場（職種）の用語・文章文化」を持つ（馴化）

❶例えば、新聞記者も学術文章に苦労した経験
❷違いに気付きにくい学術の**文言**・・（よって→**したがって**・１番高い→**もっとも**高い）etc
❸研究中の**盲点**・・優れた先行研究を読んでも、“文章・記述展開“に気付かず内容に注意
❹**一文**の注意・・二義文（〇〇の**ように**～**ない**→異なり？同様に？）・主語/結語の呼応・副詞
・長文→（ワンセンテンス/ワンミーニング）etc
❺**一章**の注意・・ 接続詞（出現頻度①「しかし」②「また」＊）・指示詞（こそあど）etc
❻全体の論述・構成の注意・・切り捨てる、組み立て替える「**勇気**」

参考＊石黒圭『論文・レポートの基本』2012.3　日本実業出版社

❷ 例えば

話しことば	書きことば
とても/すごく	非常に/きわめて
そういう	そのような
もっと	さらに
だんだんと	次第に
いつも	常に
たぶん	おそらく
でも	ところが/しかし
やっと	ようやく
だけでなく	のみならず
では	においては
するため	すべく
だったら/しないで	なら、であれば/せずに
〇〇するくらい	〇〇するほど

アカデミック・ライティングの基本は どのように身に付けるのか？

査読論文で、初めて「学術論文お作法」の洗礼

❼論文は、「書く」「仕上げる」だけでは「論文」にはならない
❽誤字脱字のチェックだけでもない
❾明晰な学術的文章・構成を編む「**知見を説く力**」が要る
❿修士では、機会が限られる　→早期に　**意識付けの仕掛けが要る**

・・*基本を身に付けるには、早い段階で作法に触れ合い、躓きながら、*
指摘されながら、時に立ち止まりながら、（そして凹みながら）

学術論文を留意して読む！　そして倣って書く・書く・書く・書く！

6

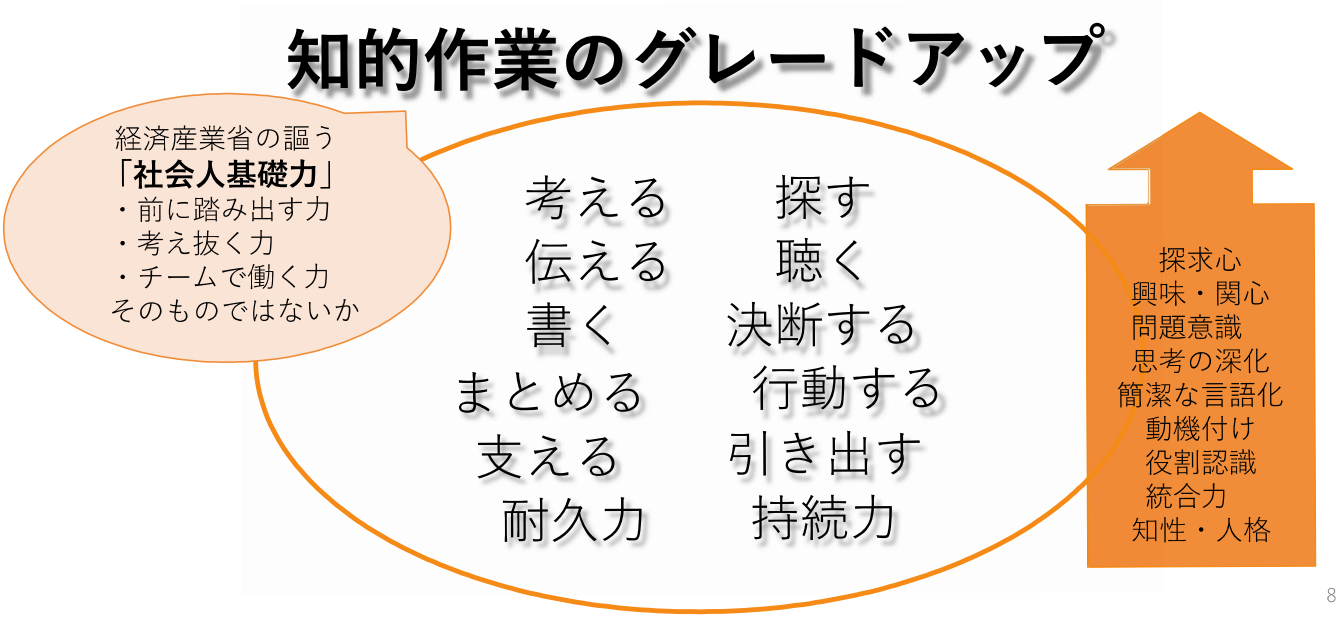
田中のアカデミック・ライティングの学び

⓫学習過程において授業レポートの課題に「書き方の提示・指示」
⓬クリティカル・レビューの課題や練習
＊先行研究を取り上げ、批判的に読み、自論を説くなど
⓭先生方のレジュメ、授業内の言葉、論文も参考とする
⓮自分の躓き・弱点を表などにまとめ一覧を作成する
⓯学術的文章の習得は日常の職務でも反復練習、役に立つ
⓰パワー・ポイントの弊害?!
＊箇条書き・要点のみ、の繰り返しに注意
⓱修士論文は、学会賞受賞論文数本を手本とした（マネる→マナぶ）
⓲言葉＝思考　アカデミック・ライティング研鑽は、日頃の「言葉遣い」

ニック・ランド『言語と思考』2006.6　新曜社

7

社会人院生にとってのライティングを学ぶ意義



2022年11月26日（土）14:00～17:00
法政大学市ヶ谷キャンパス
外濠校舎S306教室並びにオンライン

法政大学大学院公共政策研究科設立10周年記念シンポジウム報告書

2023年2月13日

法政大学大学院公共政策研究科
（大　学）〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1
（大学院）〒162-0843 東京都新宿区市谷田町2-15-2